

將軍義尹
歸洛

高來の有馬左衛門〔門脱〕佐尙鑒、彼杵の大村日向守純治、肥後國には菊池肥後守義國、相良宮内少輔義滋、薩州の島津陸奥守忠昌名代子息 又八勝久日向國に伊東修理大夫祐秀豊後に大友の一族、豊前に城井長門、對州に宗讚岐守義盛以下、悉く順風を待つて相集る。然れども彼此の用意に滞り、漸く五月下旬義尹公、防州の湊を御出船あり。諸將同じく御供にて、兵船數千艘纜を解き、兵庫和田の御崎に到りて著船し、是より陸を御供して、六月初旬尼ヶ崎に著き、同八日御入洛なり。宗讚岐守は、先祖代々福祐〔裕〕の者にて、將軍今度御上洛の用意海陸の事まで様々取繕ひ、特に忠節ありしかば、義尹公深く御感まし、翌くる永正六年、讚岐守へ屋形號をぞ下されける。今年筑前國三笠郡の年貢、大内と少貳半納分。

宗讚岐守義盛朝鮮國を攻むる事

永正七年庚午四月、對州の守護宗讚岐守義盛、同能登守盛弘相議して、朝鮮國を攻むべしと、兵船を揃へて押渡り、同四日、釜山浦の湊に著船す。抑、當家、朝鮮に船を

宗義盛朝
鮮を討ち
敗れて歸
る

盛弘討死

渡す事、去ぬる嘉吉年中より以來數十箇度なり。之に依りて彼の國の者、怯弱なる事を能く知り透しければ、大に思ひ侮りて、義盛、盛弘陸へ上ると均く、其武備をもなさず急に貝鉦を鳴らし、鬨の聲を揚げ、民屋に火を懸けて所々へ討ち入り亂妨す。斯かる處に、朝鮮人何十萬とも知らず、十方より馳せ集る事蟻の如く、義盛、盛弘を取圍み、半弓〔マ、〕不盡弓を雨の如くに射懸く。兩人案に相違し、手の者を左右に従へ、前後を下知して打破り、馳せ通らむと働きしかども、異賊雲霞の如くに込重り、十重・廿重に圍みければ、千變萬化すれども力なく、大將義盛千死に入りて一生を得難くぞ見えし。同名能登守盛弘は、軍の體を見て是までと思ひけるにや。打物を捨て〔緋〕火絨の鎧を一淘ゆつて鎧突し數十萬集りたる敵中へ割つて入る。無雙の大力なりしかば、あそこに押付け一手に三人、爰に攻め臥せ一手に五人、ひつ爬み、四角八方へ打散らしけり。其勢に異賊恐れて少し引退くと見えし間に、義盛を遁して船に乗せ、盛弘は防ぎ終に討死しけり。生年三十一なり。斯かりしかば對馬の軍兵、生きて歸るは千に一つもなし。然るに同六月より盛弘、己が居所にある事存生

宗讚岐守義盛朝鮮國を攻むる事

の時に異ならず。對州の老若男女是を怪み、正しく亡靈ならむと窺ひ見るに、疑もなき生きたる人なり。扱は又實に其人かと見るに、平生に食物をせざりけり。野人村老斯かる稀有の事は前代未聞なりと、怖惶く事大方ならず。斯かりし程に、義盛是を憐み其靈魂を祭り、一社の神にぞ崇めける。今の對州高崎大明神是なり。然る處に朝鮮の兵船數十艘、對馬の豊崎へ著く。義盛大に悦びて一人も生けて歸すな。盛弘が孝養に悉く海底に切部〔捨カ〕よと、自ら眞前に進み、數百人の朝鮮人共、一人も残らず討殺しけり。其後は互に商船をも渡さずして、暫く海上和異の通路も絶えたりけり。

高崎大明神は宗盛弘を祀る

筑紫滿門馬場頼周の爲に討たる事

永正十八年辛巳、改元あつて大永と號す。後柏原院の御宇義澄將軍の御治〔世カ〕天なり。此時筑前國勝尾城主筑紫下野守滿門といふは、元來少貳の一族にて、少貳恩顧の者なり。尤も本家に對し、何様二心なく仕へし處、去ぬる明應六年、防州の大内、少貳

筑紫滿門大内に降少貳氏を攻む

政資退治の爲め筑前へ渡海し所々に於て合戦す。時に新少貳高經、勝野尾に支へて相挑みしに、此滿門と東向盛、大内へ降參し却つて少貳を攻めける間、高經軍に打負けて肥前へ來り、終に父子一門悉く滅亡しけり。某後大内介、彼の滿門が軍忠を賞し、筑前國の内那珂三笠・早良、肥前國の内基肆・養父・神崎等の所々を與へしかば、滿門既に大身となり、偏に少貳家全盛の時に異ならず。ある時は小城へ發向して、千葉胤資の餘類を征伐し、ある時は佐嘉・神崎へ出張して、少貳の殘黨を誅罰す。然るに滿門、今年大永元年、筑前國寶滿の上宮を建立す。去ぬる永正十五年に炎上せしに依りてなり。抑、彼の寶滿岳と申すは、九州第二番の高山、半腹より頂上は岩石劍の如くにてすさまじく、見上ぐるに巖眼上に打覆ひ、數千丈の屏風に似たり。斯かる峻岨を厭はず彼の大宮を再興しけり。又同三年癸未閏三月、神崎櫛田宮を修補して、御神體を新造し、寶殿の上葺・庇・縁造替へ御階を新造す。遷宮は同月廿七日なり。時に當社の別當は東妙寺五室全契、宮柱は執行治部大輔伴兼貞、本告新次郎・藤原頼景にて、御遷宮事故なく成就しけり。此御社は往古より稻田姫を崇め奉

滿門諸社を建立修復す

筑紫滿門馬場頼周の爲に討たる事

り、異賊退治の御祈願所にておはします。昔は一箇年に七度の御祭あつて、度毎に勅使を立てらる。執行本告といふも、其勅使下向あり、洛へは歸らずして在國せられし子孫なり。當社修造の事、去る長享三年己酉六月三日、少貳政資の代に造替へられしかども、世の亂に隙なくして、遂に遷宮はましまさず朽果てしを、此度満門、修補を加へ三十五箇年にして御遷宮ありけり。然るに満門が塔に、馬場肥前守頼周といふ者あり。是も少貳の一族にて、東肥前綾部の城に居住しけり。彼の頼周、元より少貳股肱の臣にて、忠貞他に異なりしかば、内々満門が大内方に翻りし故、少貳家滅亡し、其伴類までも浪々しけるを、骨髓に徹して憤りしかども、舅の事なれば胸を押へて年月を送り、時々満門を賺し、何とぞ元の如く少貳方になさむと計らひけれども、満門更に承引せず。頃日は嫡子刑部大輔石州に至り參陣せしめ、大内に忠節を勵しければ、頼周今は堪へ兼ね、満門を我が館へ押寄せ誅せむとぞ工みける。されども満門もさる古兵にて早推量し、散けて頼周が許へ入り來らず。然る折節、頼周の子供疱瘡をぞ煩ひける。頃は太永四年正月半ばの事なるに、頼周妻

満門馬場
頼周の諫
を用ひず
途にして
討たる

女に向つていひけるは、おことが父満門、我等を異心あるよと疑ひ給ひ、常に見え來り給はず。我等は夢計りも別心なし。當時子供の疱瘡を痛はる事、おことが方より告知らせ申して、祖父子を招き孫共を見給ふ様に誘ひ候へとぞ申しける。女房は頼周が目打たゞき、〔眞力〕直顔に云ひ聞かせけるを、僞とは露知らず尤もと思ひて、急ぎ文を認め父満門へぞ遣しける。満門披きて見るに、疑もなき我が娘の手跡なれば、さのみはいかで堪ふべき。さらば綾部へ打越し、孫共の氣色をも伺ふべしと、正月十八日父子三人、あり合ふ家人等召具して、綾部にぞ赴きける。寔に屠所の羊の歩とは是ならむ。程なく頼周が城に著く。満門父子則ち寢所に入りて孫共の體を見る。其時に臨んで、頼周が風情、何とやらん怪しく心中に邪謀あるよと、女房漸く了り知りしかば、頻りに泪をぞ流しける。さしもの満門、是を推量せざるこそ運の極なれ。扱満門、外の廣間に出でて坐す。此満門は、隱形の法を行ひて、木の葉隠れの妙を得たりしかば、頼周寸時も油断せず合圖を定め、易々と満門父子三人、當座を遁さず討取りけり。少貳の家に對しても忠心の致す所とはいひなが

満門殺さ
る

ら、情あらざる振舞なり。さても頼周が妻女の歎きいふ計りなし。頓て夫に暇を乞ひ、緑の髪を剃りこぼし、出離菩提の道に入りけるこそ理なれ。満門討たれ若黨共に切死し、残りし者共勝尾に走り歸りて、事の由を告げたりしかば、筑紫の一族家人等數百人、物具^{ひしく}犇々と差固め綾部へ馳せ向ふ。されども頼周用心稠しく、半途に大勢を伏置き是を追崩しけり。頼周は多年の鬱胸を一時に晴らし、悦ぶ事限なし。然るに此折節、千葉介胤勝といふは、少貳の親族横岳兵庫頭資貞の子、童名は満童丸。前千葉介胤資の後家日光明胤尼の養子なり。此胤勝、もと少貳骨肉の一家なりしに、如何なる謂やありけむ。是も少貳を背いて頃日大内へ隨ふ由相聞ゆ。斯かりし程に、頼周是をも諫めむと、彼の長臣三人の方へ送りし狀に曰く、

□□□□今日廿五日到來令披見候。如承當家之事、今度□滿門惡行奉□一家無餘義在々所々牢籠之體□□前代未聞之儀不及言語候。雖然□□勿憚改任先言、此節立還當初、國家再興肝要之由、度々對滿門雖述愚意候、□無許容候。剩筑紫刑部大輔至石州令參陣、勵忠節、心底無別條之儀候之間、對等者不及力

候條、彼父子三人討取候。爰許輒任所存候次第、併當家御曾祖父様之御計らひにて歟。天道顯然殊勝之至候。於此上は國中平均令調熟、東西靜謐之儀肝心之由、此前對老中以兩使申述候。就中千葉家之事、如前々當家於和合者、尤專一相存候處、尙以大内御隨逐難被捨思召候而、少貳家可有退治御才覺、方々江之廻文無其隱候。乍恐胤勝之事、輕重義興可被荷擔事筋目相違候、誠に無是非候。然處へ對老中可相渡之由承候。更不及信用候。先度滿門生害の刻茂、頼周一身可及安穩無覺悟候。偏對國家可身命振舞存候。各、分別之前に候。生得依正直之思慮、神明之御擁護にて不慮存命候。今以無忘却候。於當城少貳家之望不可有餘義言上、老中へ可申合事、久家通法非分に候。所詮胤勝被懸御意候者、以向可申談候。若又大内御隨可首尾、此等之趣、能々心得才覺可然。兩郡中之事茂、對當家代々忠切之辻無紛候條、眞實國中安全之儀被存候者、無偏頗様可預異見事無餘義旨、御納得可令祝著候。旁々難盡紙上に付閣筆候。恐々謹言。

二月廿五日

頼周判

副島中務少輔殿

神代兵部少輔殿

龍造寺左衛門佐殿

私にいふ、右此状を以て見るに、此時までは少貳資元、未だ家を興さざるか。又舊證文にも、資元永正十四年の頃、藤津の山中に蟄居。時に長臣宗伊賀守氏茂隨身と、定是を以て之を考ふるに、此書に載する所永正の初、資元世に出づるとは非なり。然れども九州の諸記尤斯くの如し。

扱も筑紫満門討たれし後、其怨靈荒びて怖しき事ども多かりけり。されば今の世までも綾部の城の奮跡に、月曇り雨暗き夜は、叫喚の聲啾々と人の心を惱せり。ある時此所の土民、草を刈りて馬に付けて其上に乗り、満門が墓の邊りを通りしが、忽ち逆に落ちて悶絶しけり。在所の者驚き、山伏を請じて祈りし處に、自ら口走り、我は筑紫満門といふ者なり。昔此所に命を盛め、多くの年月を歴ると雖も、魂

満門の怨靈

千葉介胤
勝浪人す

は猶留まりて、折しも今朝卯の刻より申樂を興行し、自も舞ひ遊びし所に、下々といひながら馬に乗りて、舞臺の前を通る條奇怪の至なり。然れども之を免し命は助くるぞとて、物付は汗水になり寝入るかと思て又息を出す。二百餘年の星霜は送ると雖も、其魂は猶青苔に残る事、不思議なりし次第なり。

同大永四年の夏、小城の千葉介胤勝、馬場が諫を用ひずして、彌、大内家へ志を通ずる由聞えしかば、加世中佐嘉の龍造寺蓮池の小田いひ合せ、四月六日より小城へ取懸け、九日より詰陣、胤勝軍に打負けて、五月十二日落城に及び、己は密に落失せけり。時に同名興常同子息嘉胤小城へ歸入る。彼の父子、頃日は胤勝が爲め出張して他所にありしとぞ聞えし。其後胤勝、勢を率し、同七年正月七日、加世へ出張して、同名興常と相戦ふ。此時千葉勢に、岩部を初め加世四人の嗜野田・蒲原・中原・貝島以下三百餘人討死しけり。胤勝近年筑前へ浪人す。

少貳冬尙元服の事

少貳冬尙元服の事

少貳冬尙
元服

同八年戊子、享祿と改元す。此時、少貳松法師丸と申すは、肥前守資元の子なり。父資元は大内介が爲め、過ぎし永正の頃藤津山中に蟄す。附従ふ家人には、宗伊賀守氏茂のみなり。然るに資元、時の管領細川右京大夫高國を頼み、將軍家へ訴へ、今年の夏、彼の松法師冠者を元服させ、興經と名乗らせ、太宰少貳になして屋形號を申し給はり、神崎勢福寺の城に据ゑ、馬場江上を以て後見とす。此興經、中頃は時尙とも號し、後には冬尙とぞ改めける。斯くて資元、其威漸く耀きて上松浦へ旗を進め、獅子日割の兩城を初め、所々の松浦黨を皆切隨へ、夫より累代の地太宰府へ打入らむと。先づ西筑前まで出張す。此事、中國へ隠れなし。大内介義興、急ぎ將軍義晴公へ訴へて、少貳父子を退治せむとす。されども御許容なかりけり。此時、大友修理大夫義鑑へ對し、引付衆の内大館左衛門佐より來りし狀に曰く、

就_レ少貳殿之儀從_レ大内左京兆御下知之事被_レ申上_レ候。然_レ者無_レ承引_レ候。可_レ御心安_レ候。爲_レ御意得_レ申入_レ候。旁々具充演可有_レ御申_レ候。恐々謹言。

七月十日

大館右衛門佐晴光判

大友修理大夫殿

北肥戦誌 卷之八 終

少貳冬尙元服の事

北肥戦誌 卷之九

肥前國野路宿合戦の事

同年の冬、周防國山口の城主大内左京大夫多々良朝臣義興、病惱に迫る。然るに十二月廿日卒去せらる。此人は随分朝家の輔弼にして、従三位太宰大貳に昇進あり。且つ將軍家の後見鎮西の貫主たりしに、闇夜に火を消したるが如し。斯くて明くる享祿二己丑の春、子息周防介義隆、百六代後奈良院の御宇、公方は足利十三代權大納言義晴公の御治世なり。然るに此度義隆、繼目の祝儀として探題澁河右兵衛佐尹繁の許より、防州へ使者を送られ、義隆并に長臣陶尾張守興房が方へ一書を用ひらる。義隆よりの返札に曰く、

御札之趣恐悦候。殊爲祝儀御太刀一腰令拜受候。畏入候。仍同一振進覽之候。

大内義興
逝去

猶杉三河守可得御意候。恐惶謹言。

三月廿八日

周防介義隆判

謹上探題人々御中

斯くて義隆、父の家を繼ぎ、大内介になりて鎮西に威を振ひ、同享祿三年庚寅の春、少貳資元父子退治仕るべきの由、頻りに將軍家に訴へ、既に御免を蒙りしかば、其趣、早速筑前の守護代杉越前守興連が方へ下知を加ふ。斯かりし程に、興連頓て廻文を以て、筑前の軍士を相催す。其頃少貳資元は、西筑前にありけるが、此事を聞き、さらば肥前へ引返し、味方を集めて合戦すべしと、急ぎ神崎勢福寺城に赴き、子息冬尙と一つにならる。斯くて大内勢杉興連を初め、少貳父子の居られたる勢福寺城を攻めむと、四月下旬、先づ東の口基肆養父三根三郡へ討ち入りしかば、少貳万にてありつる筑紫能登守尙門朝日左近將監頼貫横岳讚岐守資貞を初め、東肥前の城持共、悉く城を開いて降参す。是等は皆少貳家股肱の輩なり。千葉介胤勝、其頃筑前に浪人してありけるが、是も實父横岳と同じく大内方に馳せ加はる。杉興連、大

大内義隆
少貳資元
を攻む

に力を得、此勢を先陣に討たせて三根郡に陣を取る。少貳父子は勢福寺城にありて是を聞き、さらば勢を半途に出して戦ふべしと、軍兵を集めらるゝに、先づ中佐嘉龍造寺山城守家兼・子息右衛門大夫家重・同三郎兵衛家門・同名伯耆守盛家・蓮池小田九郎政光・直鳥犬塚安房守家清・子息山城守尙家、其外少貳譜代の輩には、馬場肥前守頼周・江上石見守元種・宗筑後守秀恒・出雲民部大輔頼通・姉河彈正少輔弼惟安并に本告左馬允頼景・執行治郎大輔兼貞以下、佐嘉神崎の軍士參陣す。少貳、此等の輩を下知して、田手繩手・野路宿の邊へ差向けらる。斯くて大内方の軍兵、三根郡を立つて享祿三年八月十五日、勢福寺の城を攻めむと野路宿に打臨む。少貳勢、敵と見るより太鼓を早め、鬨の聲を揚げて亂れ合ひ、暫し戦ふと見えたりしが、大内勢の先陣忽ち打負けて、朝日左近將監頼貫矢庭に討たれ、其一の軍兵、既に敗せむとす。二陣の大内勢、荒手にて入替り、頻りに進んで相戦ひ、合戦半ばなりける時、少貳勢の内、龍造寺の陣より鍋島平右衛門清久・子息左近將監義房・次男孫四郎清房、手勢を引分け、田手繩手の南の方へ回つて、大内勢に切懸らむと時分を見繕ふ。時に

野路宿合戦

大内勢敗北

大内方筑紫横岳千葉の手の者、一戦に利を得、少貳勢を追立て、野路宿の西の繩手に到る。是を見て鍋島の一系列中にも、野田河内守清孝が赤熊武者彼此二三百人、一同に喧と南の方より横合に、大内勢に切つて入る。爰に於て大内方の輩、散々打負けて宗と頼みたる横岳讚岐守資貞・筑紫能登守尙門討たれ、千葉介が手の者にも、仁戸田瓦東郷・秋光長門守父子討死し、大内勢悉く敗北して、千葉介は引退き、杉越前守は漸く遁れて太宰府へ引返しけり。斯くて少貳は合戦に打勝ち、龍造寺一家の軍功を賞せらる。此時又龍造寺山城守家兼、今度鍋島父子の忠戦を感賞し、清久の子供の内を、孫婿にとるべき由所望ありけり。清久是を應諾し、嫡男左近將監は早妻室ありしかば、次男孫四郎を以て、家兼の長男右衛門大夫家重の嫡女に契約あり。家兼悦び中佐嘉の内本庄八十町の所を、孫四郎清房へ聲引出物にぞせられける。

龍造寺山城守家兼、天文七年戊亥法體。法名剛忠。

同子息右衛門大夫家重時に享祿二年の頃。同右衛門大夫尙純時に天文四年の頃。豊後守家純に改む。

肥前國野路宿合戦の事

或記にいふ、龍造寺、鍋島を聲にとりし事は、天文五年木原軍の時なりとも。

陶尾張守入道道麒九州渡海所々合戦の事

翌くる享祿四年辛卯の春、豊後の屋形大友修理大夫義鑿、筑後國星野筑後守親忠が生葉妙見城を圍みて攻め戦ふ。親忠籠城する事、既に三箇年に及ぶと雖も、堅固の要害なれば落城せず。結句菊池左京大夫義國、星野に同心し、其上中國に到つて、大内介義隆に加勢を乞ひしかば、義隆頓て太宰府へいひ送り、杉越前守が方へ、急ぎ星野へ加勢すべき由下知せらる。斯かりし程に興連、早速軍兵を用意し筑後へ差遣す。其頃少貳資元は、多久の城にありけるが、此由を聞きて、其義ならば自身筑後へ發向し、大友に力を付けむと三月十四日、多久を打立つて、先づ上松浦通りに筑前の内を過ぎ、上筑後へ入らむと山路に懸られしに、佐嘉の龍造寺山城守・高木右京大夫・松浦の相知・廣瀬以下馳せ加はり、其勢三千餘騎になりて、筑前の岩門に著陣ありしかば、小田部・重松・曲淵追々來り加はりて、既に大勢となり、閏四月岩

門を立ち三笠郡を打通り、上筑後の生葉に著陣あり。斯くて資元、大友義鑿の陣所に入りて對面し、星野初め敵征伐の事を評定あり。則ち帝都へ注進し、管領細川右京大夫高國・引付大館左衛門佐晴光に屬きて、星野以下の逆徒追罰の事、上意を蒙りたきの由、將軍家に訴へ申されし處に、頓て上聞に達し、大友少貳が申す處に任せられ、御教書を成下されけり。兩將悦び逆徒退治の上意を蒙る由、隣國に觸廻して、彌、星野を圍攻む。扱大内介が守護代杉興連を追落さむと、明くれば天文元年壬辰、大友少貳・千葉介三家軍兵を合せ、杉越前守興連が太宰府岩屋城を攻めたりけり。是れ大内と大友が義絶の初となり。興連、大勢の敵を引受けて防ぎ難く思ひしかば、急ぎ防州へ注進し、義隆の方へ加勢の兵をぞ申請ひける。大内介驚き、延引すべきにあらずとて、同五日陶尾張守興房入道麒を大將にて、周防・長門の軍士を率し、杉が後詰として筑前國へ差遣す。陶入道、既に兵船を揃へ、大勢筑前へ著くと聞えしかば、岩屋城を攻めたりし三軍の寄手、叶はじと思ひけむ。一人も残らず退散す。然るに道麒、一戦にも及ばず宰府に入り、杉に對面して軍の評議を

陶道麒九州
に渡海

極め、其勢を合せ少貳方の者共と、多々良濱に於て散々相戦ふ。少貳勢、利を失ひ立花城に引籠る。中國勢の内、杉が子息十郎隆連、中にも進んで少貳方の追ひく博多・宮崎に陣を張る。爰に於て高祖の原田五郎隆種・青山の留守・鏡の草野、其他近隣の武士悉く隆連が陣に馳來る。斯かりし程に、杉・陶が軍兵、雲霞の如く博多・鳥飼・太宰府の邊に群り充滿す。然るに道麒、興連と談じて軍を二つに分け、其身は星野が後詰の爲め、筑後へ打越えむと博多を立ち、那須郡に入りて粥田庄秋月の事を討つて通る。時に少貳の一族に、宗・横岳・馬場・出雲・筑紫以下の輩、道麒が通るを待懸けて不意に切つて懸る。道麒思寄らざる事にてありしかば、忽ち一戦に利を失ひ、仁保將監以下の者共六百餘人討死し、殘兵悉く敗軍して豊後國へ押通り、玖珠郡に到り息をつぐ。斯くて道麒入道、其後星野の城を援はむとしけれども、或は軍兵を集め或は兵糧を用意しけるに、滯つて急に事成らず。又筑前へ打歸り、今年は徒に年を越しけり。此時大友義鑿は、自身は豊府に先づ歸りしかども、少貳へ合力の爲め、家人曰杵三郎右衛門と眞光寺兩將を、筑前に殘し置きけり。

陶道麒敗軍

陶入道道麒肥前へ打入る事

天文二年癸巳正月、陶尾張守入道道麒、去冬より筑前國に年を送り、味方の輩を催促して軍兵調ひしかば、先づ星野が後詰を差置いて、大友・少貳と戦ふべしと筑前を立ち、筑後國へ討入り、三原を過ぎて所々を亂妨し、當國にありし大友の城々を攻めけるに、一番に久留米・安武の兩城落ちて、城主豊饒美作入道永源は肥前國東津村へ退き、安武安房守鑿教は、何方ともなく逐電す。道麒、夫より千年河を駈渡し、西の方筑前の内へ打越えて、筑紫掃部助正門が少貳に一味し、楯籠りたる武藏の城を不日に攻め落し、肥前國へ討つて入り、少貳が棟と頼みたる宗・筑後守秀恒が鏡山の城をも攻め落す。是を見て、筑紫四郎惟門、勝尾城を開いて軍門に降る。斯かりし程に、佐嘉の龍造寺新次郎胤久・小城の千葉介喜胤以下、道麒へ馳付きて彌、大勢となる。中にも原田五郎は、中國の仁保加賀守と勢を合せ、怡土志摩兩郡の輩を相語らひ、上松浦カの者共を打ち従へて、道麒に力を合せ、總勢一同に既に佐嘉神

陶道麒肥前に入り敵の諸城を陥る

陶入道道麒肥前へ打入る事

崎へ討ち入り、少貳一家を退治せむと議す。此時少貳資元は、去年筑前の軍の後、父子共に多久・梶峯城に居られしを、東筑前にありける少貳恩顧の輩馬場肥前守頼周父子・同名大藏允周盛・同右衛門大夫周詮・横岳右馬頭資誠・舍弟中務大輔政貞・綾部備前守鑿幸・朝日近江守資世・重松中務丞頼幸・同名次郎三郎滿幸・藤崎左馬助盛義・犬塚山城守尙家・内田兵部少輔資兼・姉河彈正弼惟安、其外龍造寺山城守家兼・同三郎兵衛家門を初め、皆一味同心して、資元父子を早速城原へ迎へ、勢福寺城へ入れて、江上石見守元種を以て是を守護し、中野・西島・千葉・蓮池・崎村・直鳥等の城々へ銘々楯籠り、中國勢を防がむとぞ待懸ける。斯くて陶入道道麒所々の軍に打勝つて、同月神崎郡三津村・靱岳に陣を据ゑ、爰彼に於て少貳方の輩と相戦ふ。馬場・横岳・宗出雲・小田・犬塚所々に支へて防ぐと雖も、中國の軍兵目に餘る大勢にて、中々叶ふべしとも見えざりけり。十二月に入りて道麒、綾部・朝日山の兩城を攻め落す。この時、探題右兵衛佐尹繁の長男澁河彌五郎義長、大内勢に加はつて討死あり。

今年十月八日の曉、萬星半天に流動し、悉く海陸に落つ。

北肥戰誌 卷之九 終

陶入道道麒前へ打入る事

北肥戦誌 卷之十

龍造寺家兼道麒の陣夜討附觀世音の佛像を得る事

天文十三年甲午、中國の軍將陶尾張入道道麒、去冬は肥前に年を越えて神崎郡三津
靱岳に陣を取り、所々へ手遣し、同四月六日、原田五郎隆種を以て、石動村に於て少
貳方の者兵と相戦ふ。此時、大内義隆より原田五郎への此狀に曰く、

去六日於肥前國神崎郡石動村合戰之時、被勵戰功之次第、以軍忠狀陶尾張入
道注進披見之處、尤感悅之至候。此等之趣猶陶可申候。恐々謹言。

四月十二日

原田五郎殿

義隆判

此時道麒、石動但馬守を案内者とし、千栗山の衆徒を攻めて、所々に火を懸け神社

陶道麒龍
造寺家兼
の居城水
ケ江を攻
めて利あ
らす

悉く焼失す。社僧・神官等、是を防ぐと雖も叶はずして、皆兵火の爲に焼死にけり。

此故に石動但馬守が子孫、八幡宮の御崇にて、斯くて道麒、彌、三津山に陣を居る、五月十六日、
代々亂氣に成り常に火を焼く事を好む。

龍造寺山城守家兼の居城佐嘉の水ケ江をぞ攻めさせける。城中には福地右衛門尉
家盈・末次兵部少輔家通・野田安藝守家俊以下、持口を守りて防戦す。大内勢、利あ

らずして三津山の本陣へ引返す。爰に又、同七月十三日に、有馬晴純の軍兵共、少
貳資元の留主を量りて多久城へ取懸る。されども城番龍造寺伯耆守盛家、身命を捨

て、防ぎし故、有馬勢引退く。然るに其明くる十四日の夕より風吹出し、十五日の
朝より大雨降り、大風梢を摧き、南海より大潮漲りて、風に隨うづまきさかのほひ渦浜うづまきさかのほる事高さ一丈、

須古・白石・佐嘉・神崎の村里、悉く混溺して死する者一萬餘人なり。此夜龍造寺山
城守家兼、水ケ江の居城にあり、彼の有様を見て、子息三郎兵衛家門に向つて囁き

申されけるは、此大風・大水に、敵は三津山の陣にありて、合戦の事はよも思寄ら
じ。倡いざなや今夜、風雨に紛れて陶が陣を夜討にし、其不意を撃ちて一戦の中に討ち散

らむと談合あり。家門尤もと同じ、福地・片田江・野田・下村・石井・金持以下の健兵を

龍造寺家
兼陶道
家兼の陣に
龍造寺家
兼の陣に
夜襲し敵
を襲す

引勝り、七月十五日の朧夜に、水ヶ江の城を打立つて、深き所は遊ぎ浅き所は渡つて、三津山粗岳へ押寄せ。されば家兼の積りの如く、陶が粗岳の陣中には、佐嘉神崎の民家汐に混り、森林皆梢を隠したる體を遙に遠見し、さても龍造寺の者共が攻めざるに自滅するよと、笑ひ輪き酒宴して遊びし折節、龍造寺の軍兵三百餘人、犇々と押寄せ関の聲を揚げたり。陶が陣中、夢にも思寄らざれば、こは如何にと上を下へ返して、防ぎ戦ふ者は一人もなく、馬物具弓矢太刀刀を陣屋々々に取捨て、唯我れ先にと逃迷ひ、悉く東西南北へ敗走す。龍造寺の者共、勝に乗り爰かしこに切捨にし、大勢の敵一人も残らず追崩しけり。斯くて山城守家兼は、させる軍にも及ばずして、暫時の夜討に大利を得、大きに悦んで勝関を揚げ、十六日の曙、水ヶ江の城に歸陣ありしに、潮に連れて流來る物あり。何成らんと取上げ見るに、觀世音の木像なり。家兼不思議に思ひ是を禮拜し、我れ今夜謀らずして大敵を追崩し、歸陣の期に及んで此佛像を得る事、偏に子孫繁榮すべき瑞相なりと、則ち自ら懷中し水ヶ江にこそ歸陣ありけれ。其後家兼、居城の南に當つて新造の堂を建て、彼の佛像

を安置あり。今の水ヶ江慈教院の觀世音是なり。

七月十五日の夜、家兼の夜討に陶入道敗散せし時、取捨てたる金銀其外陣具等、今に三津山の邊の土中より出づるとなり。

舊書にいはいく、天文三年五月十六日、道麒、三津山に陣すとあり。然れば夜前道麒、水ヶ江を攻めしは、五月十六日の事か。月日追つて考ふべし。

大内介義隆來陣少貳資元切腹の事

今年七月、陶入道道麒、龍造寺山城守が夜討に散々敗北しける由、中國へ隠なかりしかば、義隆大きに立腹あり。同年十月初旬、自ら大將軍として三萬餘騎を引率し、筑前國へ押渡り、太宰府を本陣と定め、少貳へ討手を差向けらる。陶入道道麒は、去ぬる七月粗岳を敗軍して筑前國へ引退きしが、先度の恥を雪めん爲め、先陣を申し給はり、嫡子尾張守隆房と一つになり肥前國へ亂入る。斯くて少貳父子は、勢福寺城にありて、宗徒の輩を所々の要害へ差籠置き、軍兵を口々に差向けて大内勢を防

大内義隆
太宰府に
出陣

がせらる。然る處に、千葉介與常・同丹波守喜胤・波多下野守三人の方より、龍造寺家兼まで申されけるは、今度少貳殿退治として、義隆自ら太宰府へ來陣あり。既に討手の先陣、當國へ亂入す。尤も中國の軍兵雲霞の如し。然るに此度の合戦に於ては、千に一も少貳家利を得らるべきに候はず。所詮私の憤りを押へられ、和平あつて居城を去り渡さるゝに於ては、則ち此亂靜謐し、一には公儀へ至つて忠心、二には敵味方諸人の安堵、三には累代の名家を相續あり。彼此の大幸なるべし。然るに御邊は、當時少貳家の近臣なり。此旨を含まれ宜しく評議あるべしとぞ申送りける。是は義隆の命を受けて、三人の方より申す處とぞ聞えし。頓て此事、資元父子に披露あり。江上馬場・小田・横岳以下の老臣、龍造寺は申すに及ばず、皆打寄りて談合しけるに、資元申されけるは、さらば彼の大内、當家に對し怨を結ぶ事一朝一旦の事にあらず、御事等が知る如く先祖累代の讎敵、殊には父の敵なり。我れ聞く父の仇は俱に天を戴かずと、然るに義隆、幸に此度來陣す。此上は資元、屍を野徑に曝すとも一戦を勵し、有無の勝負を決する外他事なし。然れ共又案するに、一

少貳資元
父子居城
を去りて
大内と和
平

人の憤を以て萬人を亡さむも、流石に不便の事なり。如かず平均の求に應ずるにはと、竟に同十月和睦調ひ、資元冬尙勢福寺城を下りて、大内方へぞ去り渡されける。寔に是ぞ資元の極運の至る所なれ。斯くて少貳家、大内へ和を乞ひ城を去りしと聞えしかば、豊後の大友も大内介と和平して、九州大半靜謐し、義隆は防州に歸陣せられ、陶入道道麒・同尾張守隆房、肥前の陣を拂つて太宰府に打歸りけり。斯くて少貳家、大内と和平あり。佐嘉・小城・三根・神崎の萬民等安堵の思をなしける處に、翌くる天文四年に義隆、陶入道が太宰府にありしに下知して、少貳家の所領東肥前の内、三根・神崎・佐嘉の采地尺寸も残さず没収しけり。斯かりし程に、少貳父子せんかた爲方なくして、同十二月晦日、資元は密に多久へ赴き、子息冬尙は蓮池に到りて、小田覺派入道を頼まれける。斯くて大内介は、少貳を思ふ圖に陥れて、今は心易く誅伐すべしと、翌くる天文五年丙申の秋、資元梟首の爲め陶入道を多久へ差向けらる。道麒、筑前を立つて肥前の小城に著陣し、千葉與常を相語らひ多久へ發向す。是を聞いて塚崎の後藤・上松浦の波多・草野馳せ加はり、大勢となつて同九月初、多久へ

押寄せけり。少貳資元は、僅手廻り計り幽かすかなる體にて居られしかば、防ぎ戦ふべき様もなく、今は早自害すべしと思ひて、同月四日專稱寺といへる道場に忍び、譜代の家人今泉播磨守朝覺、窪平原、此三人の者を呼出し申聞けられけるは、我等智慮なくして去々年敵に怖れ、城原の居城を去りて後、附従ひし輩にも捨てられ、勢微々に成果て此所に来り、今斯かる是非なき害に逢ふ事、世の宿業とはいひながら、口惜き次第なり。然れ共悔いても益なし。唯、自害を急ぐべし。さても汝等三人の者は、多くの家人の中に今まで心を變せず附索まもひて、資元が先途を見る事の嬉しさよ。必ず黄泉の下まで忘るべきにあらず。されば此期に及びては、定めて死を俱にせむと思ふべし。然れども子息冬尙、蓮池に忍んであり。其外幼稚の子供、佐嘉の傍に隠し置きたり。汝等三人の事は、とても忠節に此場を通れ、彼所に赴きて子供を撫育して得さよと、搔口説き申されける中にも、今泉、泪の中に答へけるは、御誼の如く御運既に傾き、此期に及びては悔いても甲斐なし。其中に我々に落ち候へとの仰こそ心得ね。御父政資公御生害の時は、公九歳にならせられ、西嶋の横

岳が許に忍んで御成長あり。其後藤津へ御蟄居の時は、某が父宗春入道と、宗伊賀守計りこそ附添ひまゐらせて候へ。某身不肖に候へども、其子として唯今御最期を見捨て、いづくに逃げ行きて、誰をか頼み申すべき。一向死出山の御供とこそ存じ候へと、左右を見ければ、窪平原も共に涙に咽びて、我々も同意に候と、頭を垂れて居たり。資元重ねて申されけるは、疎や汝、死は近くして易く生は遠くして難し。幼稚の者共が事こそ心許なけれ。枉げて命を全うし、彼等を養育して得させよ。さなくば力なし。七生迄の勘當也と大に立腹ありしかば、三人の者共、主命今は黙止もくし難く、兎も角と申して涙と共に退出しけり。唯今死に赴く主の勘當といひしを、痛み思ける三人が心底こそ頼母しけれ。斯くて資元、今は心易く思はれしかば、專稱寺の佛前に鎧切捨て押肌脱ぎ、生年四十八にして腹十文字に搔破り、桐葉落つる夕風や、九月四日、一生は夢とぞなられける。法名心月本了と申すは、此の資元の事なり。然るに今泉、窪平原は、泣くく、佐嘉へ赴き、河副の内に亡君の稚き人人のおはせしを或寺へ立忍ばせ、住持を頼みて年月をぞ送りける。三人の中

少貳資元
自害

にも、今泉は頓て發心を起し鬻を切つて、六十六箇國を巡禮し、後には洛に上り、竹苑椒房・攝家・清華の方へ便りけるとぞ聞えし。是れ再び少貳家を興すべき縁を求むる爲めなりけり。

木原軍并新少貳冬尙の事

斯くて陶入道道麒は、少貳資元に腹切らせ、思ふ事なく肥筑兩國を打從へ、九州の支配等相整へて、同年十月廿九日、防州にこそ歸國しけれ。然るに豊後の大友義隆は、兼ねて少貳と親しかりしかば、今度資元生害の事を聞いて大に悔み、何とぞして其子松法師丸冬尙を世に出さむと計りて、内々龍造寺民部大輔胤久へ談合ありけり。此胤久と申すは、龍造寺の嫡流にて、加世新庄・與賀本庄、其外小津郷八十町は先祖相傳の知行并に佐嘉の内尻田分六十町・千住十貳町・諸富十貳町、小城の内大寺三十六町・同別府百二十町は新恩の知行、凡そ合せて貳千五百町の地頭なり。爰に又其頃蓮池の城主小田駿河入道覺派といひけるも、元より少貳家荷擔の者にて、是も

陶道麒防
州に歸國

豊後へ通じ、大友と談合して冬尙を世に出さむと思ひし故、忍んで冬尙を我が城にぞ隠し置きける。此小田が先祖は、元來關東の者にて、常陸守直光が時、應永年中に初めて肥前國へ來り、蓮池に城を取構へて居城とし、代々爰に住す。されば頃日は既に大身と成り、佐嘉神崎の内并に筑後の三潞郡の内凡そ六千餘町を知行しけり。然るに覺派つくづく打案じて、斷金の朋友共へ語りしは、此度資元公生害の根元は、龍造寺山城守が密に大内介の語らひを得、心中に隱謀あつて勢福寺下城の事を申し勧め、少貳家を衰微させし故なり。一つは其心底も惡し。又は先君孝養の爲めにてもあり。必ず水ヶ江に取懸け一軍すべしといひけるが、果して同年^{天文}の冬、江口・深町・朽井内田・吉嶋以下の家人を引率し、龍造寺山城守家兼が水ヶ江の城へ押寄す。家兼早此事を聞付けて、さらば中途に出向ひて戦ふべしと、嫡子右衛門大夫尙純・二男三郎兵衛家門・嫡孫六郎次郎周家・同名伊豆守常家・鍋島の一族、其外野田兄弟・福地・石井・片田・江・金持・末次・百武・下村の輩を急に相催し、追々に水ヶ江を打出で木原村を過ぎける時、早蓮池勢競來り、村蔭より突いて出で、小田隱岐入道

木原合戦

木原軍并新少貳冬尙の事

三三

覺一・同名大膳入道覺〔脱ア〕以下、一同に瞳と懸る。水ヶ江勢、敵爰まで來るべしとは知らざりしかば、忽ち一戰に打負けて既に敗れむとす。時に水ヶ江の老臣福地右衛門齒嚙をなし、蓬きたなし味方引くなと呼んで、真前に進み相戦ふ。是を見て旗本より六郎次郎周家兄弟、福地を援けて相進む。されども小田方勝に乗り、龍造寺の者共を追立て、散々に駆けなやます。其時鍋島平右衛門〔門脱カ〕尉清久・同子息左近將監同孫四郎并に野田が赤熊武者貳百餘人、勝に乗つたる小田が陣へ、前後を見ず切つて入り、先手の一將を討取りたり。時に小田勢色めき立ち、我れ先にと崩れて蓮池へ引退く。水ヶ江の軍士、利を得て関を作つて北ぐるを追ふ。其中にも龍造寺六郎次郎周家と、鍋島孫四郎清房二騎、真先に驅けて逃ぐる敵を追懸け、蓮池の城へ押寄せ、馬を混々ひたくと城堀へ乗入る。鍋島平右衛門續いて來り、兩人が體を見て、物に狂ふか方々と、頻に是を制して皆水ヶ江にぞ歸陣しける。

一、天文七年戊戌二月中旬、龍造寺山城守家兼、重ねて法華〔經脱カ〕一萬部を執行すべしと思立ち、春日山高城寺の住持登岳和尚を請じて導師と定め、先づ一千部を讀

誦して、其身は此時法體し法名を剛忠と號す。

一、同八年己亥年中に、大風三十七度吹き、米穀の類一粒もあらず、天下大に飢饉し、秋八月より萬民餓死して、其骸道路に横はりぬ。

一、同九年庚子六月四日、千葉屋形平朝臣興常卒す。小城平井の本光寺に葬る。法名日慶と號す。此興常、始中終中國の大内家に屬して、中頃は肥前國の守護代たり。時に牛頭城に居住す。子息丹波守喜胤、父の家を續いで平井の館にあり。親に不孝の人にて、興常と度々軍に及ぶとなり。

一、同十年辛丑、太宰新少貳冬尙、自ら龍造寺山城守入道剛忠の水ヶ江の城へ來り、對面すべき由申されしかば、剛忠出合ひ少時會釋ありけるに、冬尙の申されしは、亡父資元の時に相變らず、龍造寺一家の輩何とぞ力を添へられ、當時廢れたる少貳の家を取立て給はりたき由、深く頼み申されけり。剛忠承り、去りし頃、小田覺派入道が水ヶ江を攻めし事は、偏に冬尙の下知と其心底を疎み思はれしかば、駈と領掌なかりけり。されども冬尙様々に搔口説き申されし程に、剛忠心服あつ

千葉興常
卒去

龍造寺家
兼冬尙に
對面少貳
家を輔佐
す

て、冬尙は歸られけり。斯くて剛忠、夫より少貳家の輩と心を合せ、以前の如く少貳冬尙を、神崎勢福寺城に据ゑ、龍造寺三郎兵衛家門を執權とし、江上岩見守元種馬場肥前守頼周を輔佐と定め、再び傳き申されけり。

鍋島彦法師丸千葉介胤連養子の事

其頃高來の有馬修理大夫晴純、名を改めて越前守義貞と號し、入道して隨意齋仙岩と稱す。其子左衛門佐義純、ともに武威を振ひ、西肥前の内彼杵・藤津の兩郡并に杵島郡の内凡そ三郡を切取り、先祖代々の領知高來郡に併せ、既に半國を知行して、猶肥前一國を掌握せむと志しけり。然るに此時、小城の千葉丹波守喜胤、父に變らず中國の大内義隆に屬して、少貳家に隨はず。又同名胤勝、其子胤連とも不和にして、動もすれば佐嘉・神崎・小城の際騷動に及びぬ。有馬父子、此事を聞いて大に悦び、さらば其弊に乗じて、先づ小城を攻潰し、夫より佐嘉・神崎へ討ち入り、龍造寺の者共、少貳冬尙をも攻め干すべしと評定しけり。斯くて有馬父子天文十年の春、

有馬義貞等の希望

千葉少貳龍造寺の三家和平

鍋島彦法師丸千葉胤連の養子となる

須古の平井頼庶・佐留志の前田志摩守・山口の井元左近大夫等に下知をなし、先づ千葉の領内杵島の東郡横邊田へ討つて入り、民屋に放火し所々を亂妨して、既に小城に攻め入らむとす。斯くて千葉喜胤、東には少貳の門葉あつて弓斷なく、西よりは有馬勢攻め來つて是を防がむとし、東西の敵に對して軍を持たむ事、中々難儀にぞ見えたりける。此時、少貳の長臣龍造寺三郎兵衛智慮ある者にて、情思ひけるは、今度有馬勢、須古・杵島の軍兵を引率し、小城に攻め入りなば、千葉一手を以て防ぎ戦はむ事叶ひ難かるべし。さあらば有馬、頓て千葉を攻め潰し、佐嘉へ攻め來らむ。然らば則ち合戦の勝負何とも計り難し。所詮千葉、少貳・龍造寺一和せしめ、三家の人數を一つに合せ、心易く有馬勢を防がむに如かずと思案して、家門自身小城に赴き、心底を残さず談合しければ、兩千葉ともに尤もと同意し、則ち少貳冬尙の舎弟の今年九つに成りしを、千葉丹波守喜胤の養子婿と定め、小城の平井の館に送りて、千葉胤頼と號し、又龍造寺の婿鍋島駿河守清房初名ハ孫の次男の彦法師丸として、今年四歳と聞えしを、千葉介胤勝の息胤連の養子として、晴氣の館に遣しけり。斯

鍋島彦法師丸、千葉介胤連養子の事

千葉喜胤
死す

彦法師丸
本姓に復す

かりし程に、兩千葉が私軍も止み、冬尙喜胤も中和して、佐嘉・小城・神崎の間忽ち静謐し、少貳千葉・龍造寺三家の勢を以て、有馬が軍兵を討ち散らさむとぞ談合しける。横邊田に陣取つたる有馬勢、此事を聞いて、今度の合戦勝利あるべからずとて、頓て軍兵をぞ打入れける。寔に三郎兵衛家門の智慮の如しとぞ聞えし。然るに平井の千葉喜胤、兼ねて悪瘡を煩ひしが、其病惱に迫り、翌くる天文十一年壬寅三月廿九日、歳三十四にして自殺し失せぬ。彼の養子胤頼、幼少ながらに家督を継ぎ、本城牛頭城に直りて、喜胤の息女に嫁しけり。又晴氣の千葉胤連は、後に實子の出来しにより、其身は養子の彦法師丸を具して牛尾に隠居し、隠居分の地小城郡の内美奈岐八十町を、彦法師冠者に譲り、其上千葉譜代の侍十貳人を、右知行に副へて附屬しけり。其人數には、平田・鎰尼・野邊田・金原・仁戸田・堀江・小出・陣内・巨勢・田中・濱野・井手等なり。然るに彼の冠者、其後千葉家を辭して佐嘉に歸り、本名を稱して鍋島左衛門大夫と改む。然るに太閤豊臣秀吉公、文祿・慶長の頃朝鮮國を征伐ありし時、加藤主計頭清正とともに七箇年の在陣に、其武名和異に隠れなかりし鍋島

加賀守直茂は、此左衛門大夫なり。

一、有馬勢退散の後、佐嘉・小城・神崎暫く静謐す。此頃肥前國養父郡今に三根千葉八幡宮の鐘の銘に曰く。

願主 太宰少貳藤原冬尙朝臣

馬場六郎 政員

同 前肥前守頼周

筑紫四郎 惟門

宗 筑後入道本盛

馬場右衛門大夫周詮

馬場大藏丞 周盛

江上石見守 元種

檀那 東彈正少弼盛親

龍造寺山城入道剛忠

鍋島彦法師丸千葉介胤連養子の事

同 新次郎胤榮

龍造寺伯耆入道日勇

龍造寺三郎兵衛家門

小田 九郎 政光

天文十一寅年二月四日

一、天文十二年癸卯の春、高來の有馬と筑後の星野伯耆守、西肥前へ來陣し、上松浦獅子城を攻め取らむと、多久へ旗を進めて堂の原に陣を取る。時に徳島鑑家今泉兵庫允等押寄せて合戦し、即時に是を切崩す。此時今泉新三郎討死し、有馬勢にも有江左衛門を討取りぬ。仍りて今泉兵庫へ千葉胤勝よりの感狀に曰く、

去廿九日有馬肥前守貴純、當國爲押領星野伯耆守以合力長島村に數日令滯留、於上松浦獅子城可押寄企之旨、以方便當城押領之計策被見聞、徳島鑑家以同意多久於堂之原則時切崩、貴純敗北、番頭之者數人被討捕候。其時刻同姓新三郎討死之砌、時を不違有江左衛門其方鍵下に而被討捕候、末孫に至

るも不可忘却候。依之藤瀬村三拾七町永代令加扶狀如件。

天文十二年卯三月二日

平胤勝判

今泉兵庫殿

頃日獅子城は、千葉の支配と見えたり。番人堀江興三兵衛大江匡房後名を大藏允と改む。千葉胤勝家人なり。

右有馬が來陣并に感狀の趣、舊書たりと雖も信用し難し。有馬肥前守貴純、去る明應四年十二月三日に卒去す。天文以前の人なり。追つて考ふべし。

一、今年肥前國へ鐵炮初めて來る。其以前、南蠻國より薩州種子島へ鐵炮渡りし事は、大永年中と云々。時に彼島の地主、種子島兵部大輔時堯と號す。

馬場頼周龍造寺を謀る事

爰に東肥前綾部の城主馬場肥前守頼周は、少貳股肱の者なりしが、情思ひけるは、前少貳資元、多久に於て討たれ給ひ、當家中頃衰微しける事は、偏に彼の龍造寺

馬場頼周龍造寺を謀る事

初めて肥前鐵炮渡來す

馬場頼周
龍造寺を
はかる

剛忠入道が大内家の内通を得て、資元をたばかり勢福寺城を出し申し、故なり。然るに夫にも懲りずして今又、剛忠が子や孫や、當屋形冬尙公に昵近させなば、必ず悪事の根元なるべし。所詮龍造寺の一家に於ては、計略を以て悉く滅亡さするに如かずとぞ思立ちける。斯くて頼周、時々冬尙へ近づき、龍造寺誅伐の事を囁きし程に、冬尙も是に同意し、密々に其用意あり。既に天文十三甲辰の冬、事決定して、先づ冬尙より竊に高來の有馬仙岩父子へ、謀の旨を含めていひ送られけり。有馬頓て其意を得、少貳家へ對し弓箭の色を立て、自身は則ち杵島郡長島に出張し、扱上松浦の波多下野守・鶴田兵部大輔・同名越前守・馬渡甲斐守・田代因幡守、其外多久の多久上野守等が方へ、事の仔細を觸廻しければ、皆一味同心して、上野守は則ち居城梶峯に引籠り、上松浦の波多・鶴田・馬渡・田代は日鼓岳へ出張し、少貳家への異心と稱し大に騒動す。是は馬渡頼周が冬尙へ密談し、彼の輩共へ偽りて敵をなさせ、龍造寺一門を、其討手として所々へ分遣し、勢を透して後、易々と誅戮せむとの工なり。斯くて冬尙、元より工みし如く、龍造寺剛忠入道を勢福寺城へ招き、此度

有馬・松浦・多久の者共、當家へ至つて逆意を顯し所々に出張す。急ぎ一族を相催し罷向はれ、彼の悪黨等を退治あるべしとぞ申されける。剛忠、是を謀計とは夢にも知らず、則ち領掌あり。水ヶ江に歸りて、龍造寺の一家を集めて、諸方への手分を評定し、其身は今年九十一歳なれば乗陣に及ばず、子や孫や其外親類、數を盡して人數を三に分け、方々へ差向けけり。先づ一手は龍造寺伯耆守盛家入道日勇・同子息日向守家重・同次男三郎四郎・同名伊賀守家直以下、上松浦へ發向す。一手は龍造寺豊後守家純・同子息六郎次郎周家・同名左馬助胤門・同子息新左衛門胤直以下多久へ向ひ、梶峯城の大手長尾口より押寄す。又龍造寺新五郎胤明・於保備前守胤宗入道律剛以下は、同じく搦手へ廻り、横邊田を西へ打通りて南の方より差寄る。一手は龍造寺和泉守家門前名三郎兵衛・同名孫八郎頼純・同右京亮胤直・同伊豆守常家・同播磨守家宗以下、有馬勢を追拂はむと長崎家に馳せ向ふ。頃は天文十三年十一月廿一日、各、同時に佐嘉を打立ちけり。中にも龍造寺豊後守の一行は、多久の城へ押寄せけるに、城主上野守宗利、兵を中途に出して相戦ふ。されども寄手の先陣六郎次郎周

家、是を物ともせず、悉く一戦の中に駆け散らして、本城梶峯へ取詰め、身命を捨てて攻め戦ふ。扱龍造寺伯耆入道の一勢は、上松浦へ討ち入りけるに、此所の住人相知入道寶秀・廣瀬・中島馳せ加はりぬ。則ち是を案内者として、先づ鶴田越前守が居城獅子城に押寄せたり。然れども、此城萬仞の青岩峯を遮り、茸々たる荆藁谷を閉ち、攻口唯、一筋あつて無雙の要害なりししかば、急に攻め落すべき様もなし。伯耆入道日勇、是を量り軍兵を分けて當城を押へ置き、波多下野守が鬼子嶽の城、鶴田兵部大輔が日割の城、此等を攻むべしと、翌廿二日の早朝に、日勇入道、士卒を率ゐて奥の方に討ち入りて龍川に著陣す。時に鶴田が一族馬場・徳末・山口以下の松浦黨共、大勢にて出合せ関の聲を發し、日勇を押取籠め遁さじと相戦ふ。龍造寺は元より案内を知らず、松浦黨は住人にて案内を能く知りしかば、或は松柏の蔭より散々に射、或は岩窟の狭間より切つて出で、堅横十文字に駆立てし間、龍造寺勢打負けて四角八方へ敗走す。日勇、齒嚙をなし士卒を下知し、父子眞前に進み打戦ひし處に、鶴田が家人峯刑部、三百計りの兵を一同に進ませ、日勇父子を取籠めた

龍造寺勢
敗北

り。日勇入道是を見て、今は遁れぬ所なりと、子息三郎四郎とともに二騎、敵中に駆入り忽ち討死したりけり。成富刑部大輔も日勇に續いて討死す。其外相知入道・廣瀬・中島以下悉く討たれ、佐嘉勢力を失ひて嚴木の方へ引退く。斯くて龍造寺の輩、龍川の合戦には打負けしかども、獅子・梶峯の兩城は彌、圍みて攻め戦ひ、今年の冬は歳を越しけり。

龍造寺伯耆守盛家入道日勇討死の舊跡、上松浦大河野の内立川に大松あり。是を則ち盛家松といふ。百五十年を過ぎて元祿の頃、土井防州、唐津領知の時、用木に之を伐られ今に於ては無し。日勇實は高木右京大夫滿兼の子、龍造寺豊前守胤家の養子なり。

龍造寺一家所々討死の事

翌くれば天文十四年乙巳正月初旬、龍造寺の一族、鶴田越前守が獅子城を攻めて、同七日に攻め落し、則ち城警衛の爲め馬渡主殿助俊信を入置きけり。然る處に、鶴田

が兵、同十二日急に取懸け主殿助と相戦ふ。俊信、手の者を下知して防戦し、鶴田勢を悉く坂下へ追下す。越前守が軍兵、一戦に打負け退きけるが、其夜、城の後の方へ廻り、案内は知りたり。嶮岨を攀登りて、密に城中に近づき鯨波を揚げて、夜討にぞしたりける。時に馬渡が軍士利を失ひ、主殿助主従六十餘人討死し、鶴田は居城を取返して、本の如く入替りけり。斯くて龍造寺豊後守家純以下は、去冬より多久の城を攻めて、終に今月十八日當城を攻め落しぬ。されども其搦手に向ひたる龍造寺新五郎於保備前入道健則・副島五郎左衛門尉・同名右馬助猶房以下、今月十四日志久峠に於て、平井・前田・井元に討負け悉く討たれ、又長島表へ向ひたる龍造寺の軍兵も、同十五日藤津冬野原の軍に、有馬勢に戦負け、龍造寺右京亮胤直討死す。斯かりし程に、此度所々へ發向せし龍造寺の輩恠へずして、皆々佐嘉に引退く。

龍造寺胤直等討死

一、同正月廿一日、蘆刈の徳島左所へ、龍造寺より取懸け防戦の上破却す。此時徳島同名の輩七人、其外多く闘ひ死にけり。彼の徳島は、龍造寺には内縁ありし者

なり。然れども當時千葉胤勝に屬して、佐嘉の支配に従はず。仍りて佐嘉より攻めけるか。

一、斯くて有馬・松浦の者共、龍造寺衆の引くに付いて、早速佐嘉へ攻め來り、國中十九人の少貳方と同じく龍造寺剛忠入道の水ヶ江の城を取圍む。其勢凡そ二三萬とぞ見えける。龍造寺の一族、案に相違の事なりしかば、皆々一所に集まりて、唯、咬あきれて居たり。然るに馬場肥前守頼周は、剛忠の一門を思ふ圖に墮して、大半所々にて討取り、其上、城を取圍み、心中には大きに悦び、外面は眉を顰め水ヶ江に來りて、剛忠入道に對面し、小聲にて申しけるは、愚老が子の政員は、眼前貴公の孫塔にて、聊か疎に存せぬ故心底の通を申すなり。されば唯今有馬を初め十九人の面々、當城を圍む事は、更に冬尙公に對しての逆意に候はず。實は貴公の一門、内々大内家へ通じ屋形へ到つて、二心ある由、時々讒言する者あつて、冬尙立腹せられ、龍造寺一家を退治あるべき爲にて候ぞや。然るに寄手は其勢三萬に餘り、城中は僅の小勢にて、當城唯今の體は、偏に弩弓に係る片糸に異ならず。

龍造寺剛忠馬場頼周の術策に陥る

情、此頼周が案ずるには、當家無實の罪に沈みて、忽ち累代の家名を失ひ給はむより、一先づ此城を開かれ、有馬衆と十九人の面々を歸陣させ、其上にて冬尙公へ参り、科なき由を一々申開かれなば、則ち御赦免あつて、永く子孫の後榮を期せらるべし。穴賢あなかしこ 此頼周、御邊に對して惡様あしざまの事は申すまじと、まことし顔にぞ申しける。剛忠入道は天姓正直なる人なりしかば、頼周が方便とは夢にも思寄らず、仰尤もの事なり。我等が一家、少貳殿へ對して聊か逆心はなけれども、讒人傍にあるは力なし。所詮御邊の申さるゝ通、一旦城を去り渡して、時節を窺ひ科なき由を申し開く外、餘儀候ふまじと會釋あつて、頼周をば歸されけり。時に鍋島駿河守、未だ刑部少輔と申しけるが、龍造寺孫三郎と同音に、剛忠に向つて申されけるは、彼の頼周兼ねて當家に對し、さしたる志の者にも候はぬに、唯今當城に入來り、睦しやかに申す條、何とやらん不審いぶかし候なり。然るに彼等が申すに任せ、此城を去り渡し、一門所々に牢籠して、若し不慮の仕合も候ひなば悔いても益なく、殆んど口惜き事なるべし。能く御思慮あるべしとぞ諫め

水ヶ江城
没落

申されける。されども剛忠承引なく、終に正月廿二日、居城水ヶ江を去つて寄手の面々へぞ明渡されける。寔にはかなき次第なり。斯くて明くれば正月廿三日、龍造寺の一門、悉く所々へ分散ありけり。先づ剛忠入道は、孫子の孫九郎監兼を具して、筑後國へ赴かれ、豊後守家純・和泉守家門・孫三郎澄家は筑前に志し、六郎次郎周家・三郎家泰・孫八郎頼純は、馬場が申すに任せて、神崎勢福寺城に参り、冬尙へ科なき由をも申開き、又は下城赦免の一禮をも遂ぐべしと、城原へぞ赴かれける。其中にも家純・家門・澄家は、筑前の方を志し北山を越えむと、河上といふ所に著きけるに、廿三日の日、早西山に没しければ、明日こそ山路をば越すべけれど、其夜は此所の淀姫社を假寢の宿と定め、主従三四十人一夜の程をぞ明されける。斯かる處に、馬場頼周、神代大和守勝利と示し合せ、頼周が嫡子六郎政員を大將にて、少貳衆二百餘人、龍造寺の輩を追懸け、淀姫社を取巻いて関の聲をぞ揚げける。家純を初め思寄らざる事にてはあり。暗さは暗し。上下皆茫然として居たり。されども和泉守家門主従三十餘人、南門に駈出で呼ばはれける様は、

馬場頼周
龍造寺家
純等を淀
姫社に圍
む

唯今爰に押寄せしは、定めて馬場頼周にてぞ有るらむ。己れ悪行不道の振舞して、我々を斯様に忻り討果すとも、因果は寔に車輪の如し。よし／＼此一門の頸取つて、主の冬尙に見せよ。いでさらば龍造寺和泉守が手並の程を見すべしと、當るを幸に切つて廻らる。其勢に辟易して、馬場六郎政員、一陣に進んでありけるが、門外へ引退く。斯かる處に、東より神代勢雲霞の如く都渡岐を渡して押寄せたり。家門猶も退かず、前彼の敵に渡り合ひ、爰に攻め伏せ、かしこに追付き戦ひしが、終に家門を初め家人堀江大膳亮・片田江七郎兵衛・同五郎太郎・同新次郎・新郷伊豫守・蒲原・西村を先として、悉く枕を並べて討死しけり。暗夜の軍なりしかば、家門討たれしを人知らず、豊後守家純・孫三郎澄家は、淀姫の社壇に楯籠り、駈出で／＼相戦ふ。彼の孫三郎は幼少より、勤學の窓の前に螢を拾ひ雪を集めて、或は李白樂天が跡を追ひ、或は人丸赤人が家風を慕ひ、手跡は小野道風にも恥ぢず、力量早業ともに勝れし男なりしが、敵已に南門を打破り、社内に入込みしを見て、軍は早是までなりといひ捨て、無き跡の形見とや思ひけむ。小指

龍造寺家
門以下討死

龍造寺澄
家戦死

を喰切り流るゝ血を以て、古き昔を思出で、「山遠雲埋行客跡。松寒風破旅人夢」と、社壇の扉に書付置き、大庭に躍り出で、とある石を小楯に取つて、近づく者をは礎と切り、駈け出でては丁と討ち、敵に相當る事千變萬化す。馬場・神代の軍兵共、是に恐れて更にあたりに近づかず。されども馬場が家人、走懸りてむすと組む。家澄物の數ともせず、取引寄せ押伏せて首を搔かむとしける處に、敵大勢折重り、竟に澄家をぞ討留めける。豊後守家純も、社壇より軍の體を見聞し、今はかうよと思はれしかば、腹十文字に搔破り腸を繰出し、社壇の腰板に投付け、眼をくわつと開き悪相を現し落命あり。淺猿あさまゝかりし有様なり。

澄家此時、小楯に取られし石、今に河上の社内に之あり。屏風石といふ。又いふ、澄家此時、神代の家人と刺違へて死すとも。

舊書いふ、當所の寺社、此時先づ破壊すと。

斯くて龍造寺六郎次郎周家・同名三郎家泰・同孫八郎頼純は、少貳屋形冬尙へ一禮の爲め、是も同廿三日の晩景、佐嘉を出で城原勢福寺城へと急がれしかども、日黃

昏に及びし故、其夜は半途に滞り、和泉村の玉泉坊に立寄り一夜を明し、明くれ
 ば廿四日の曙、彼の山伏を案内にて城原に赴かれしに、尾崎村祇園原に、馬場頼
 周の家人薬王寺隼人允、神代豊前守兩大將にて軍兵を伏せ置き、龍造寺の輩に懸
 りて前後より押取包み、鬨の聲を揚げて切懸る。時に六郎次郎周家は生年卅六、
 勇氣無雙の男にて少しも動轉せず、味方の者共よ。とても遁れぬ所なるぞ。清く
 皆討死せよと、自身眞前に立つて戦ひしが、敵數人切臥せ、其身も終に馬場四郎
 左衛門神代土肥新五郎馬場に討たれにけり。是を見て龍造寺の家人福地右衛門
 尉家盈、同名新右衛門、同善八郎、百武藤次左衛門、野田河内守、同謙書記、江副又八
 郎、西山小三郎、下村源八郎、大塚左兵衛、同市之丞、石井左衛門、多比良大炊助以下
 敵中に駆入り、一人も残らず討死す。斯かりし程に、三郎家泰、孫八郎頼純
 は、人手に懸らむよりはと、とある所に立退き、腹掻切つて臥しけり。爰に多比
 良大炊助が子に、犬房丸とて童のありけるが、敵中を紛れ出で南の方へ落行きし
 に、龍造寺の大將三人ともに討たれ給ふと、敵の匂る聲〔脱ア〕引くまじとや思ひ

けむ。尾崎村大明神の北の邊にて、自害して失せにけり。然るに鍋島平左衛門
 尉清久は、龍造寺の面々の行方、覺束なく思はれしかば、野田越前守を招き、急ぎ
 見て參れとて遣しけるに、祇園原の軍早過ぎ〔マ、〕がらに駆付けたり。越前守是を見
 て、下人小三郎を近づけ、此様子を清久に委く申すべしとて、小三郎を佐嘉へ歸
 し、其身は敵中に駆入りて、向ふ者四人切臥せ矢庭に討死しけり。此軍、正月廿
 四日の朝卯の刻に始まり辰の刻に終りぬ。

犬房丸が舊跡、尾崎村の北、田の畔に印の松あり。是を則ち犬房松といふ。近
 年大風に摧かれ今は無し。

北肥戰誌 卷之十終

北肥戦誌 卷之十一

龍造寺剛忠入道歸國附馬場頼周父子討たる事

馬場肥前守頼周は、兼ねて悪かりし龍造寺の一門六人、己が計略を以て容易く討取り悦ぶ事限なく、其首共を桶に入れて、城原勢福寺城へ取持たせ、少貳屋形の實檢に入れけり。冬尙、頓て剛忠一家の所領る没収し、水ヶ江の城には、馬場神、小田等の家人を入置き、替るゝ番をさせけり。然るに其頃千葉介胤勝も、同名胤頼が爲に、小城を退き居たりしが、兎角して今年正月廿三日當郡に歸り。同廿五日晴氣の城に入りけり。斯くて冬尙是を退治すべしとて、二月廿七日、城原より軍兵を差遣し、先づ小城町を焼拂ふ。時に千葉胤頼牛頭城にあり。少貳への加勢として人数を差出す。依りて千葉介胤勝が手の者、同廿八日小城の三津宮の邊に於て、胤頼

少貳冬尙
龍造寺の
所領る没
収す

千葉介胤
勝杵島に
退却す

の軍士と戦ひしに、利を失ひて引退く。斯かりし程に、少貳方勝に乗り、明くる廿九日、冬尙胤頼の兩家人等、小城郡所々へ打入りて、胤勝が領知を亂妨狼藉す。然る間、胤勝晴氣に依へ兼ね、杵島の白石へぞ退きける。斯くて三月十六日、馬場肥前守頼周・同嫡子六郎政員・江上石見守元種、城原より小城に來り、胤頼の居城祇園岳牛頭城に登りて、胤頼に謁し談合を堅め、千葉胤勝の晴氣の城へは、少貳冬尙を居ゑむと、頓て普請を申付けけり。扱も龍造寺剛忠入道は、去ぬる正月、水ヶ江の城を開いて筑後國へ落行き、一木といふ所にありけるが、長男の家純を初め孫子皆、馬場頼周が爲に討たれける由を傳へ聞き、頼周が心底を恨み、臍を噛めども益なし。然るに鍋島平右衛門父子は、剛忠一家既に斷絶あるべき事を歎きて、竊に與賀本庄の輩を相催し、彼是三百計りの人数を以て、三月下旬筑後の一木に赴き、剛忠入道に對面あり、早々御歸國候べし。何とぞ計略を廻し、頼周が首を切り御惡心をも休め、再び水ヶ江の家を立て申すべし。疾くゝと勧め申されけり。時に剛忠、打案じ返答ありけるは、御邊の志、誠に海よりも深く山よりも高し。さりながら唯今

催し來る處の軍兵、何程あるべきやと、鍋島父子答へて雜兵凡そ三百計りと申す。剛忠申されけるは、夫は餘りに無勢なり。先づ此度は立歸り、當家に好ある輩を猶猶催集め、重ねて迎を給はるべしとありしかば、鍋島父子心得て、急ぎ肥前へ歸り、重ねて與賀・河副の郷士を語らひしに、鹿江遠江守兼明・久布白越前守兼基・南里左衛門大夫國有・立河兵部少輔家親・内田美作守兼智・石井兄弟・古賀・横尾・金持・末次・久米・村岡・大田・水町・増田・飯盛・副島・石丸、其外郷民の頭々皆同心して、都合貳千餘人、兵船數十艘に取乗り、寺井江を押渡りて筑後の一木に著きけり。剛忠悅限なく、さらば歸國を急ぐべしと、一木の旅宿を立ち海上異儀なく先づ河副に上り、爰にて評定を極め、各、備を分けて舊地水ヶ江に亂入る。當城には少貳屋形の下知として、蓮池より小田駿河守政光の家人共、此頃城番しけるが、敢へて一戦にも及ばず、おめくくと城を明渡しけり。斯くて剛忠、則ち水ヶ江の城に入り替られ、扱本丸に移りて其體を見らるゝに、籬の草藁々として、昵みありける孫子もなくなり。平生に仕へし家人も失せ果て、城内寔に寂莫たり。老入道の歎、いふ計りなし。剛

龍造寺剛忠歸國水ヶ江城に入る

龍造寺剛忠千葉胤胤勝馬場頼周を祇園岳に攻む

忠今年九十二歳とぞ聞えし。然るに其頃馬場肥前守頼周は、主の少貳冬尙を牛頭城に移さむと、みづから子息政員と同じく祇園岳に登り居て、雜人を集め普請させてありける。斯かる處に千葉介胤勝、白石より起りて、佐嘉へ其旨いひ送りしかば、剛忠大に悦び、俄に軍兵を駈催し、千葉衆といひ合せて、四月二日急に祇園岳へ押寄す。胤勝に従ふ輩には、鴨打陸奥守胤忠・徳島土佐守胤順・同孫八郎盛秀・堀江與三兵衛匡房・窪田民部少輔胤秀・古河豊前守親貞・同修理亮盛貞・持永治部丞盛秀を初とし、空閑・陣内・彌頭司・大塚・粟飯原・江口・江頭・福田・東江以下小城郡の郷士、山伏には圓實坊・西持院其外土民等相加はりて都合五六千人、祇園岳に押寄せ、既に大構を打破つて本城へ攻め近づく。馬場が家人等、思寄らざる事なりしかば、大に動轉し、東西に逃げ迷ひ南北に馳せ散りて、周章騒ぐ事限なし。されども頼周・同嫡子政員、手の者を下知して防戦す。然る處に千葉胤勝の家人矢作左近將監・江原石見守兼ねて案内を知りしかば、水の手より忍び入り、城に火を懸け焼立つ。堀江與三兵衛尉進み戦ひ、攻口に於て分捕す。然るに此時、城内にありて普請しける土民等は、

龍造寺剛忠入道歸國附馬場頼周父子討たる事

皆小城郡の者共なれば、胤勝に心を通じ、悉く一所に取集り、鍬・鎌等の農具を持ち、打つて廻り、城方へ敵對しける程に、頼周父子内外を防ぎ兼ね、叶はじとや思ひけむ。裏道より忍んで乗出し、居城綾部へ志しけるにや。東をさして山傳に鞭を揚げて落行きしが、運命盡きてやありけむ。黒岩峠といふ所にて道を迷ひ、大願寺野へ出でけり。寄手の中より是を見付け、遁さじと追懸る。頼周父子、頻に馬を早め山田村を過ぎて河上に到り川を越えむと、二人ともに馬を河水に駈入る。然る處に、龍造寺の軍兵追駈け來り、雨の如くに矢を射懸く。中にも野田安藝守家俊が放つ矢、六郎政員が馬に中り、打てどもく進み得ず。安藝守得たりと走り懸つて、政員を馬より曳下し、懸て首をぞ搔落しける。頼周是を見て、遁れ難くや思ひけむ川中より馬を引返し、淀姫大明神の社家のありしに走り込み、無體むたいに頼みし間、土民の用意したる芋釜とて、穴のありけるにぞ竄しける。斯かる處に、龍造寺勢の内より加茂彈正といふ者、遁さじと追駈け來り、彼の穴の中より引出し、搔首にこそしたりけれ。又頼周を藏かくしたる社人も切害せられしぞ不便なる。是は神代家人

頼周父子
敵兵に殺
さる

に由縁ありし社人なり。情、思ふに彼の馬場頼周父子、過ぎし正月廿四日、人を祇園原に殺して、今の四月二日、己れ祇園岳の城を破られ、又人を河上の社に討つて、我も忽ち河上の社中に亡ぶ。因果歴然の道理寔に車輪の如しと、龍造寺家門の死期にいひしは爰なるべし。斯くて剛忠の軍兵、先手は早森川を過ぎて祇園岳に押詰め、後陣は北佐嘉に差廻す。是は頼周父子戦負けなば、定めて綾部へ落行くべし。其落足を討取るべしとの事なり。扱剛忠自身は、旗本を以て高木村の北迦きたはづれまで馬を出されし處に、又頼周が首を持來れり。剛忠入道、二つの首に向ひ、生きたる是を實檢ありけるに、又頼周が首を持來れり。剛忠入道、二つの首に向ひ、生きたる者にいふ如く、涙を流し申されけるは、如何に頼周黄泉の下にても能く是を聞け。愚老が嫡子家純は、御事の子政員が舅にて眼前親しき縁ならずや。然るに家純を初め、一門悉く御事の所業にて討ち殺せしは如何に、寔に暴惡の甚しき事、御邊に過ぎたるはあるべからず。されば其因果忽ちに回り來つて、將に百日をも過ぎずして、父子ながら骸を弓箭の巷に曝せりと、恨み怒られけるこそ理なれ。時に野田石

剛忠頼周
等の首を
實檢す

見守、或はいふ兵部と剛忠に向つて申しけるは、此頼周め、去る正月御一門の首を踏みけると承る。然ればきやつらが首を、水ヶ江の城門の下に埋め、出入の者に踏ませ申すべしといふ。剛忠頭を振つて、いや／＼其は狂人を真似る不狂人なり。左様の情なき事、ゆめく努々あるべからずとて、頼周子の頸に鵝眼を副へ、萬壽寺・高城寺兩所に送り、葬禮形の如く取營まれけり。頼周、此時一用齋と稱す。

或はいふ、此時頼周、河上の寺家光明院に走り込み、湯殿に隠れし處を、加茂彈正追駈け來り、搜出して殺害しけるとも。

或はいふ、此時政員、龍造寺の兵に誘出され、森川に於て相戦ひ打負けて、大戸ヶ里といふ所へ落行き、土民の家に走入り、簀の子の下に隠れしを、野田三河守槍を以て突殺しけるとも。

政員時に廿九歳なり。其一子馬場六郎政家、初の名は太郎四郎此時幼稚なりしを、家人牟田平右衛門、是を抱いて筑前の方へ立退き、年を経て東肥前へ歸入り、故馬場肥前守鑑周が舊領の内、七百町を安堵して三根郡中野の城に住し、後龍造寺家に屬

し子孫あり。

又いふ、頼周此書に載する所甚だ佞奸の者なり。然れどもさにあらず、博學にして才智あり。忠心深く又下賤を憐れみし者なり。龍造寺の一家を討取りし事は、主君に對して謂ある事なり。

一、爰に其頃、馬場が家人に藥王寺隼人允といふ者あり。今度祇園岳牛頭城合戦の前まへ廉より、遠所へ使節に行きて、主の先途に逢はず、歸りて後大に悔み、急ぎ龍造寺に赴き、某は馬場頼周家人何某と申す者にて候。主にて候頼周、兼ねて懇に召仕ひし者なり。然るに此度頼周討たれし砌、其場に居すして死を俱にせず、千萬是非なき事なり。唯今切腹申すべきの由申乞ひけり。其旨、剛忠へ披露ありしかば、主に忠ある者なり。助命然るべき由申されしかども、隼人承引せず達たちて申乞ひ、竟に高城脱寺に於て切腹しけり。其子あり。藥王寺市之允と號し、後に馬場肥前守鑑周に奉公す。

一、同天文十四年四月十六日の夜、龍造寺宮内大輔胤榮、急に軍兵を催して、頃日少

貳方にて神代の一族が籠りたる上佐嘉千布の城を攻めたりけり。彼の胤榮は、龍造寺の正嫡にして剛忠の甥なりしが、此度馬場が企に依りて、少貳家に鬱憤を含み、剛忠と共に軍を起して打出でけり。然るに今夜、千布の城には福島周防守利高千布次郎家利を先として、城原の江上衆楯籠りて中佐嘉衆と相戦ふ。されども不意の事なりしかば、當城忽ち落城して、皆山内へ引退く。此時龍造寺の軍士にも、中島主水允其外江副河副以下討死數十人なり。城は則ち焼失す。

龍造寺入道剛忠後の萬部成就の事

同年龍造寺剛忠法華妙典一萬部を、水ヶ江の城内に於て修行せらる。其奉行は堀江筑前守なり。九千部は去る天文七年より轉讀あり。今年一千部を修行あつて、總べて一萬部成就の處とぞ聞えし。導師は春日山高城寺の長老登岳和尚にて、高〔城脱カ〕寺慶雲院・泰長院等の知識を請じ、剛忠自身も精進潔齋し、毎日研水を灑いで焼香禮拜し、則ち城内に假屋を打ち道場とし、大衆の休息所百間・饗應所三十間を儲け、

龍造寺胤榮の千布城を陷る

剛忠入道十華萬部修行

又休息所と道場の間の路の左右に、俵米を積む事高さ六尺、其體壁の如くにす。布施は長老中に鵝目五十貫宛、平僧には十貫宛なり。扱野田石見守に下知あつて、兼ねて貯置きたる財寶を悉く藏より取出し、辻々に高札を立て、非人乞食共へ是を施行し、其上水ヶ江領の土民等の拜借したる銀・米の類、皆免許あり。今度萬部成就に付いて入りたる所の金銀米錢勘定の宛なし。又僧衆の夜の宿直物、新しく此度用意あつて、成就の後皆以之を與へらる。凡そ其體〔政カ〕徳世に同じくして人の耳目を悦ばせり。斯くて萬部事故なく成就の上供養を遂げられ、又百部を書き、城の北に當り其經卷を奉納あり。今の萬部島是なり。されば剛忠、萬部を修せらるゝ事兩度、去ぬる永正二辛巳年にも百人の僧を請じ、導師は水上山の天享長老にて、口別に百部宛轉讀あり。其年中に成就せらる。夫より又過ぎし天文七戊戌年より開辟あり。〔白〕下同ッ今年天文十四乙巳年に八箇年にして成就せらる。是れ併當家の繁榮國土の安全を祈られたる爲とぞ聞えし。

或はいふ、剛忠萬部修行の事、兩度にあらず一箇度なり。永正二辛巳年に始り、

天文七戊戌年に成就、開辟の導師は水上山の天亨長老、結願の導師は春日山の登岳和尚にて、百人の僧を以て口別に百部宛讀誦すとあり。其年間二十三箇年に及ぶ。此段追つて考ふべし。

一、天文十五年丙午正月十八日、少貳冬尙、城原勢福寺より有馬と軍兵を合せ、龍造寺胤榮千葉胤勝の居城小城・佐嘉兩城を攻む。胤榮胤勝防ぐ事を得ずして、千葉は降參し龍造寺は落失せけり。時に有馬の者共、同月廿二日小城に晴氣・松尾・岩藏・三間寺等の所々に打入り亂妨する事、法に過ぎたり。爰に於て千葉胤勝の家人共、堪へずして爰かしこへ出合せ打戦ひ、有馬の軍兵多く討たる。是より有馬暫く亂入せざりけり。

龍造寺剛忠入道卒去附隆信家相續の事

同年三月十日、龍造寺山城入道剛忠、水ヶ江の居城に於て卒去せらる。行年九十三歳なり。家を續ぐべき子孫なかりしかば、一族の龍造寺播磨守家宗、是を歎き一門

龍造寺剛忠卒去

他家の家僕を集めて談合しけるは、今當家を繼ぐべき人を案するに、故六郎次郎殿の嫡子、頃日寶琳坊に坐す中納言律師或は中將。圓月に優るはあるべからず。元より老公の嫡孫といひ、其上器量の人なり。此人に遷俗を勧め、急ぎ水ヶ江の城へ入れ申すべし。各、如何といふ。又或者申しけるは、最も然るべし。さりながら新次郎家就は、當家正統の分にて、水ヶ江の相續似合はしき人なり。一是をや招くべしといひ、衆議區々にして決せざりけり。時に一座の中より、兎角斯様の事は神慮に任せて宜しき物なり。所詮圖を取つて其善惡を知れと申す。何れも尤もと同じて、則ち龍造寺八幡宮に向つて御圖を下しけるに、中納言圓月にぞ極はりける。扱龍造寺播磨守・野田安藝守以下の宿老共集りて、律師圓月を先づ石井尾張守兼清或は忠房が宅に請じ、子息大隅守が寢間を休所に取構へ、先づ鯉を進らせ、加瀬町より彦壽と申す女を宿直に召置き、還俗させ申して、夫より水ヶ江の城へ移しけり。圓月生年十八歳、伯父寶琳坊豪覺法印の弟子、小字長法師丸。此時忍辱の法衣を脱ぎて、龍造寺民部大輔胤信と改名ありけり。斯くて胤信則ち水ヶ江龍造寺の家を相續し、剛

隆信剛忠の跡を繼ぐ

忠一世に少貳家よりの新恩の地河副郷一千町、并に重代の所領小津郷八十町を知行あり。後に中國の大内介義隆に屬し、天文十七年に諱字を受けて胤隆と號し、同十九日年重ねて隆信と改めらる。隆信とは義隆最物の名にてぞありける。

龍造寺胤榮本領に歸る附少貳冬尙没落の事

爰に龍造寺の總領宮内大輔胤榮は、今年正月十八日少貳冬尙の爲に、佐嘉の城を退き浪人の體にて、頃日は筑前國へありけるが、如何にもして本領へ歸り入らむと思立ち、大内介より太宰府へ据ゑ置きし守護代杉十郎隆滿に據りて、中國に於て大内介義隆をぞ頼まれける。義隆領掌あり。龍造寺胤榮へ送られし狀にいはいはく、

至筑前上國之由可然候。本意不可回踵候。猶隆滿宗長可申候也。

三月二日

義隆判

龍造寺宮内大輔殿

斯くて宮内大輔胤榮、大内介の加勢に依りて少貳方の輩と相戦ひ、合戦に打勝つて、

龍造寺胤榮少貳と戦つて勝つ

事の次第を中國義隆へ註進す。時に大内介よりの狀に曰く、

合戦勝利之由神妙也。依所望之地、肥前國佐嘉郡之内五千町、神崎郡之内西郷五百町、三根郡之内下村貳百町、防所三百町之事所施行也。猶以可被抽忠節之狀如件。

卯月廿二日

義隆判

龍造寺宮内大輔殿

斯くて龍造寺宮内大輔胤榮、翌くる天文十六年丁未、自ら中國へ赴き、義隆の方へ少貳冬尙の舉動を様々訴へ申されしかば、其旨帝都に於て將軍義晴公へ、義隆より委しく言上ありしに依りて、其儀ならば、冬尙事早速誅伐すべきの由仰出されけり。玆に困りて同年六月、義隆、筑前の守護代杉十郎隆滿が方へ、右上意の旨下知せられ、其上龍造寺宮内大輔胤榮を豊前守になし、肥前の守護代として、少貳退治の事を下知せらる。斯かりし程に、龍造寺胤榮、則ち安堵を蒙り、豊前守に任じて、同七月下旬、肥前の本領に歸入り、頓て同名民部大輔胤信中頃隆胤。後隆信と名づく。と談合し、軍

龍造寺胤榮本領に歸る

龍造寺胤榮本領に歸る附少貳冬尙没落の事

龍造寺少
貳合戰

兵を合せて少貳冬尙追罰の爲め、東肥前へ出張あり。時に胤信、大内家に屬して出馬初なり。斯くて少貳方の輩、爰かしこに打出て是を防がむとし、又冬尙の舍弟千葉介胤頼、小城の牛尾の麓普賢寺と松尾に兩城を取構へ、人數を籠置き、兄冬尙に力を合せて大内勢を待懸けけり。然るに龍造寺豊前守、閏七月杉十郎へいひ送り、筑前の軍士を麾き、同名民部大輔と一つになり、冬尙の居城神崎郡勢福寺城へ押寄す。時に少貳の老臣江上石見守元種・宗筑後入道本盛、馬場右衛門大夫周詮以下、三根・神崎の間所々にて防戦しけれども、度々軍に利を失ひ、其上八月五日、米田原の合戦に、冬尙の股肱と頼まれたる宗筑後入道本盛、苔野口に於て討死しければ、少貳方の軍士彌、力を落しぬ。彼の筑後守秀恒入道は、冬尙若年の時より附添ひし者なりし故、甚だ歎き申されけり。此時冬尙より土肥但馬守への狀に云く、

先剋苔野口防戦之砌、本盛〔討脱カ〕死之由不及是非次第に候。悲歎令察候。左馬助若輩之條、晴愁鬱之思彼所取育之儀、別而頼入存候。旁、爲可申染筆候。恐々謹言。

八月五日

冬 尙判

土肥但馬守殿

冬尙敗北
居城を去
る

斯くて少貳衆始終の合戦に打負けしかば、冬尙竟に十月十六日、勢福寺城を下城あり。筑後國へぞ赴かれける。然るに大内介は、容易く冬尙を追落し、肥前の内三根・神崎等の少貳領一圓に押取り、龍造寺一家を以て、其境を守らせけり。
一、今年初めて肥前國檢地之あり。

龍造寺隆信兩家相續附小河筑後守武純忠心の事

胤榮逝去

天文十七年戊申三月廿二日、肥前國佐嘉の城主龍造寺豊前守胤榮、兼ねて病惱に迫り卒去あり。此人は當家の正嫡にて、前大和守從五位下胤久の子なり。未だ壯年に早世ありしかば、息女一人ありて男子あらず。茲に因りて龍造寺の嫡家、既に斷絶に及ばむとしけり。斯かりし程に、老臣小河筑後守武純・納富石見入道道周・江副安藝守久吉、其外龍造寺伊賀守家直等詮義を遂げ、鍋島駿河守清房と談合して、水

龍造寺隆信兩家相續附小河筑後守武純忠心の事

胤信胤榮の嫡家を繼ぎ隆信と改名す

ケ江の城主民部大輔胤信を以て、胤榮の後室に娶せ、當家と水ヶ江兩家を一つに合せて相續然るべきの由、衆議決定あり。頓て民部大輔を佐嘉村中の城へ請じて、彼の後室に婚禮を調べ、則ち胤榮の遺跡をも相續あり。龍造寺の總領とぞ傳きける。然るに胤信、當家庶子、總領の兩家ともに連續あつて、先祖相傳の所領八千餘町を知行し、程なく大内介義隆に即いて諱字を受け隆胤と改め、後に又改名して隆信とぞ申しける。

龍造寺に兩流あり。總領を村中龍造寺と稱す。胤榮の一家なり。庶子を水ヶ江龍造寺といふ。剛忠の一家なり。

さても此時村中の老臣に、土橋加賀守榮益或は和貞とて、故胤榮に仕へて隨分忠を盡しし者なり。故主胤榮、早世ありしを明暮に歎きて、一向世事を諦めず居たりしが、更々隆信を肯せず、如何にもして前和泉守家門の子龍造寺左衛門佐鑿兼を以て、家を立てむと思立ち、竊に豊後へ通じて、大友屋形修理大夫義鑿へ内談しけり。彼の鑿兼は元來義鑿の烏帽子子にて、去ぬる天文二年に加冠して、一字を受け孫九郎鑿兼

老臣小河武純胤榮の後室を苦諫す

と號せし人なり。然る間、兼ねて義鑿、是を懇意に思はれけり。其上、頃日脱カ大内介と大友武威を争ふ半ばなりしかば、義鑿彌、幸なるかな。彼の鑿兼を我手に入れ、大内一味の隆信を退くべしと思案して、頓て土橋と同意あり。其計略專なり。扱又隆信の妻室は、鑿兼の妹なりしかば、是も土橋と同意にて、隆信と交り睦しからず。斯かりし程に、龍造寺の一族家人等、悉く當家の浮沈を危んで雙方に別れ、何となく佐嘉騒動し、既に龍造寺の家、廢亡とぞ見えたりける。然るにある日、老臣小河筑後守登城して直に簾中へ推參す。少時あつて内室立出で武純或は榮純に對面ありけるに、筑後守畏まつて申しけるは、寔に先君胤榮公、計らず御逝去に付いて、御家人悉く力を落し、悲歎の涙に袖を干し得ず候。さりながら御形見の姫君渡らせ給ふこそ、歎の中の悦にて候へ。定めて御成人あるべし。恐ながら一目見奉りたく候と申す。内室、武純が望に任せ、則ち姫君を當座に召す。筑後守、姫を搔抱き目も離さず、良、打ち守り涙を浮べて申しけるは、さても果報なき姫君や。御幼稚にて父上に後れ給ひ、未だ十歳にも成り給はで、唯今某が手に懸り、刃の上にて御命を失

ひ給ふ痛はしさよと、いひも果てず脇差をすばと抜き、姫君を刺殺さむとす。母上を初め女房達、周章ふためき走り寄り、筑後守が手に縋り、是は如何なる事ぞや。物に狂ふか小河殿と、上を下へと返す。武純申しけるは、何ぞや物に狂ふべき。此の姫の御命は、偏に母上の御心より失ひ給ふなり。夫を如何にと申すに、先君御死去の後、御家を續ぐべき人もなく、當家忽ち絶えむとす。然る間、御一門の歴々、其外納富、江副を初め、物の數ならぬ此筑後守打寄りて詮議決定の上、胤信公を還俗させ、御前に娶せ奉り、龍造寺の名跡を立て、心安く罷在り候處に、如何なる天魔の勧め進らせけるにや。御夫婦の御中睦しからず、御家の浮沈此時に極り、御家人二つに分れ、龍造寺の家滅亡忽ち遠きに候はず。されば其危きを見て、近國の諸將佐嘉を攻めむとする由風聞あり。今此體ならば、此期に及んで、よも防ぐ味方は候まじ。然らむ時は、此姫君の敵虜となり給ひ、是こそ龍造寺胤榮の娘よとて、凡下野人の手に懸り、名字の恥をかき給はむが口惜さに、唯今某刺殺し申すなりと、更に刀を納めず。時に母上宣ひけるは、尤なり、筑後守。御事が申す處、一々承引す。

今よりは自らが心を改め、胤信公と睦しかるべし。其子を免して給はれと、泣く泣く手を合せられしかば、武純も泪に暮れ、則ち姫を渡し申し、左様に候はゞ偏に御家長久の基、我々の悦び是に過ぎず。彌、唯今の御言葉、少しも違はせ給ふなと、返すく教訓し、奥を退出しけり。是よりして隆信夫婦親くなり給ひ、男女の公達多く儲けられ、龍造寺の家長久しけり。

右姫君、此時七歳。小字於安。成仁の後蓮池の城主小田彈正少弼鎮光に嫁す。

鎮光切害の後、唐津の城主波多三河守親に嫁す。親遠流の後、佐嘉に歸りて尼になられ、靜室妙安といふ。

少貳冬尙歸城の事

太宰少貳冬尙は、頃日筑後國に居られしが、去る頃龍造寺胤榮卒去し、佐嘉の城下騒動する由傳へ聞き、さらば其變に乗じて、此度歸國すべしと思立たれ、伯母塔對州の宗讚岐守義調入道一鷗の方へ加勢を乞はれし間、一鷗頓て健兵三百餘騎を差

越しけり。冬尙、是に力を得、則ち筑後を立ちて川を越え、東肥前に打入り舊城神崎郡勢福寺城へ入らむとす。當城には此時、大内家より城番として、江上隆種といふ者を入れ置きけり。彼の隆種は、元來少貳の家人にて、江上元種が一族なりしかども、去年の合戦に冬尙没落ありし時、止む事を得ず大内勢に向つて降參し、當時は此城の番人となり、代るく番衆を置きけり。斯かる處に一鷗の加勢三百餘人、ある夜勢福寺の城に忍び入る。然るに今夜の番人は、光安忠三郎にて、主從僅に十人計り、當番の侍爰にありと、名乗懸けく大に勵み戦ひ、忠三郎自身手柄を現し、竟に城門を破られず。結句三百餘人の夜討共、光安に防がれ辟易して引退きけり。此時忠三郎、江上隆種より感狀を得て、當座に刑部丞になさる。斯くて當城暫しは差泳へて見えしかども、番頭の隆種、素より少貳譜代の者なりし故、頓て城を去り冬尙へぞ明渡しける。斯かりし間、冬尙則ち勢福寺城に入り、江上左馬助尙種を以て執權と定め、再び三根・神崎の兩郡を知行して威を振はれけり。或はいふ、宗一鷗入道を、豊後侍宗一勝とも。

少貳冬尙
歸城

田尻伯耆守親種筑後國鷹尾に城を築く事

田尻家の
由來

爰に其頃筑後國に田尻伯耆守大藏親種といふ者あり。漢高祖の子孫にして、原田・秋月・江上・高橋とは、同姓の一族なり。先祖原田大夫種成が三男三郎實種が時、筑前國より始めて筑後の三池田尻村に移住せしより田尻と號し、彼の親種が曾祖父田尻左衛門大夫恒種以來、豊後府内の大友家に從屬す。然るに親種が父遠江守治種、去ぬる永正年中、筑後國の住人黒木筑後守蒲池民部少輔・朽網兵庫頭・石泉菴反逆を企て、計策の廻文を差廻しける時、大友家に對して忠節ありしより、今の親種に至つて彌、府内に馬を繋ぎ、筑後國の内三池・三瀨・山門三郡にて數千町を知行しけり。されば親種、先祖代々田尻村に在城すと雖も、近年府内へ訴へ、櫛崎へ居城を變へぬ。然れども又彼の在所洪水度々に及び、水の手相損するに依りて、重ねて府内へ訴へ、領内鷹尾に新城を構へたきの旨、大友屋形義鑑に相願ふ。當國は大友支配の國に依りてなり。此時義鑑并に家臣入田丹後守親廉より、田尻伯耆守親種

田尻親種
鷹尾に城
を築く

田尻伯耆守親種筑後國鷹尾に城を築く事

へ新城免許の狀に云く、

就近年覺悟之要害水手相損候、至領内高尾可被取移之由候〔符カ〕。肝要に候。爲直
城倍々堅固之才覺專要之段、猶入田丹後守可申候。恐々謹言。

九月三日

義 鑑判

田尻伯耆守殿

就先年要害之儀言上之旨候條、令披露候之處、雖被成御分別被取誘候、彼在
所依洪水損水手候て、於領内高尾之村有一壘覺悟度之由、内々示給候之趣、
達上聞候之條、爲直城可被取構之由被成御書候。御面目至珍重候。彌、於
相應之儀者、何時茂不可有無沙汰候。猶期來喜先令省略候〔春カ〕。恐々謹言。

九月六日

入田親廉判

田尻伯耆守殿

御報

親種、鷹尾に彌、新城を築き取移りぬ。其後享祿二年己丑の春、江浦津留濱田堀
切に四箇所の端城を構へ、本城と共に五箇城とす。

豊後國黒嶽に鬼馬出づる事

鬼馬出現

其頃豊後國に奇異の事あり。直入郡の内に、昔より嵯峨天皇の御廟を祭りて、一社
を建立し、毎年此國の太守より神事を執行はれけり。然るに大友豊前守政親の時、
先例に任せられ當社へ神馬を置かれし處に、過ぎし明應の頃、彼の神馬搔消す如く
失せにけり。是は何様、太守の身の上の凶事にやありけむ。豊前守政親、幾程もな
く赤間ヶ關の海上にて、不慮の生害に遭ひ給へり。斯くて件の神馬、今年天文十八
年に、凡そ星霜六十年を歴て現れぬ。されども以前見たりし馬の形にあらず。先づ
茸毛が黒鹿毛になり、尾髪は森の如く、白き角を戴き、口は耳の根に裂けて兩眼火焰
に異ならず。偏に鬼とや云ふべきなれば、見る者忽ちに逃隠れぬ。是は以前の神
馬にはあらずといふに、則ち太守政親の銀の札を下げたり。老若男女惶るゝ事限
なし。此馬早晚黒嶽の上より駈下るに、其足音雷の如く、人馬六畜ともに取喰ふ
事、其數を知らず。斯かりし間、既に國中の騒さわぎとなり、府内の城許へも注進あつて、

豊後國黒嶽に鬼馬出づる事

二五七

當國守義鑑へ披露ありけり。是に依りて彼の馬退治すべき由、様々詮議せられし處に、大友の家中に隠もなき荒者城後因幡守・大窪藏人助兩人、頻に申乞ひけり。大事の手合物なりしかば、小人数にての退治如何あるべきと、義鑑思案ありしかども、達つて望み申すに付て免されけり。兩人大に慶び、ある夜人をも具せず、唯、二人黒嶽山の麓今水越火草馬場といふ所に出向ふ。後難を思ひしかば、仕損じては叶ふまじと兩人談合し、城後は三尺六寸の大長刀を陽に構へ、大窪は八寸餘の大鷹股を白木の弓の架延べたるに打番ひ、長八尺計りに見えける立石のありしを楯に取りて、件の鬼馬遅しとぞ待懸けたる。案の如く彼の馬黒嶽の頂上より鳴りはためきて駈下り、城後大窪がありしを疾く知りて一文字に飛來る。時に大窪、えいやつと切つて放つ。如何したりけむ。一の矢を射損じ、二の矢を番ふ時、鬼馬雄つて件の立石を飛越えけるを、城後因幡守、得たりと聲を掛け長刀を以て突き貫き、石の際にぞ押臥せける。扱其夜も明けて、火草馬場には鬼を平げたりと云ひ周章てしを、朽網右京亮親光、搔揚山の城より聞付けて、急ぎ馳せ行き是を見けるに、其體會て常

の馬にあらず、長七尺に餘り、毛は鐵の針に異ならず。此事、早速府内へ注進しければ、太守義鑑急ぎ城後・大窪兩人を召出し、比類なき手柄仕たりと大に褒美ありけり。今度彼の馬現れしも、又太守の上の凶事にやありけむ。明くる天文十九年庚戌二月十二日、大友義鑑不慮の切害に遭はれしなり。

北肥戦誌 卷之十一 終

北肥戦誌 卷之十二

大友義鑑横死の事

大友義鑑
横死の原
因

爰に豊後の屋形大友修理大夫從四位下義鑑、天文十九年庚戌二月十二日、家臣の爲め不慮に横死せられけり。其濫觴を尋ね聞くに、義鑑に子息餘多あり。中にも嫡男の當屋形を五郎義鎮と申す。其次を八郎と號す。是は今の簾中の腹にあらず、先腹の子息なり。又當腹の子を細御曹司藤妙公といひけり。されば世の中の習、繼母の讒口時々にて、義鑑と義鎮の中快からず、夫婦密談の上、寵臣入田丹後守親誠へ内談あり。大友廿代の家督を、彼の當腹の細御曹司に譲らむと思立たれ、ある時、老臣齋藤播磨守・小佐井大和守・津久見美作守・田口玄蕃允或は彈正を召して、爾々の事を申聞けられけるに、四人一同に申しけるは、唯今の上意我々更に感心せず。御成仁

義鑑の横
死

の當屋形を闇かれて、未だ幼稚の藤妙殿に御家を譲らるゝ事、全く御本意にあらず。自他の間、是に過ぎたる悪事候まじ。此儀、一向に思召止められ然るべしと申切つて居たり。義鑑、案に相違し重ねての言葉もなく、脆然として奥に入らる。其後義鑑、猶も入田親誠を竊に語らはれ、當屋形義鎮を殺さるべき企ありけり。其事、如何にして世間に洩れ聞えけむ。義鎮早速、齋藤・小佐井が子共を供として、立石村に居所を替へられけり。斯かりし程に、父義鑑、是は偏に彼の四人の所爲よと思はれしかば、先づ齋藤播磨守・小佐井大和守を召寄せ、城の門外にて切害せられ、扱義鑑夫婦・藤妙殿御料人、其外二階の上に居られしに、津久見美作守・田口玄蕃允は、義鑑の前にありけるが、我が身の上と思ひしかば、田口は先づ義鑑を切殺し、津久見は簾中御料人藤妙公を切害し、其外局女房達悉く切捨て、津久見は當座に腹十文字に搔破つて臥し、田口は近習の侍城後左近に討たれにけり。寔に前代未聞の振舞、國中騒動大方ならず。大友家中の士上下をいはず、皆足を空にして馳違ふ。斯くて臼杵安房守を初め南郡衆は、入田親誠に一味し、皆々入田へ引籠り、一行の

大友義鑑横死の事

企ありしかども、當屋形義鎮、頓て立石村より府内に歸館あり。城下彌、靜謐なりしに依りて、入田に一味の輩、何れも義鎮へ降參し、入田親誠・同父親廉・同子十郎、其外一類中は豊後に溜り兼ね、肥後國へ退き舅阿蘇大宮司惟豊をぞ頼みける。されども大宮司、彼の親誠が曲惡の程を暗ながら惡みしかば、是を介抱せず。斯かりし間、入田一門すべき様なく、四月四日、親廉・親誠・同子息十郎以下、其門葉悉く阿蘇に於て切腹しけり。是よりして府内彌、平均し、五郎義鎮、父義鑑の遺跡を安堵ありけり。後に宗麟入道と申し、は、此五郎義鎮の事なり。

或はいふ、義鑑生害、二月九日の事なりとも。

又いふ、九月二日とも。

或書にいふ、義鑑、先づ齋藤小佐井を呼寄せ是を誅し、扱津久見美作・田口玄蕃を呼ばれしに參らず。使再三に及びしかば、兩人今は遁れぬ所よと思ひ、是を最期と出立ち、城の裏門より入りて、津久見は、直に簾中へ走り込み、奥方藤妙を切害し、田口は義鑑の居間へ切つて入り、則ち義鑑を刃傷しけりとも。

入田父子
自盡

或書にいふ、入田親誠、阿蘇に落行き、舅大宮司を頼みしかども、大宮司是を惡み、搦捕りて首を刎ねけるとも。

一、今度府内の騒動靜謐しければ、大友旗下の諸將、皆義鎮へ參禮す。其中にも筑後國田尻伯耆守親種より使節を以て、府内靜謐の祝詞を述べ、其上彌、別心なきの旨、神文を差送りしに、義鎮よりの狀にいはく、

爲「爰元靜謐祝儀」太刀一腰・鴈に送給候。祝著候。猶豊饒美濃守可申候。恐々謹言。

二月廿六日

義 鎮判

田尻伯耆守殿

對「義鎮」倍可被「勵」忠貞之段、以「寶印裏」始中終承候。誠御憑敷祝著候。其堺堅固才覺、可爲「其方代々」勞功之首尾候。猶豊饒美濃守可申候。恐々謹言。

二月廿八日

義 鎮判

田尻伯耆守殿

大友義慶横死の事

菊池義武蜂起附下筑後所々軍の事

爰に菊池左京大夫義武は、其頃筑後國へ蟄居し、三池溝口・西牟田の一族を頼みてありけるが、今度府内の騒動を聞いて大に悦び、急ぎ舊領肥後へ打越え、菊池譜代の輩を相催し、府内を攻め落して年來の宿意を晴さむと思ひ立ち、三月中旬に旗を揚げ、頓て肥後國へ渡海し、田島伊勢入道・鹿子木三河守を差語らひ、隈本の城に楯籠りけり。斯かりし程に、筑後國にも西牟田彌次郎親氏、其一族に田河兄弟・小山村守、其外三池上總介親員・溝口丹後守鑑資・安武安房守鑑教以下、菊池に同心して各、相圖を定め、下筑後へ討つて出で、今福の要害に取籠り、大友へ向つて相戦はむとす。此事早速、府内へ聞えしかば、新屋形大友左衛門督義鎮、急ぎ於筑後高良山の座主、其外蒲池近江守鑑廣・田尻伯耆守親種・安武安房守が方へ、彼の徒黨退治の事を下知せらる。右人數の内、安武は最前逆意を挿み、西牟田以下と一味しけるが、如何思ひ反しけむ。懇望を以て疾く降參しけり。

菊池義武蜂起隈本城に籠る

三池上總介等鷹尾城を攻む

一、田尻伯耆守は、至つて大友無二の志ありしかば、四月二日より居城鷹尾に楯籠りて、彼の徒黨等と戦はむとす。斯くて明くる三日、三池上總介・溝口丹後守・西牟田以下現形して、田尻が在所へ取懸る。中にも肥後の大津山來り加はりて、三池衆と一つになり、鷹尾の城邊相絡む。時に田尻は俄の籠城なりし故、城中無勢に依りて防戦難儀に見えしかども、山下の蒲池近江守に申談じ、城内堅固に依へけり。其半、田尻が弟山城守鑑乘、軍兵を率して溝口薩摩守が居所へ取懸け打崩し、則ち引返しける處に、肥後の和仁邊春・本告以下横合に懸りて、鑑乗が勢を撃つ。鑑乗數度防戦を遂げしかども、既に難儀に及びけるを、蒲池因幡入道・同子息石見守駈付けて敵を追崩し、田尻勢悉なく鷹尾の城に引入りぬ。

一、同四月十九日、彼の徒黨の内、西牟田彌次郎が名代田河中務少輔兄弟・聊か軍用ありて溝口鑑資が城へ赴き、夫より三池へ打通りしを、田尻伯耆守、伏草を以て田河中務・同民部以下敵數人討取りぬ。田尻勢にも同名但馬守鑑忠・同大和守鑑房以下、高名手負數十人なり。

一、此時同國酒見下野守も、豊饒美濃守一所を以て、三池溝口・西牟田と所々虎口に
て相戦ふ。時に義鎮より酒見下野守への状にいはく、

今度三池上總介・溝口丹後守以下、以西牟田彌二郎同心相絡候之刻、以豊饒美
濃守一所、於所々虎口粉骨忠貞感悅無極候。然者其方當知行酒見北分六町分
之事乍勿論、聊不可有相違候。加恩之事於筑後之間、可加扶助候。益、忠儀
肝要候。恐々謹言。

卯月廿三日

義鎮判

酒見下野守殿

一、同月廿八日、田尻勢三池に到り取懸け合戦す。終日の軍にて城兵引入り、一兩
人討死しけり。
一、五月十五日、蒲池武藏守鑑盛、自身軍兵を率ゐて田尻と勢を合せ、西牟田殘黨隱
住むの在所へ取懸け防戦せしめ、敵數輩討取る。時に田尻山城守・同名又四郎、同
じ口に於て分捕す。

一、同月廿八日、肥後國小代實忠が大友方にてありけるに、隈本衆大津山・大野・和
仁・邊春に、三池親員相加はり、小代が在所梅尾へ取懸け、中にも三池の軍士等、
小代勢と相戦ふ。時に小代大和守高名を現はし、三池の家人に小山以下數十人
討死しけり。隈本衆引退く。

一、閏五月五日、府内より筑後の逆徒檢使として、興導寺・佐藤刑部少輔を差遣し、
田尻伯耆守が鷹尾の城に差籠る。又肥後へも菊池義武・田島・鹿子木以下、其外の
徒黨誅伐として、府内より吉岡越前守長増・志賀安房守親泰・小原遠江守親元を差
遣すに、此三老、今月三日府内を打立ち、諸勢皆肥後へ打入り、小國に到つて著陣
し、近々小嶽二重口に差寄らむとす。時に國侍には、城・赤星・内空閑・長野・小森
田・阿蘇・高知尾・小代以下、筑後には兩津江・五條無二の大友方にて、菊池義武其外
の徒黨退治の事を評定す。

一、同月下旬、府内よりの兩檢使興導寺・佐藤刑部少輔、田尻伯耆守上筑後の輩と相
談を以て、溝口鑑資が要害へ押寄せ攻め戦ふに、鑑資詠へずして則ち落城しけ

り此時、大友屋形より田尻への状にいはく、

溝口要害之事、以軍勞之辻、輒去候外聞實儀祝著無極候。然者三池事者相支候。自他之覺無曲候。乍辛勞急度取詰可被打崩事頼存候。委細興導寺・佐藤刑部丞可申之旨、年寄共可申候。恐々謹言。

閏五月廿六日

義 鎮判

田尻伯耆守殿

一、七月十三日、田尻伯耆守竹井原に於て相戦ふ。弟山城守を初め家人砥上新兵衛・真弓助八郎・東林寺瀬戸仁三郎・三峯小四郎・古賀九郎三郎、其外中間三人庇を蒙りぬ。

一、同月廿三日、蒲池武藏守鑑盛・田尻伯耆守親種軍兵を一つに合せ、三池の家人小山淨榮入道が籠りたる三池外郡今福の要害新開陣所に押寄せ、蒲池勢、安危思惟なく切懸り、終日合戦し敵數百人討捕りぬ。時に淨榮、防ぐことを得ずして三池の城へ逃退く。されども其殘黨、小山山城守を大將として數輩切つて出づ。寄

今福合戦

三池合戦

手各、最前より構に著き、刀打を以て相戦ふ。寄手其日の頭人は田尻山城守鑑乘にて粉骨を抽んで、同名兵庫入道野田土佐守・塚本太郎兵衛・金栗八郎次郎以下、手を碎き合戦す。中にも田尻尾張守種任、比類なく相働き、敵の大將小山山城守を槍下にて討取りたり。斯かり間、城兵小山對馬守を初め宗徒の者數十人、防ぎ戦うて討死す。田尻勢にも討死手負若干なり。既に今福の要害破れしかば、夫より蒲池武藏守・田尻伯耆守、則ち三池の城へ取懸け攻め戦ふ。時に蒲池三郎兵衛尉進んで城を攻め、城中に宗と頼みたる三池右衛門大夫を討取り。其外分捕高名様々なり。斯かりし程に、城主三池上總介親員、忪へず城を遁れ出で肥後國へ落行きしかば、當城不日に落去しけり。斯くて寄手の輩、城の麓にて凱歌を揚げ、則ち三池の一族同名親隆入郡して當城に移り、諸勢皆開陣し、筑後國の一揆は爰に於て靜謐す。

一、右一亂に依りて、肥前國西島の横岳讚岐守資誠・蓮池の小田彈正少弼鎮光并に服部常陸介方へも、大友義鎮より頼み思ふの由、三原和泉守を以て申し來りし故、

各、境目へ出張して、西牟田の殘黨と相戦ふ。

一、近年大友より筑後國へ守護代を置く。其人數には豐饒美作入道永源・河内太夫・

齋藤伊賀守以上大永八年の頃。豐饒美作入道三原和泉守以上天文五年の頃。豐饒美濃守鑑述・小田若

狹守鑑言・森越前入道宗智以上天文廿二年の頃。

一、今年天文十九年庚戌七月朔日、肥前國佐嘉の城主龍造寺民部大輔隆信、中國大

内介義隆の吹擧を以て山城守に受領す。

一、天文二十年辛亥三月、筑後國草野鎮眞、大友義鎮の下知を以て、發心嶽の城を去

り、同名左衛門尉鑑員、去年より出城して築河に在宅しけるが、則ち草野へ歸り當城へ還住す。

一、去年筑後國の逆徒は平均しけれど、同時に菊池左京大夫義武が籠りたる肥後國

隈本の城は落去せず。依りて今年天文二十年の秋、大友館義鎮、大軍を以て自ら

隈本を攻むべしと、肥後へ來陣ありけるに、御船城主甲斐民部入道宗運、急ぎ出向

ひ是を案内し、菊池一味の輩一々に攻め落して、同九月五日、終に隈本の城をも

龍造寺隆信受領

隈本落城
菊池義武
自害

攻め干しければ、菊池義武遁るゝ方なく切腹、或は生捕り首を切るとも。肥後國已に靜謐す。

大内介義隆滅亡附龍造寺隆信没落の事

大内義隆
老臣陶の
爲に害せ
らる

其原因

同天文二十年九月朔日、周防國大内介多々良朝臣義隆、其老臣陶尾張守隆房が爲に生害せられ、百濟國の琳聖太子より以來、當家廿八代にして正に絶えけるこそ淺猿けれ。彼の事の起を尋ね聞くに、義隆過ぎし享祿元年十二月廿日、父義興逝去の遺跡を續がれしより、頻に朝廷に昵近し、次第に昇進あつて、大納言二品兵部卿太宰大貳に歴昇り、西三十三箇國の貫主として、偏に上見ぬ鸞に異ならず。然るに義隆、去し頃御臺所に後れ給ひ、悲歎の涙の中に、又持明院前左中將基親入道一忍軒の息女を京より迎へ、甚だ最愛し給ふ。されども此御臺、素より九重の翠帳紅閨に仁ひととなり給ひ、目馴れぬ田舎へ初めて下向ありしかば、霞立つ春の空には、寂莫として故郷の花を戀ひ、紅葉する秋の庭には、罔寥として昔の月を忍び、其片端も思ひ慰み給ふ色なし。義隆、是を痛ましく思はれしかば、花落へ申送り、月卿雲客の中に敷

島・絲竹の道に叶ひし人々を、居城山口へ招居る。雪搔きこぼす朝・雨添ふる夕、詩歌管絃の外又他事もなく、御臺所の心を慰めらる。されば大内家の風俗、是よりして何となく京家を真似ね、烏帽子のため様直衣の著様まで、皆花車さやしゃを好み、一向武士の本意を失へり。茲に因りて老臣陶尾張守、此事を深く歎き、様々諫言を加へしかども、義隆敢て許容なく、結句尾張守を避け給ふ。爰に於て隆房、恨を含んで忽ち逆心を挟み、中國は申すに及ばず、九州を觸廻し一味の輩を語らひけるに、豊後の大友・豊前の城井・長野、筑前の麻生・原田、肥前の少貳、筑後の蒲池、肥後の阿蘇、其外悉く尾張守に同心す。斯くて隆房一味の輩を差招き、急に軍を起して八月下旬、山口の館へ押寄せしかば、不意の專にて城中周章ふためき、冷泉判官一人敵を防いで、義隆は長門國へ没落あり。九月朔日、御臺公達、舅一忍軒ともに皆生害せられけり。寔に唐天寶の古、玄宗位を失ひ給ひし事は、楊貴妃華清宮に入りてより、其政を怠る所にあらずや。義隆是を思當られざるこそ〔悲力〕抵けれ。斯かりし程に、中國より太宰府へ居る置かれし守護代杉越前守興連も、敵の爲め自害して失せたりしか

ば、鎮西にある大内旗下の諸將皆力を落し、少貳・大友方の輩、大に力を得て九州動搖に及びぬ。

一、爰に肥後國龍造寺の家臣土橋加賀守榮益前名圭水 和貞、今度義隆滅亡の事を聞いて大に悦び、己天の時を得たり、兼ねて肯はず隆信の大内に屬してありしこそ幸なれ。此動搖に追出して、鑿兼に家を續がせ申し、我が身も榮華に誇らむと、密に同類共へ内談し、其旨少貳・大友の許へいひ送り、扱頃日隆信を惡む國中十九人の城持、神代大和守勝利・高木能登守鑿房・同名肥前守胤秀・小田駿河守政光・八戸下野守宗陽・江上左馬大夫武種・横岳讚岐守資誠・馬場肥前守鑑周・筑紫右馬頭惟門・姉河彈正忠惟安・本告左馬助頼景・宗兵部少輔尙夏・藤崎筑前守盛義・出雲民部大輔氏忠・三人の犬塚・綾部備前守鎮幸・朝日近江入道宗賢、其外有馬・後藤・多久の輩まで皆相語らひしに、大卒土橋が申すに同意しけり、斯くて此輩、頓て龍造寺の居城佐嘉を攻めむとす。

一、此時小城郡蘆刈に徳島左衛門大夫信安といふ者あり。徳島には養子にて、實は

鴨打胤忠
の仁俠

小田政光の子なり。小田は元より少貳方の者なりしかば、此も騒動に佐嘉を攻めむと思立ち、少貳冬尙の舍弟晴氣の千葉介胤頼を大將に取立て、軍兵を用意しけり。然るに彼の徳島が近邊に、鴨打陸奥守胤忠とて大勢の者あり。無雙の勇士なりし故、徳島左衛門先づ彼等を語らひなんと思案して、陸奥守が館へ赴き心底の程を密談す。されども鴨打は、兼ねて龍造寺に志を通せし者にて、敢て徳島に一味せず。兎角答へて左衛門大夫を歸し、扱此事を、隆信へ告げむと思ひ、急ぎ佐嘉へ赴きしが、道にて屹と思ひ出し、窪田民部大輔胤豊に知らせて、是をも同道すべしと、先づ窪田が館へ立寄りけり。然るに徳島、彼の鴨打が風情早推量しければ、遁さじと思ひ其勢六百餘人、犇々と出立ち、鴨打が先へ廻つて半途を遮り、関を咄はらと作る。陸奥守動轉せず、家人共を下知して、徳島が軍兵と入亂れ、火を散らし相戦ふに、左衛門大夫討負けて、手の者多く討たせ己が館へ引退く。陸奥守が家人江口若狭守南里佐渡守古賀因幡守、其外の者共、牛津江まで追討にし、鴨打も先づ歸宅して、事の次第一々佐嘉に於て隆信へ注進す。

一、斯くて土橋が徒黨、大勢を催して龍造寺の城を取圍み、口々を差塞ぎて所々の通路を止めけり。城中には龍造寺同名の一族、鍋島を初め、納富・小川・福地・江副・安住以下、譜代の輩相集りて取籠りしかども、中々無勢なりしかば、防ぎ戦ふべき行てだてもなく、討ち破りて通ることも叶難く、唯、網に懸りし魚の如くなり。斯かりし程に、今は早隆信を初め、城中の老若男女、皆自害あるべきにぞ極まりける。然る處に十月廿五日の夕方、蓮池小田政光の老臣深町理忠入道、城の大手の城戸へ來り案内を乞ひて、納富左馬助・福地長門守を呼出し、對面して申しけるは、隆信公今度の御籠城、至極御難儀の體愚老見及び申し、今日は敵と雖も明日は味方となるも侍の慣、痛はしく存するに依りて、主の政光へ談合し、寄手の面々へ隆信公御安穩の事を、色々相談を致し、如何にも無事に申調へて候間、御上下ともに御心安く、今夜當城を御開きあつて、急ぎ何方へも先づ立忍ばれ候へ。疾くんとぞ勧めける。納富・福地、則ち隆信へ斯くと披露しけるに、隆信是を信用あらず、兩人へ申されけるは、夫は彼の深町が計略を以て我等を下城させ、城外にて易々と

計取るべしとの工たくみなるべし。先年剛忠、水ヶ江を下城あつて、一門悉く所々にて討たれぬ。夫にも懲りずして、此度隆信、其行てだてに墮され尸を野徑に曝さむより、當城に於て清く腹を切らむと申されけるを、理忠聞いて、重ねて申し入れけるは、弓矢の神も照覽あれ。全く偽に候はず。猶御疑あるべくば則ち愚老人質となりて、城中へ入り申すべしと、太刀・力を渡して自ら城中にこそ入りにけれ。斯かりし間、隆信心服あつて、然あらば理忠が申すに任せて、先づ當城を去らむと、隆信を初め城中の上下老若男女二百餘人、佐嘉の城を出でられけり。時に天文二十年十月廿五日の夜なり。斯くて女童まで皆槍の柄を短く切つて手々に提げ、數萬の敵の圍の中を押通る。偏に虎の尾を踏むに異ならず。南の方井尾村に到り、夫より先づ寺井の堤津といふ所に落著きぬ。されどもいづくに身を寄せて、誰を頼まるたより便もなく、暫は上下呆れて居たり。此度、筑後築河の城主蒲池武藏守鑑盛聞付けて、侍は互の事なりと、急ぎ堤津へ使を遣し、隆信の上下男女百餘人を築河領三潞郡へ迎取りけり。此時佐嘉の侍、國に残れもあり。他國へ浪人する

龍造寺隆信没落

菊池鑑盛の義侠

もあり。隆信に従ひて筑後へ赴くもあり。心々にぞ成り行きけり。斯くて隆信は、鑑盛の情にて先年剛忠入道の住まはれたる一木村に移り、原十郎惠俊が家にぞ住居ありける。扱佐嘉の城には、彼の土橋加賀守威を振ひ、己が所存の儘に、龍造寺左衛門佐鑿兼を城主として、其身則ち後見にありて佐嘉領を支配し、小田政光・八戸宗陽・高木鑑房・神代勝利の家人を以て、代る／＼當城を警衛し、稠しく用心しけり。

一、今年鍋島駿河守清房の次男彦法師丸、千葉介胤連の養子を辭し、本庄の館に歸らる。去ぬる天文十年二、歳四歳にて胤連の養子となり小城へ赴き、今年は既に十四歳なり。近年養父胤連に俱して牛尾の館にありけるが、聊か思慮あつて、此度舊姓かぶに復られけり。斯くて彼の冠者、梅林菴にて手習あり、鍋島家人の内太田伊豫守常に扈從す。

鍋島彦法師丸本姓に復す

鳴打奥陸守胤忠隆信へ忠心の事

鳴打陸奥守胤忠隆信へ忠心の事

翌天文廿一年壬子、春より夏に至り草木蝗災、九州大に飢饉して、萬民貧苦に迫り、老いたる親を育み得ず、稚き兒を道路に捨て、上勞し下窮し、餓死する者十に八、既に人種盡くる程なり。然るに今年の秋七月九日の夜、有馬方の者共、小城へ亂入し、千葉領を侵し狼藉す。依りて千葉の家人等、出合ひて有馬衆を追返すに、仁戸田刑部大輔波佐間村にて討死しけり。

一、今年佐嘉本庄の地主鍋島平右衛門尉清久、當所大明神より夢想を蒙り、子息駿河守と談合あり、高陽菴の地を點じ、一寺を建立して菩提所とす。惠日山高傳寺是なり。

一、龍造寺隆信、去年より筑後國三潞郡一木村に蟄居あり。蒲池武藏守鑑盛の哀憐を以て、一木村・小坊村より諸色を調し、上下百餘人月日を送らる。然れども早朝三暮四の營も次第に乏くなりぬ。斯かりし間、福地長門守信重、斯くては叶ふべからすと、己が與力同名太郎左衛門と小林播磨守を召具し、小船にて竊に肥前へ渡海し、龍造寺の舊領與賀船津へ上りて、郷長村岡藤七兵衛が宅に來り、對面

福地信重
の奔走

すべき由を申す。村岡推量して急ぎ外へ出合ひ面談しけり。長門守囁きけるは、公私の難儀此時なり。兵糧を加勢あれと申す。藤七兵衛打聞きて、尤もの事なり。さぞ候はむ。急ぎ鹿江・南里・堀江以下舊好の輩に内談して、能きに計らひ申すべし。されば此邊は公の御住所近く候に付いて、頃日は高木鑑房夜廻にて、中々用心稠しく候。御邊と斯様に申す事、夢程も露顯申さば能き事は候まじ。構へて聲し給ふな。さりながら今宵は大雨なれば、敵よも窺ひ申すまじと、福地・小林三人の者を連れて女房の閨へ入れ、やをら少時隠し置きけり。扱藤七兵衛、與賀郷中を馳廻り、實久の内上町の副島新右衛門・同所本村の村岡次右衛門・鹿子村の御厨安藝守・同所の副島式部少輔・下飯盛の吉富主水允等の村長共へ談合しければ、五人ながら皆同心す。其外鹿江遠江守・南里左衛門大夫・堀江右衛門大夫・古賀民部丞・徳久主馬允・村岡與三左衛門・久米長門守・飯盛備前守以下の郷士共も心を合せ、隆信上下百餘人の料米諸色を用意して、福地に引渡し、則ち藤七兵衛が船を商賣船に作り立て、世間には天草へ行くと言觸れて、筑後の一木へぞ差送りけ

る。此扶を以て、隆信少時筑後國に逗留あり、然る處に、鴨打陸奥守胤忠、如何にもして隆信を、先づ我が領内蘆刈まで迎へたく思ひて、家人古賀因幡守に人數少々差副へ、一木に到りて迎船をぞ遣しける。隆信大に悦あり、福池を先づ蘆刈へ差遣し、時分を見計り相圖の火を揚ぐべしといひ含め、其身は夫より一家の面・家中の男女皆相共に數艘の船に乗り、蘆刈の方へ漕ぎ向はれし處、天運未だ至らざるにや。俄に暴風強くして、供船共を悉く行方も知らず吹散らし、隆信の乗船計り、辛々柳津留の入江に漕ぎ入らむとす。爰に鴨打が別腹の兄に、新左衛門胤賢といふ者あり。兄弟中悪しく、是は有馬へ従ひけり。然るに此胤賢、隆信の船、追付蘆刈へ著く由聞付けしかば、急ぎ佐嘉蓮池の輩へ注進す。斯かりし程に、小田政光の家人山田河内守一騎駈に馳せ來り、新左衛門と一つになり、扱有馬より佐留志へ居る置きし代官高庭左馬助・本田源次郎・矢河何某三人の者共へもいひ合せ、彼是數百騎集りて、柳津留に待懸け、隆信唯今著船あらば、討取らむと我れ先をぞ諍ひける。陸奥守是を見て、事成らずと思ひしかば、早速隆信の船に打

向ひて、事の仔細を告遣し、古賀因幡守を船揖吏(ふねづか)にて本の如く筑後へ漕返す。鴨打新左衛門・山田河内守是を聞き、手の裏の敵を討洩しけりと大に齒を噛み、聽て陸奥守を討たむとす。奥州疾くに推量しければ、此者共と合戦して詮なき事なりとつぶやき、塚崎の方へぞ退きける。又福地も鹿子村に到り、御厨安藝守を頼み、下船津の村岡藤次左衛門が船を借り、隆信を慕ひて筑後の方へ渡海しけり。

隆信歸國の事

既に今年の冬も暮れ、明くる天文廿二年癸丑七月下旬、龍造寺隆信、筑後の蟄所に於て老臣共を集め申されけるは、斯く何となく月日を累ね、既に三年に及び、他國にありて恥を曝さむもいひ甲斐なし。何とぞ當家恩顧の者共を相語らひ、肥前に歸入り運を天に任せ、敵と勝負を決し、叶はずば腹を切らむと思ふなり。面々は如何に思ふと申されしかば、石井藤兵衛兼清申しけるは、御誕の如く斯様に流浪の身

隆信使者
を古賀民
部丞に送
る

と罷成り、年月を送らん事、自他の視る目、誠に口惜しき次第にて御座候。されば與賀・河副の郷司共は、兼ねて當家に對し二心なき者にて候。其中にも古賀民部丞は、父越後が時より剛忠公の御計らひにて、鹿子村の庄官にて御座候。其御懇意を忘れざる故、去年も忠心を現し候。然れば今度御歸國の事、彼の民部が方へ仰下さるべきやと申す。隆信を初め皆同意にて、さらば使を越すべしと、隆信よりは吉岡藏人、舍弟長信よりは早田次郎右衛門を、古賀民部丞が許へ差遣し、頼み思はるゝの旨談合あり。折節古賀が宅には、村岡與三左衛門・徳久主馬允・久米長門守・副島右衛門允來り集り、近邊の天神の社に於て連歌の會あり。民部も同じく一座しけり。兩使此所へ入りて、民部を初め五人の者へ密に申しけるは、隆信、近日當國に歸入り、敵を打散らして舊城に安堵すべしと、事急に思立たれて候。各、以前の好を忘れ申されずば、心一つにして與賀・河副の土民共を相催され、一領一本具足一領・槍一本をいふなり。を以て、合戦粉骨を盡されよ。隆信本意を遂げられなば、各への恩賞は申すに及ばず、土民等に對しては永代斗前半公事たるべしといひ聞す。古賀は元より別條

蒲池武藏
守加勢を
遣す

なく、四人の郷長共も仔細に及ばず領掌して、彼の兩使をば返しけり。斯くて同七月廿日過ぎ、五人の者密談して、近隣の百姓共を忍びくゝに相語らひ、筑後への迎船武具・兵糧等不足なく用意し、扱與賀・河副の際、隆信へ志ある武士を觸廻す。此時水町左京助信秀も與賀郷へ來りて、郷中の者を差催す。斯かりし程に鹿江遠江守・南里左衛門大夫父子以上一千餘人。石井和泉守・弟三河守・同石見守・内田美作守・久布白又右衛門・横尾刑部少輔・立河讚岐守・堀江筑前守・同右衛門大夫・副島民部少輔・飯盛備前守・石丸備後守以下馳せ集り、彼此都合三千餘騎、兵船を揃へ筑後に押渡り、隆信を迎へて肥前へ歸らむとす。蒲池武藏守、此事を聞付け大に悦び、さらば加勢すべしとて、家人渡邊上總守・横田大膳亮・萩原志摩守に二百餘騎を差副へ、隆信にぞ屬けられける。宿の主原十郎惠俊も、三年の名残に三人の子供の内、二人は進らすべしとて、一男左馬助・三男權兵衛を隆信へ附屬しけり。此時、隆信申されけるは、一定東の口より少貳家の者共打出で、海陸の間にて支へむと思ふなり。如何に計らふべきとあり。福地承り、是等を押へむ事は、某計らひ申すべしと、主従二三人

小船を下し、東肥前三根郡へ上り、當郡の一揆頭重松中務丞頼幸が續命院村の館に到り、頼幸に對面して一向にぞ打頼みける。重松仔細なく頼まれ、某御味方申し、此境を鎮めて罷あらんずる上は、東一方の事、御心易く思召し候へと安々と肯ひ、則ち家人共を召集めて、東の口を差固めけり。斯くて隆信は、鹿江遠江守兼明が船に召して、七月廿五日、事故なく鹿江崎に著船あり。乾堂を過ぎ同廿七日威徳寺に入りて旗を揚げらる。兼ねての相圖なりしかば、福地長門守先達と與賀船津へ上り、村岡藤七兵衛が宅にありて、火を立てしかば、副島吉富・村岡・御厨等の村長共、則ち火を合せ早速馳せ集り、其外増田圖書助・村岡與三左衛門・同名卯右衛門・古賀・徳久・久米・金持以下與賀・河副の者共悉く相集る。隆信其勢既に四五千餘騎になりて、江を打渡られ、實久村潮音寺に陣して軍評定ありしに、衆議區々にして一決せず。依りて當所の若宮八幡に神樂を上げられ、其神託に任せられしに、軍を急に用ひよと託宣ありしに依りて、則ち實久村を立つて西小路へ打入り、飯盛の城に高木能登守鑑房と神代の家人等がありしを追落し、夫より隆信、小井樋に陣を移さる。

隆信歸國

斯くて高木鑑房・八戸下野守宗陽、若村に支へて大に相戦ふ。されども八戸・高木一戦の中に闘負け精町へ引退く。此時龍造寺の軍士に、石井三河守・同子息次郎兵衛進み戦つて、敵の首七つ取り、次郎兵衛は討死しけり。斯かりし程に、鑑房は己が東高木の城へ引退き、宗陽は八戸の居城に楯籠りぬ。斯くて隆信、所々の軍に討勝たれ、本庄の梅林菴に入られぬ。

北肥戦誌 卷之十二終

北肥戦誌 卷之十三

八戸宗暘落城の事

隆信は、梅林菴へ陣を移され、爰にて軍の評定あつて、先づ八戸下野守宗暘を攻めらるべしと、本庄を打立たれ八戸の城へ取懸けらる。頃は天文廿二年八月八日なり。斯くて龍造寺の老臣小河筑後守武純・納富左馬助信景・福地長門守信重以下、隆信の下知を蒙りて各、進み戦ふ。城中にも兼ねて用意したる事なれば、神代勝利、山内より加勢に來りて本丸を守り、城主宗暘は二の丸を持つて、伊東・諸熊・光岡以下の數百騎を差出し防ぎ戦ふ。爰に宗暘が棟と憑みたる浦ヶ部常陸介をば、福地が手に生捕りたり。其外城兵多く討死して、既に城戸口破れむと見えける處に、神代勝利の方より和平ありたきの由、福地が陣へ申されしかば、信重是を披露し、隆信應

八戸城落城

隆信歸城

諾せられて、其使に福地、即ち城内へ入りける處に、小門口にて矢の手を負ひけり。斯くて八戸・神代兩將ともに、小城を出で隆信に面謁し、城を明渡し總構を崩して、城主宗暘は勝利を連れて山内へ引入りけり。其日隆信、敵の端城七箇所攻め落さる。斯かりし程に、佐嘉の城を警衛せし小田駿河守政光、蓮池の城へ引退く。斯くて隆信、其威龍の水を得たるが如く、頓て佐嘉の城に歸り入られけり。然るに此二三箇年、爰かしこに隠れ居たりし龍造寺の一族家人、早速馳せ集り悦ぶ事限りなし。

小田政光軍附和平の事

隆信既に歸城せられて後、城原の江上や攻むべき、蓮池の小田や退治せむと議せられけるに、九月廿六日、江上は降參の由申しければ、さらば小田を攻むべしとして、七月八日小田駿河守政光の蓮池の城へ取懸けらる。其夜明、先づ隆信は井尾を本陣とせられ、爰にて評定ありけるに、定めて政光、城より切つて出づべし。然らむ

八戸宗暘落城の事 小田政光軍附和平の事

蓮池城合戦

時は、龍造寺左馬頭信周、一備北の方より廻つて政光が跡を取切り、又兵庫頭長信、南の方より城の大手駕輿丁口へ廻り、短兵急に攻め入るべしと評議を極め、八日のまだ東雲に、南北二手に分れ、隆信は旗本にて井尾の陣を發し、靜に兵を進めらる。旗本の先手馬渡越後守榮信、先度若村の合戦に、手に合はざるを無念に思ひ、頻に旗を進む。城中にも手分をし、一陣は江口源世入道、二陣は深町理忠入道と定め、城中を押出す。然るに夜も既に明けむとする頃、北の方より神崎の本告與次郎義景、其勢三百計り矢車の旗を靡し、小田に加勢し、隆信の本陣を目に懸け切懸る。是を見て北の方に控へし龍造寺左馬頭、筋違に來りて本告と亂合ひ大に相戦ふ。本告が軍勝に乗り、佐嘉勢早負色に見えたりし處に、馬渡越後守と本告與次郎と組んで落ち、上を下へと返し、與次郎竟に下になり、越後守、其首を搔かむとしける時、本告、あら口惜しやと馬渡が右の小指を喰ひ切りぬ。されども越後守、押へて首を取りけり。本告が一勢、大將を討たれ叶はじとや思ひけむ。悉く崩れて引退く。然れども小田が先陣江口源世と、二陣の深町理忠は退かず、兵を進めて左馬頭と相戦

ふ。斯くて兵庫頭長信は、味方の戦ふに目を懸けず、南に廻つて駕輿丁口へ攻め入り、火を散らして相戦ふ。時に城方より崎村の犬塚左近大夫鑑直・蒲田江の犬塚民部大輔尙重・直島の犬塚左衛門大夫鎮尙等馳せ來り、小田勢に加はりて散々防戦す。然るに城主政光は、未だ城を守りて出でざりしが、合戦難儀と見けるにや。士卒を下知し眞黒に切つて出づ。小田右馬大輔利光同名掃部助を初め、山田河内守・原河内守・藪田三河守・内田治部大輔・吉島新七郎・末次與七郎・横山・大隈以下の者共、政光の左右に相従ひ、佐嘉勢と相戦ふ。此時、軍烈くして寄手若干討死す。戦ひ半ばなりし時、政光己は爰を打捨て、手勢計りを引勝り、健兵貳百餘人を以て、其行伍を亂さず隆信の旗本へ切懸る。是を見て龍造寺一家の輩、共外小河・納富・福地・江副・安住・馬渡・秀島・立河・石井・鹿江・南里・副島以下旗本の者共、我れ先にと懸合はせ政光と相戦ふ。時に政光の士卒大きに勵み撃つて、龍造寺方、四度路しどろになり、南里左衛門大夫國有・同治部大輔胤有・同左馬大輔信有・同宮内少輔父子兄弟四人、手勢を引分け戦ひしが、小田掃部助を討取りて、父子三人、郎從三十餘人皆一所にて討た

れ、左馬大輔は深手を負ひて半死半生なり。福地長門守信重も、一族若黨引具して、命を際に相戦ひ、膝口を槍にて突かれ、肱肩を二所射させて働き得ず。秀島主計允も鐵炮に中る。水町左京亮進み戦ひ、北島河内守分取し、犬塚八郎次郎は討死して、敵も味方も入亂れ、火を散らしたる合戦なり。然るに寄手、やゝもすれば追立てられ、隆信も其體退屈して見られしに、倉町帶刀信家、いづくより求めむ。濁酒を持來り隆信に進む。隆信、忽ち倉町が一盃に機を増し、頻に采配を揚げられしかば、佐嘉勢、足を立て直し十死一生になつて相戦ふ。時に小田が軍兵、少時休へて見えたりしが、終に合戦利を失ひ、討たるゝ者數を知らず。中にも江口入道は、石井三河守忠本が爲めに討たれ、藺田三河守は安住石見守秀能・秀島河内守に相討せられ、東島彌九郎は村岡卯右衛門に討取られけり。斯かる處に、駕輿丁口に向はれたる龍造寺兵庫頭に、鍋島駿河守馳せ加り、此口の軍、寄手大に利を得て、城方宗徒に頼みたる犬塚左近大夫・同名左衛門大夫以下三百餘人討たれしかば、駕輿丁口既に破れて、寄手悉く攻め入りぬ。斯かりし程に、政光今は是までと士卒を引揚げ

隆信政光
和平

城中に入る。斯くて雙方衆議あつて和平調ひ、合戦を止めて隆信佐嘉に歸陣せらる。

龍造寺鑑兼以下浪人の事

隆信、再び佐嘉の城に居住せられ、同十月中旬、龍造寺左衛門佐鑑兼の水ヶ江を沒收あり。鑑兼すべき様なく、水ヶ江の城を立つて筑後の方へ浪人しけり。されども此人、元より一族といひ、其上隆信妻室の兄なりしかば、同月廿六日、石井藤兵衛・村山内藏助・鷲崎主水允・西岡慶可入道を頼み、兵庫頭長信の許まで一封の書を送り、今度土橋が逆意の事、鑑兼に於ては聊か存知仕らざる由、先非を悔い様々懇望ありしに依つて、此度の不義宥免せられ、頓て歸國ありけり。扱逆意の張本人土橋加賀守榮益を搦捕り、罪を鳴して首を刎ねらる。又土橋が相談人西村美濃守は、加瀬の僧増閻を頼みて詮言しける故、其科を免され、龍造寺越前守家就或はいふは左京亮は藤木村に蟄居しけり。是よりして隆信は、納富石見入道道周・小河筑後守武純・江副安藝

鑑兼以下
浪人

守久吉を以て執權と定め、舍兄兵庫頭長信初名家信。中頃長述。を、鑑兼の跡水ヶ江の城へ据ゑ、庶子流剛忠入道の遺跡とし、其長臣には石井藤兵衛兼清を尾張守になして、福地藏人助・吉岡藏人とともに附屬せられけり。

肥後國南關軍の事

今年天文廿二年の夏、大友家の老臣小原遠江守親元入道宗惟、逆心を挟み肥後國南關に楯籠る由風聞し、府内へも其聞えありけり。抑、此遠江守、初名は四郎左衛門とて、前大友屋形義鑑の近臣なりしが、當屋形義鎮の代になりて、去る天文十九年の夏、菊池義武一亂の時、其討手として志賀安房守・吉岡越前守と同じく肥後へ發向せし後、如何なる恨やありけむ。之を知らず。斯くて大友義鎮、是を誅伐あるべしとて、先づ彼の宗惟に一味せし本庄・中村を討果し、扱肥後・筑後の輩へ下知ありしかば、肥後衆には城越前守親冬・赤星筑前守重隆・西郷鑑孝以下、扱又筑後衆には、蒲池武藏守鑑盛・田尻又三郎鑑種を初め、同五月六日、頓に宗惟入道が居所南關へ取

肥後南關
合戦

小原宗惟
討死

懸け、筑後勢は鷹野原口、肥後勢は小路口へ押結めて、翌くる七日終日合戦す。同八日、宗惟是までとや思ひけむ。妻子を害し其身は大手口へ切つて出で、筑後勢に相向ふ。其風情、ありたりを拂つて中々近づく様もなし。されども蒲池彈正忠、一番に宗惟と渡り合ひ、火を出して戦ひしが、立所に討たれぬ。其次に田尻左衛門、宗惟に駈合せ命を捨て相戦ひ、是も矢庭に討たれたり。既に合戦烈しくして、敵味方の討死數を知らず。夫より宗惟町口をさして駈出で、肥後勢へ切つて懸る。時に城越前守、少時戦うて自身疵を蒙る。其次赤星筑前守請留め相戦ふに、宗徒の輩多く疵を蒙りて、合戦難儀に見えたりけり。然る處に、西郷鑑孝、宗惟と渡り合ひ宗惟を討留めけり。此時、雙方の武勇、見る者皆舌を振はぬはなし。斯くて肥・筑の寄手、兩日の中に強敵を平げ、勝鬨かつどきを揚げて則ち歸陣しけり。

高木鑑房没落附生害の事

天々廿三年甲寅二月、龍造寺隆信、高木能登守鑑房を征伐あるべしと、軍兵を率し

肥後國南關軍の事 高木鑑房没落附生害の事

て佐嘉の居城を打出でらる。されば彼の鑑房は、天兒屋根命の御末中關白道隆に
 は、廿一世の苗裔にて、昔は當國一の大名なり。されども中頃、北條時頼入道最明
 寺殿、諸國抖擻の時、當家の先祖聊か疎略ありしより家衰へ、其上今の鑑房、去る天
 文十七年に、仔細あつて他國へ浪人し、近年歸國したる後は、僅に先祖の地肥前國
 東高木を知行して、即ち高木村に在城しけり。然るに此鑑房、勇力萬人に勝れ、早
 業は江都が勁捷にも超え、打物は樊噲、張良にも恥ぢず、其上魔法を修し天の妙を
 得て、ある時は闇夜に日月を現じ、ある時は酷暑に雪を降らせ、大空に立ち大海を
 飛び、其行爲更に凡夫にあらず。元服の時豊後へ申送り、大友義隆の諱字を受け
 て、太郎鑿兼と號す。其後龍造寺鑑兼と一名なりし故、鑑房と改名しけり。實は龍
 造寺伯耆入道日勇の嫡子高木右京大夫滿兼が家督なり。日勇は滿兼が、子
 鑑房は鑑兼が孫。然るに鑑房、
 斯く聞ゆれども、軍は時の運に依るにや。去年八月、精町の軍に打負け、東高木の城
 に引入りぬ。斯くて鑑房、此度龍造寺の軍勢寄來ると聞えしかば、急ぎ手の者を
 引率し、三溝口へ出合ひて散々に相戦ふ。時に龍造寺の陣より歳の程十六七と見

高木鑑房
 龍造寺に
 和平を乞
 ふ

鑑房前田
 家定に殺
 さる

えたる清げなる若武者、鍋島左衛門大夫と名乗りて唯一騎真前に進み、敵に當る事
 千變萬化せり。鑑房も士卒を下知し勵み戦ひしかども、隆信の軍士、雲霞の如く競
 ひ重り、竟に鑑房打負けて東高木へ引退き、子供を質人に差出し和平を乞ひけり。
 是を見て西高木の城主高木肥前守胤季も、同じく降参しけり。其後鑑房は、杵島郡
 佐留志へ赴き、前田伊豫守家定を頼みて居たりしを、尋常の者ならば其儘差置かる
 べき事なれども、彼の鑑房が行粧、隆信も末々如何と思はれしかば、様々前田を賺
 され終に討取られけるとぞ聞えし。其有様を傳へ聞くに、彼の鑑房、平生に因果左
 衛門・不動左衛門とて、大剛の力者二人身を離さず召仕ひけり。然るに鑑房、頃日前
 田が館にありける時、因果左衛門をば祕藏の笛を取りにとて、舊領高木へ遣し、不
 動左衛門唯、一人召具して、新開邊へ鷹野に出でけり。扱朝飯過ぐる頃、前田が家
 に歸り縁に腰を懸け、不動左衛門に足を洗はせ居たりし處を、前田伊豫守、兼ねて
 隆信の内意を得て、時分よしと思ひけむ。密に後へ立廻り、長刀を以て鑑房が首
 を討落す。時に其骸立上り、小鳥といふ名劍すばと抜き、足を洗ひし不動左衛門を

懸らず切つて落し、夫より廣間へ駆け登り奥へ切つて入る。稀代の珍事なりしかば、左右なく近づく者もなし。されども前田が家人數十人、槍・長刀を以て四方より刺貫きて押臥せけり。扱彼の骸を佐留志山の頂に葬りぬ。今の代までも、荒人神あらひとに崇めて、野人・村老、所願を祈るに必ず成就するなり。斯かる鑑房が子供二人あり。隆信、懇志を加へられ、父が所領の内數百町を給はりけり。兄は左馬大輔盛房とて、天正十年の冬、筑後國戸原にて討死し、弟の大榮入道は同十二年の春、島原に於て隆信とともに戦死しけり。

一、隆信、筑後より歸城以後、天文廿四年に至り、小田・高木・八戸・神代、或は和平し或は没落しければ、佐嘉の城下靜謐す。斯かりし間、蒲田江の城主犬塚民部大輔尙重も、龍造寺に隨ひ隆信の妹婿となり、巨勢・田尻・千住以下、皆龍造寺に相從ふ。一、去年より今年に至つて、異國へ日本より亂妨の爲め、船の渡す事數千艘なり。

大友少貳の事

天文廿四年乙卯改元して弘治と號す。然るに中國の陶尾張守隆房、主君義隆を殺して以來、大内の領内悉く押領し、豊後へ申し送り、大友義鎮の舍弟三郎を申請け、大内左京大夫義長と名乗らせ、隆房も直參して公方の御諱字を給はり晴賢と改む。爰に毛利備中守隆元は、故義隆の姪婿といひ、其上遺言ありしに依りて、父の元就に談合し、彼の悪黨を退治すべしと、義長并に晴賢と義絶あり。合戰數度に及び、今年閏十月、竟に兩人を誅伐あり。右合戰の半ば肥前城原に於て、少貳冬尙の方へ毛利隆元の狀にいはく、

謹而言上候。抑、大内并陶尾張守晴賢〔中〕與我等伴之儀、去夏以來令義絶、當國所々大内方諸要害西條神領無殘切取候。此時豊筑之事被成御亂入、御累代之可被達御本意事可目出度候。此旨可然様可預御披露候。恐々謹言。

九月十日

備中守隆元判

謹上 少貳殿之人々御中

一、此時大友左衛門督義鎮、西に威を振ひ九州大半知行して、先祖代々の居所豊後府

大友の三老六奉行

内に住城し、既に勅宣を蒙りて從四位に任じ、分國七州の兵馬凡そ三十萬騎、其禮を受くるは二八月の朔日なり。府内の三大老といふは、戸次伯耆守鑑連・臼杵越中守鑑速・吉弘左近大夫鑑理。又六奉行といふは志賀安房守親泰・佐伯紀伊守惟教・吉岡越前守長増・朽網三河守親度・田原近江守親賢・田北大和守鑑生なり。時に肥前の少貳屋形冬尙・同舍弟政興も大友と親しくして、父資元の家を興し、三根・養父・神崎を知行あり。冬尙は城原、政興は綾部に兄弟兩城に分れて居住あり。少貳譜代の輩には、馬場・横岳・宗・筑紫・江上・本告・島・朝日・出雲・姉河・犬塚・光益を初め舊好の者共、二心なく少貳家を守護し、其外高來の有馬越前守入道仙岩・小城の千葉介胤頼、少貳に一味して城原に事を通ず。少貳と龍造寺、此時に至つて彌、不和なり。

少貳龍造寺不和

隆信重ねて神代と鉾楯の事

龍造寺隆信、去々年の八月、八戸の城を攻められし時、山内の地主神代勝利と和平

龍造寺神代不和

其原因

ありし故、佐嘉と山内無事なりし處に、今年弘治元年に、又手切して兩家再び鉾楯しけり。其仔細を尋ぬるに、過ぎし二月初旬、隆信使を山内へ遣し、勝利の許へ申されけるは、國中計略の爲め對面を以て談合申したき事候間、佐嘉の多布施に出合ひ給へ。付いては饗應申すべしと申送られけり。勝利も物騒がしき時分にて、如何とは思ひながら、懼るべきにあらずと、江原石見守・福島伊賀守阿舍坊といふ大剛の者を初め、其外家人を勝つて召連れ、多布施へ赴き、隆信に對面あり。斯くて談合事終り饗應過ぎて、勝利は山内へ歸城ありけり。然るに此時、如何なる者のいひ出しけむ、今度の饗應に龍造寺家人等、勝利を毒飼すべしと巧ける由申し觸しけり。是より佐嘉と山内又手切して、互に刃を研ぎ牙を噛みけり。

城原攻井小河筑後守神代勝利を揀む事

弘治元年乙卯三月、龍造寺隆信、少貳冬尙の居られたる神崎勢福寺城を攻むべしとして、佐嘉を打出でらる。此折節、冬尙は三根郡西島の城にありて、勢福寺城へは

隆信重ねて神代と鉾楯の事 城原攻井小河筑後守神代勝利を揀む事

隆信城原
を攻む

隆信勢福
寺を陥る

江上左馬大輔武種在城しけり。然るに隆信は、先づ姉河彈正忠惟安を相從へ、彼等を案内者として、城原勢福寺へ取懸けらる。先手は小河筑後守信安或は榮純。前名武純。・納富左馬・信景・福地長門守信重なり。時に神代勝利、江上に合力の爲め山内を發し、勢福寺の西猿岳に來りて陣を取る。隆信、敵城の體を量つて、先づ小河筑後守・鍋島左近將監・龍造寺石見守を以て、勝利の猿岳の陣を押へ、さて勢福寺城を攻めらる。福地長門守は、大手南の口へ押寄せて少時戦ひしが、城の地利を見て、此攻口をば與力手の者七百餘人を以て差搦め、己は小勢を引勝り、竊に東に廻り水路より攻め入りて、城内に火を懸けたり。斯かりし程に、城主武種防ぐ事を得ずして、城を出で仁比山に退きけり。扱小河筑後守・鍋島左近將監・龍造寺石見守は、神代勝利の陣所猿岳を攻めむとす。勝利一戦に及ばずして山内へ引入りけり。斯くて隆信、不日に勢福寺城を攻め落し、勝鬨を揚げて佐嘉へ歸陣あり。

一、同三月下旬、神代勝利、山内を打出で龍造寺の近邊まで相働き、所々に放火し、己が出城千布の土生島の要害に入りけり。然るに其頃龍造寺の城中には、隆信

近臣等を集め様々物語ありける中に、隆信申されけるは、我等弓箭を執りて當時懼るべき敵なし。されども爰に神代勝利といふ者、堞墻の中にありて、隆信が障となるなり。如何にもして彼等を討取るべき計略こそありたき事なれと申されしを、小河筑後守承り、御誼の如く彼の勝利と申すは、機篇飽くまで尖すまはに、前にあるかと見れば後にあり。左に現はるゝかと見れば右に隠る。然れども又此筑後守も劣るべきに候はず。頓て彼奴を易々と討取り、公の御目に懸くべしと申して、其席をぞ退きける。斯くて其頃勝利は、千布の城にありて雨強く降り風烈き夜、家人共を集め酒宴して居たりし處に、ある下女湯殿はしためへ行きしが、走り歸りて大息つき、如何なる人やらむ、大の男の湯殿にありといふ。勝利打聞いて、いと騒しきぞ。其男は龍造寺の一の若小河筑後守にてあるべし。誰かある。湯殿へ行き勝利唯今酒盃半ばなり。筑後殿にも爰へ來り、酒呑み給へと申すべしと、だぶだぶと一盃受け、筑後守へさゝむとぞ待たれける。家人共是を聞き、如何とは思ひしかども、湯殿を見るに實にも敵の小河なり。筑後守は宵より忍び入り、勝

利を擇びし處に、顯はして本意を遂げず、其上彼の使を得口惜しとは思ひながら、些とも騒がず則ち座敷へ出で、勝利の盃を引受け呑み、思ひざしと申すぞ大和殿と、勝利へ返盃し、拳を握り齒を嚙みて、龍造寺へぞ歸りける。勝利の大器、筑後守の勇剛、聞く者舌を振はぬはなし。

神代家由來の事

肥前國山内の領主神代大和守武邊朝臣勝利の由來を、如何にと尋ね聞くに、先祖は人王八代の帝孝元天皇第三の皇子彦太忍信命の御子、屋主忍武雄心命の男玉垂命の苗裔にて、元は筑後國の大名なり。玉垂命を武内宿禰と申す。此人、其齡二百九十五歳の間、景行・成務・仲哀・神功・應神・仁徳六世の帝に仕へ、三韓を征伐して天下に大功を立て、仁徳天皇五十五年丁卯に薨逝まし、筑後國御井郡吉見嶽の内青山に、跡を垂れ給ふ高良大明神是なり。父武雄命は、又肥前國杵島郡塚崎庄へ現はれます。即ち武雄大明神なり。然るに武内宿禰に三人の子孫あり。一は大明

神代家の
祖

神に仕へ、神職の器を受け大祝部となり、代々凡俗ながら鏡山大明神と申す。家紋木瓜なり。二は一山の座主にて、朝家の御所(マ)となる。家紋三巴なり。三は武器を得て、子孫弓箭を執り神代と號す。旗の紋立龍の形なり。されば神功皇后三韓御征伐の時、武内是に仕へ、筑紫へ下向ありしより、當家筑後に住する事、星霜既に一千餘年に及びぬ。然るに文治元年乙巳、神代良光が時、吉見岳高良山の事なり。より始めて、同國神代村に移り住す。夫より四代を過ぎて、同名民部少輔良忠が代に、文永十一年甲戌、異國の蒙古攻め來りし時、折節一夜川上の方を一夜川といふ謂あり。下の方を千年川といふ。筑後川なり。の渡水増して、諸國の人馬渡る事を得ず難儀成りしに、彼の良忠が計らひにて、俄に假橋を架け、諸勢悉く是を渡しぬ。是れ京・鎌倉への大忠なり。又其孫神代良基が代に、足利尊氏卿九州御下向ありし時、良基、早速御手に屬し、高木・松浦の者共と一つに成り軍功を施しぬ。其後、今の勝利には曾祖父神代入道道元の子大和守勝元が時、文明の末に當りて少貳屋形政資に屬して、食祿を受く。其子を對馬守利久といふ。入道して宗元と號し、中頃は兵部少輔と稱す。其子今の大和寺勝利なり。父祖以

來肥前に居住し、前大和守の時、去ぬる文明十七年に、上佐嘉庄千布の住吉社を再興す。中にも對馬守利久、弓の名人にて千布の陳内大和守、其藝に目出、頻に望みて是を婿としたり。然るに對馬守、陳内が女に相嫁して、程なく二人の子を儲く。一は女子にて伊東出雲守が妻と成る。二は男子にて新次郎と名づく。又對馬守最初に、筑後國福島兵衛大夫が女を娶りて男子あり。片目なりけり。利久、此二人の男子の中を、何れか家督にすべしと思ひしかば、兼ねて信仰の住吉大明神に參詣し御圖を上げけるに、次男新次郎にぞ下りける。斯くて對馬守、件の御圖に任せ家督を新次郎に譲りし後、長男は母方の苗字を名乗り、福島周防守豊島利高と號しぬ。然るに新次郎若年の頃、小城郡司千葉屋形與常に奉公しけり。されば其頃與常の家臣に、江原石見守といふ者あり。生國は武藏の者にて榎原黨なり。此石見守、ある夜新次郎と一所に臥したりしが、夙に起き語りていひけるは、我等過ぎし夜、不思議なる夢を見たり。喩へば我が身唯、太りに太りて、後には北山を枕にし、南海に足を混すと覺えて夢さめぬ。吉夢か凶夢か覺束なし。新次如何と問ひけり。

勝利若年の頃江原石見守の夢を買ふ

新次打聞きて是は大なる悦よ。僞りて此夢を我が夢にせばやと思ひ、横手を磔と打ち舌を慄つて申しけるは、いふにや及ぶ石見殿、此夢は大分の悪夢なるべし。能く案じても見給へ。御邊北山を枕にして南海へ足を混さむ時は、其身中より斬れて命は争であるべきや。されば内々承るに、悪しき夢をば人に賣渡す時には、却つて吉夢に變すとなり。然れば御邊は當家の重臣、我等は次々の奉公人なり。此夢を某に賣り給へ。則ち買取りて、御身の災難を某引請け申すべし。當座に夢の價を出すなりとて、金の筭を取出して、石見守にぞ與へける。江原は武勇は勝れしかども、生得愚なる男にて善惡分らざりしかば、己が災を除く上に、筭を得るよと悦びて、則ち夢をぞ賣渡しける。其後新次郎、劔術早業鍛錬するに、一々妙を得ずといふ事なく、後には千葉家を立退き、小城・佐嘉神崎の山々へ入りて上下をいはす弟子とするに、隨ひ靡く事、風に草木の偃すが如し。三瀬山の城主三瀬土佐入道宗利、新次郎が器量を見て、尋常の者ならず大將にもなるべき者よと思ひしかば、三瀬の城へぞ留め置きける。彼の入道の見し如く、新次郎智・仁・勇の三つ備りて、小城

新次郎神代家を再興す

佐嘉・神崎三箇山の輩に、松瀬又三郎宗樂・畑瀬兵部少輔盛政・合瀬因幡守・藤瀬藤左衛門・梅野源太左衛門・杠紀伊守種滿・菅浦遠江守・藤原但馬守・栗並伊賀守・廣瀧新三郎・小副川因幡守・名尾左馬允以下の頭々、悉く家人となる。斯くて新次郎既に大勢となり、大和守勝利と號し。初は副島氏の女に嫁し、子供餘多出來、後に又千布兵庫入道淨貞が婿となりて、是にも男女の子多かりけり。其後勝利、太宰少貳冬尙に屬し、山内の輩に下知して所々を切從へ、筑前國甲良・那可・怡土三郡の内、并に肥前と筑前の境廿六箇山を知行しけり。其間皆深山幽谷にして、石壁屏風を立てたるに異ならず。東西は七里、南北五里、其山々へ城郭を取構ふ。中にも三瀬・畑瀬・谷田・熊川・千布の土生島に五箇城を築き、筑前の原田・曲淵・佐嘉の龍造寺と武威を諍ひ合戦す。されば今こそ江原が夢を買取りたる昔の事を思合はせぬ。實に北山を悉く知行して、南海を眞下に見たるは、偏に足を混せし如くなり。又夢を賣りたる彼の江原石見守は、頼て神代の家人となりけるこそ抵しけれ。

秋月文種生害筑紫惟門没落の事

弘治三年丁巳、筑前國秋月中務大輔文種・筑紫右馬允惟門申合はせ、豊後の大友義鎮を背きて、中國の毛利元就に相屬す。其事、府内へ聞えて義鎮立腹あり。急ぎ彼の兩人を征伐すべしとて、同年五月、戸次伯耆守鑑連・臼杵越中守鑑速・吉岡越前守長増・田北大和守鑑生を初め、各、府内を打立ち、先づ日田へ著陣す。時に筑後國の輩も、元より大友旗下にて、豊後勢に力を合せんと、蒲池武藏守鑑盛・田尻伯耆守親種以下同じく出張しけり。斯くて豊後の輩、先づ秋月文種が居所を攻むべしとて、日田の陣を發し、筑前國へ討ち入り右良山に著陣し、夫より鳥留に陣更す。仍りて筑後の軍士も、豊後勢と同じく陣を進む。然るに此時、筑後築河の蒲池鑑盛の軍士に、末吉道二入道が一族大木の一類共、豊後陣と一所にならむと打登りし處に、桑原に於て秋月家人芥田右馬助、其外餘儀なき者共出合ひ、末吉・大木と防戦し、道二父子討死して、右馬助も討たれにけり。斯くて七月初旬、豊後の軍兵に筑後勢差加はり休

大友勢秋月を攻む

松へ陣を寄せ、秋月館へ取懸く、宮尾口は戸次鑑連・南郡衆防戦し、野取口は田北鑑生其外筑後衆打戦ひ、何れも粉骨を抽んで城兵を追込め、館小路残なく焼拂ふ。斯かりし程に、秋月文種防ぐ事を得ずして、古所山の本城に取登りしが、爰にも溜り兼ね、寶滿へ落行きけり。然る處に家人古野九郎右衛門心變りし、同七月十三日、文種終に生害あり、則ち其死證^頭を九郎右衛門、豊後衆の陣所へ持參しけり。然る間、寄手則ち凱歌を揚ぐ。彼の九郎右衛門、秋月譜代の家人として、主の先途を見捨て却つて心を變じ、其頸を切る事、前代未聞の惡逆なりしかば、豊後の諸將是を賞せず、結句大に憎み、其後大友よりも許容なかりし故、九郎右衛門終に乞食流浪の身となり、程なく命を失ひけり。主君に背きし天罰遁れざるこそ理なれ。

秋月文種生害

文種の三子

一、秋月文種今度生害の時、三人の男子あり。兄は九歳になりぬ。文種、此子供が事を悲み様々歎きしを、家臣大橋豊後守甲斐々々しく、彼の三人の子供を、世間には我が子と稱して暫く養育し、後に中國へ遣し、毛利家を頼み成長す。扱五箇年を送り、三人ともに歸國し、兄は秋月左兵衛尉種實と號す。後に長門守と改め

秋月を知行し、太閤殿下の御時、日向の内兒湯郡を給はりて財部城に住す。次は高橋九郎元種といふ。高橋三河守が家督にて、初は豊前の内規矩郡を知行し、太閤殿下の御時、是も日向の内土持彈正が一跡を給はり、宮崎の城に住す。其次長野三郎左衛門種展と號す。豊前の長野氏養子にて岩借城に住す。太閤殿下九州御下向の時、當城を守りて勇を現はし、甚だ御感に預り御免許を蒙りて、後は浪人となり、朝鮮御征伐の砌、加藤清正の手に屬して、所々の戦功莫大なり。總へて此三の兄弟、皆勇將とぞ聞えし。

筑紫惟門没落

一、斯くて豊後勢、七月十三日、秋月文種に腹切らせ、夫より筑紫惟門を誅伐すべしと、諸勢一同に山隈原に著陣す。斯かりし間、岩屋若杉同日に落去して、惟門は五箇山へ引入りぬ。然る處に同月廿四日、龍造寺隆信より詫言を以て、鹿江遠江守父子を討取り、其死證^首を豊後衆の陣所山隈原へ差送る。茲に因つて龍造寺事、宥免あつて無事なり。斯くて豊後の諸將、諸口悉く勝利を得て、則ち宮尾城へは筑後衆を差籠め勤番あり。岩屋城へは三原和泉守・高橋三河守・麥生此三人を入

秋月文種生害筑紫惟門没落の事

れ置き、肥前勢福壽寺城へは豊饒鑑榮を差遣し、在番として豊後衆、其外山隈原より皆開陣したり。扱右城々の番人、暫し勤むるもあり。又一兩年ありしもあり。其後、府内よりの下知にて、宮尾の城は草野長門守眞清へ明渡し、岩屋は高橋一人にて在番し、三笠郡三千八百町知行を以て、堅固に相守りけり。

北肥戦誌 卷之十三終

北肥戦誌 卷之十四

神代勝利谷田没落の事

弘治三年丁巳の春、龍造寺隆信、敵征伐の爲め大軍を率ゐて出張せらる。時に三月十一日、小田が陣敗北す。同七月廿四日、隆信、鹿江遠江守兼明が鹿江の館を攻めらる。遠江守防ぎ戦ふと雖も、無勢に依りて叶ひ難く、父子三人忽ち討死しけり。隆信則ち鹿江が死證を持たせ、頃日豊後衆の陣したる筑後の山隈原の陣所へ差送りて、大友へ一旦和を乞はれぬ。彼の鹿江は大友の悪を蒙りし者なり。同八月十二日、隆信、上佐嘉へ取懸けられ神代衆と合戦あるに、山内勢多く討たれて不日に没落す。同九月三日、江上武種も没落。同五日、隆信、山内へ攻め入り、頃日神代勝利の居たりし谷田の城に取懸けらる。不意の事なりしかば、勝利、取敢ず僅の軍兵

神代勝利
谷田没落

を以て打敷野へ出向ひ、佐嘉勢と相戦ふ。軍半ばと見えたりしに、隆信下知を加へ、兵を引分けて東の方へ差廻し、松瀬より佛坂を越え環尾に到つて、峯傳に谷田の上の高山に登り、前後より一同にぞ攻められける。抑、彼の谷田の城は、其地利無雙の要害にして、南は大川漲りて白浪岸を混し、北は長山峨々と峙ち、東西は一騎打の細道にて、左右岩石劔の如し。斯かる無雙の要害と雖も、城中餘りに無勢なりしに依つて、勝利竟に防ぎ難く、城を遁れて筑前へ落行き、怡土郡に到り高祖城主原田入道了榮を頼み、長野といふ所に蟄居ありたり。斯くて隆信は、勝利を攻め落し彼の領地を押へ取り、山々へ代官を居る置き、其身は頓て歸陣せらる。隆信今年廿八歳。向ふ所皆靡き、血氣盛の良將とぞ見えたりける。

勝利歸城并八戸宗暘再び出城の事

同年の冬、神代勝利は長野に浪人にてありけるが、既に月迫に及び、家人等を集めて申されけるは、いつまで斯くてはあるべきぞ。倡いざや此年明け元朝に、龍造寺より

神代勝利
歸城

居る置きたる代官共の始の儀式に取紛れ、油断してあらむする所に取懸け、一々討ち散らすべし。其用意すべしと談合し、十二月晦の夜、人數を揃へ竊に長野を打立つて、目指すとも知らず暗かりしに、態と焼松をも持たせず、九重折つらなる山路を終夜越えて熊川に出で、時分を跟はひ東雲なる頃、隆信より居る置かれたる熊川の代官へ取懸けたり。勝利の量りしに違はず、明れば弘治四年正月元日未明の事なれば、代官斯かるべしとは夢にも知らず、唯、上を下へと動轉し、一人も残らず討たれけり。勝利、事初よしと大に悦び、則ち熊川に陣を取らる。折節大雪谷を埋め、大將も士卒も皆手癢かり足撓み進退自由ならずして、其日は爰に在陣ありしに、此事隠なく、河上の社人小野式部、粥を煮て持参しけり。勝利悦び、上下是を食して大に力を得、身温りて手足叶ひしかば、其勢にて龍造寺の代官共を悉く追出す。斯かりし間、山内の者共、勝利の歸参を悦び、彼所此所より馳せ集り、隨屬く事以前の如く、山内の主君とぞ仰ぎける。此時より神代家には、元三の吉例に粥を用ひけるとぞ聞えし。

一、佐嘉郡八戸の城生八戸下野守宗暘は、去ぬる天文廿二年、隆信と和平し一旦城

を開きしかども、其後歸城してありけるが、是も神代と心を合せ、龍造寺に對して又々異心ある由、風聞あるに依りて、同正月元日、隆信下知を加へられ、軍兵を八戸に差向けられ、宗陽の城を攻めらる。城中には思寄せざる事なれば、男女東西に逃迷ひ、足を空にし周章騒ぐ。されども宗陽は、心早く物馴れたる大將にて、早裏門より忍び出で、山内の方へぞ落行きける。然るに彼の宗陽の妻女は、隆信の姉にて三人の子あり。今度宗陽落去の時、母子とも虜となりて佐嘉へ赴きけり。隆信是を許されず、怨敵の子なれば男子に於ては殺さるべきに極まりしを、隆信の母公慶間尼、孫子の事なれば是を哀み、様々宥められしに依りて安穩しけり。彼の三人の子供、男子は後に八戸助兵衛宗春と號し、女子二人は鳴打左馬大輔胤泰・犬塚勘解由真盛が妻となりけり。斯くて隆信、宗陽が領知八戸・新庄・津留・諸隈・益田・木角・成道寺等を悉く押へ取りて、八戸の城をば破却あり。宗陽は妻子を捕へらるゝのみならず、居城を破却せられ、領知をも押へられしかば、恨骨髓に徹し忍ばれず、山内に到りて勝利を深く頼み、隆信に對し何様仇を報いむ

八戸宗陽
隆信に破
勝られ神代
る利に頼

とぞ計りける。

一、斯くて神代勝利は、宗陽に頼まれし故、早速其色を立つべしと、則ち宗陽と相備にて、駄市川原へ出張す。此事、佐嘉へ注進ありしかば、隆信急ぎ馬を出され、長瀬に陣を張らる。斯くて龍造寺の陣より小河筑後守・同名但馬守・納富左馬助・同名越中守・同治部大輔・内田美作守・鹿江宮内大輔・福島民部大輔・倉町上野介・同名大隅守以下の者共、駄市川原の敵陣へ押寄せ鬨の聲を揚ぐ。山内勢是を見て、足輕を出し矢を射懸け、兩將は春日山へ引登る。龍造寺の者共、續いて春日山へ陣を寄せ高城寺を焼拂ひ、成富甲斐守信種の行を以て、敵を焦すに、神代・八戸、夜中に山内へ引入りぬ。斯かりし程に隆信も、頓て佐嘉へ歸陣ある。

鐵布合戰小河筑後守討死の事

弘治四年戊午、改元して永祿と號す。龍造寺隆信、今年春日山の古戰城を修理して、人數を籠置き、山内を攻むる繫にすべしと、秋九月に彼の城の普請を調へ、初は水

隆信春日山に小河信安の籠置

神代勝利春日山を攻む

町左京助信秀が與私を入置かれしかども、無勢に依りて、其居は小河筑後守信安が一族小河但馬守・同石見守・同次郎少輔・同左近大夫を籠置かれけり。然るに神代勝利は、龍造寺と十死一生の軍を志しければ、城原の江上左馬大輔武種と談合し、兩旗を以て、同九月より北山の嶺に陣を取りて居たりしが、先づ龍造寺が春日山の城を打崩すべしと評定し、同月中旬、勝利の家人梅野帶刀・松瀬又三郎に軍兵を副へ、春日山へ差向く。城中の者共是を聞き、さらば城を出で北なる峯に登りて、嵩より敵を見下し岩石を投懸け、矢を放せといふ程こそあれ。小河左近大夫を初め、皆我れ先にと討つて出づ。斯かる處に清げなる若武者一騎、唯一息にと登る敵あり。是は梅野帶刀が先陣に進むにてぞありける。城兵是を見て、天晴敵や、何様組討にすべしと犇めきし處に、帶刀餘りに進み峻しき所を踏崩し、眞逆に落ちたりけり。然る處を小河が家人二騎駈寄り、起しも立てず討取りけり。斯かる處に松瀬も續いて來り、敵味方入亂れ鬨の聲を揚げて相戦ふ。元より寄手大勢にて、城方の者利を失ひ、大將の小河左近大夫、痛手を負ひて引いて入る。山内勢、付入り城中に入

春日山落城

小河信安春日山に出陣

らむと追詰め、散々打戦ふに、左近大夫を初め同名治部少輔以下、悉く討死して、城は暫時に落ちたりけり。此事佐嘉へ隠なく、小河筑後守信安龍造寺の城中にありて是を聞き、大に牙を噛み、えゝ無念の仕合かな。いで信安馳せ向ひ、勝利が首を切り、同名共の孝養に手向けむと息巻して、頃は十月十五日、與力手の者残らず引率し、佐嘉を出で北を指して鞭を揚ぐ。隆信は小河が風情、何様卒忽あるべきと見られしかば、筑後守討たせては叶ふまじ。さらば自身も出馬すべしと、舍弟兵庫頭長信を初め追々に打出でらる。斯くて小河筑後守は、先づ春日山へ馳せ著き、城へ押寄せ見けれども、神代勢は疾く引上りて一人もあらず。弟共が死骸を初め討たれたる味方の者共、算を亂して横たはれり。信安彌、齒嚙をなし、其儘山内へ討ち入らむと進みしを、從ふ者共、筑後守を制し、今日は已に日晚に及びぬ。案内知らず敵地へ無體にて討ち入らむも危き事なり。明日峠を御越あれと申しけるに依りて、信安力及ばず、十五日の晩景は春日山に陣を取りけり。此事、早先達山内へ聞えけるにや。又推量しけるにや。今十五日山内の輩、轟々と集りて高野兵の

勝利小河
信安を討
取らむと
期す

大鐘を鳴らしければ、小城の千葉介胤頼、神代に加勢の爲め、急ぎ晴氣の城を打出で、屋形山に陣を張り、近隣の者共は小副川の寄合原に馳集る。爰にて勢を揃へ、勝利自身手分をし、其身は山内勢三千の内、一千七百を引分けて、三反田筋に懸り大野原を通りて、熊野嶺に陣を取り、嫡子刑部大輔長良は、一千三百を以て名尾口に向ふ。斯くて勝利の斥候走り來て告げけるは、既に佐嘉勢押來る。其中に葦毛の馬に乗りたる老武者の眞前に進み、頻りに鞭を揚ぐる者ありといふ。勝利打額き、夫は小河筑後守なるべきぞ。何れ龍造寺の奴原、切所に待請け討取るべしと下知を加へて、其夜の明くるを待ちけり。

勝利信安
接戦

一、翌くれば十六日曙、勝利唯一人、河浪駿河守に槍持たせ、自ら斥候に出でけり。時に小河筑後守も、敵間を見む爲め、是も唯一人、下人に槍を持たせ春日山の陣所を出で、脇路より攀ち登りしが、特に峻しき峯の細道にて、勝利に確と行逢ひたり。互に夫よと見ければ、勝利、駿河に持たせたる槍おつとり、力足を動と踏み、やれ筑後守か。勝利なり。倡や勝負を決せむといふ。小河打笑みて、心得た

信安討た
る

り。勝利物々しや。本より願ふ處、此合戦の雌雄は、汝と我等只二人が勝負にあるぞ。いざ参り候といふより早く、槍取直し突合ひけり。大力共の踏む足に、小砂交の岩石微塵に碎け、左右の谷へ落つる事、降る雨の如し。雙方の家人、援はむとすれども、其路一騎打にして、脇は石壁數十丈峙ち、中々駈け寄るべき様もなし。勝利の従者河浪駿河守は、餘りに泳へ兼ね、砂を掴みて勝利の草摺の下よりぞ打ちける。筑後守は、大の男の蓋に懸り、勝利を見下し突合ひしに、勝利如何したりけむ。一の腕を突かれて扱も無念と曳聲を揚げ、突返すを筑後守受迦し。己の頬先よりの右小鬢の際に、甲の鉢を槍先白く突貫かれけり。鬼を欺く筑後守も、うつぶしに倒れて、えゝ口惜し〜と二聲三聲いひけるを、河浪駿河走り寄りて首を取りけり。無念の至いふ計りなし。斯くて佐嘉勢も、小河が見えざるに驚いて、段々馳せ來る。其中に元は神代の家人梅野彈正いとふ者あり。今度小河に賺され、佐嘉勢に加はりて案内者となり眞前に馳せ來る。時に山内の先勢も次第に相近づく。其中に神代源内とて、無雙の智者のありけるが、彼の彈正が來るを見

て、傍輩共にいひけるは、あれ見よかたぐ、昨日まで味方にありし奴めが、今日は敵の案内者となりて來ること面憎けれ。よし／＼彼等を唯今手取にして見すべしと、箆笠を打著、土民の草刈を真似て、岨しき山路の一筋ある傍に儂^かみて居たり。彈正、是を源内とは知らず、眞の草刈よと思ひしかば、目も懸けずして馳せ通るを、源内、得たりと彈正が馬の足を取りて、下なる谷へ引落し、押へて首をぞ搔きにける。斯くて小河が軍兵共追々來りて、筑後守討死と聞きしかば、今は何をか期すべきと、一子豊前守を先とし、堀江右衛門大夫父子四人、梅崎主水以下、其一列の輩は山内勢に駆入り／＼討死す。斯かりし程に、後陣の佐嘉勢も續いて來り、鐵布峠に皆馳せ登る。此時勝利の旗本は、柚木川より大鹿鬣を過ぎて甌嶽に著陣す。時に勝利、士卒を下知し、敵は早鐵布に登りけるぞ。唯、一打に打擲てと戯れ匂りしかば、山内勢勇み進みて、古川新四郎一番に槍を入る。佐嘉勢も関を作り、敵味方入亂れ火を散らして相戦ふ。爰に勝利の近習に、阿含坊とて山伏あり。元來薩摩の伊集院が弟にて、其長七尺に餘り、鬼髭左右に分れ、髻

鐵布合戦

禿に生ひたりしを、一揉もんでゆりかけ、熊と甲を著す大木の蔭より立現れ、其頃會て希なりし鐵炮を以て、龍造寺の者共を擇び打に討倒す。爰に於て佐嘉勢、^{しどろ}四度路になり既に敗走せむと見えて、討死する輩には、石井尾張守兼清・中元寺新左衛門・副島左馬允・水町右馬助・江副新八郎・土橋孫七郎・大塚七左衛門・久保九郎兵衛・大石四郎兵衛以下、雜兵は數を知らず。其外秀島主計允・同圖書助・北島河内守^{時に}十五。進み戦ふ。神代勢にも進藤新左衛門を初め、雜兵若干討死しけり。勝利は、今朝曙より槍を初め、餘りに戦ひ勞れて、喉乾き息絶えたるを、溝田新介、谷へ下り水を含みて來り、是を與へしかば、勝利漸く息を出す。斯くて龍造寺の軍兵、終に打負け散々になりて敗走しけり。勝利は勝鬨を揚げ、則ち山内へ引歸りぬ。されば今度の軍に、敵味方の死骸にて谷一つを埋め、血は草木を染め、さながら紅葉に異ならず。^{此所、今頭谷といふ。矢の根、劍戟多し。}此時、何者のしたりけむ。一首の狂歌を書きて、河上の鳥居の前に立てたり。

北 佐嘉勢敗

春日山若武者先に落されて又清恥をかくぞ鐵布^{かたしき}

此歌は、小河左近以下先達て攻め落され、又今度の軍にも打負けし事を、山内より嘲哂しけるにや。 扱隆信は、河上口より旗を進められ、既に廣坂・龍瀬邊まで打入られし處に、今朝春日山の軍に、小河父子討死して味方敗軍しける由、注進ありしかば、隆信大に立腹し、彌急に山内へ攻め入りて、勝利を討取り、筑後守が亡心を休めむと、いらつて申されけるを、納富左馬助諫めて申しけるは、此度は筑後守が不覺にてこそ討たれて候へ。 然るに御立腹の紛まぎれに、唯今山内へ攻入らるゝ事、能々御思慮候べし。 彼の勝利は武功の大將なり。 今朝合戦に打勝つて、早速山内へ引入りし事を、借案するに、必ず隆信怒りの紛に押して山内へ攻め入るべし。 然らむ時は、切所に引請け前後を取切つて、遁さず討取るべしと思ふなるべし。 爾も彼等は案内者にて、其上岩窟に馴れ働き自由なり。 味方は案内を知らずして、且つ嶮阻に馴れず働き不自由なり。 然るに彼等が思ふ圖に入りて、うか／＼と山内へ進まむ事、武略の拙きにて候はむか。 先づ此度は枉げて軍を返され、重ねて謀を廻らされ、平場へ方便おひき出し、心安く御一戦然るべしと、様々諫

隆信納富の諫めを聞きて歸城

勝利小河信安の首を葬る

言申しければ、隆信も至極の道理に歸伏せられ、則ち馬を返され、河上僧座を打渡り、西の海道眞下りに、龍造寺の城へぞ歸り入れける。 時に神代の家人梅野兵部少輔と古川新四郎は、鐵布敗軍の敵を追懸けて、駄市河原を下りしに、佐嘉勢返し合せ散々打戦ひ、新四郎は深手を負ひ、半死半生になりて引返し、兵部少輔は討たれにけり。 斯くて勝利は、三瀬の城に歸陣し、小河筑後守が首を近邊の禪寺に贈りて葬禮し、佛事懇に取營みけり。 又隆信は、歸城の後、筑後守が妻女其外従者に至るまで、深く哀憐を加へ、彼の菩提を弔らはれけり。 扱信安が一男豊前守も、今度の軍に討死し、家を續ぐべき男子なかりしかば、隆信是を歎かれ、鍋島駿河守清房の三男を、彼の遺跡に定め、筑後守が娘に娶られ、小河大炊助信友とぞ申しける。 其後信友、武藏守信貫又信俊と改め、天正十二年三月、島原に於て隆信と共に戦死を遂げ、二代の忠心怠らざりけり。

筑後守信安の妻女、則ち剃髪し妙泉と號し、亡夫菩提の爲め高野山に末代の寺領として田貳段、肥前加瀬庄中原の内、本願院に寄す。

筑後守信安、初武純と號す。肥後國菊池爲安が孫、小河筑後守爲純の嫡男なり。中頃筑後國山門郡の内、上小河下小河を知行す。仍りて小河と號す。

城原攻少貳冬尙自害の事

同年十一月上旬、龍造寺隆信、宿老共を集めて申されけるは、當時城原の江上が、少貳屋形を守護し、三根・神崎を知行して、動もすれば神代と引合せ、我等が怨となるなり。所詮少貳を攻め潰さば、江上も神代も威を失ふべし。急ぎ勢福寺城を攻むべきなり。其用意すべしと申されしかば、早速陣觸あつて龍造寺の家人等馳せ集る。斯くて隆信、佐嘉を打出でられ、姉河彈正忠が姉河の城に入りて本陣とせらる。其前廉、蓮池の小田駿河守政光と、蒲田・崎村三人の犬塚へも出陣あるべき由申送られし程に、何れも已むを得ず領掌して、政光は手勢三千人餘騎を率ゐて、西の方莞牟田口より押寄す。時に神崎の本告左馬允頼景、小田と一手になりて先陣す。二陣は犬塚の一族蒲田・崎村兩所の軍兵合せて一千五百餘騎を以て、東の方神

隆信勢福寺城を攻む

神代勝利江上武種陣が爲に出

崎口より相進む。隆信は未だ姉河の城にありて、軍を出されず遊軍の如し。頃は十一月十日なり。江上は兼ねて思ひ設けし事なれば、急を山内へ告げて、神代勝利の方へ援を乞ひしかば、勝利、取る物も取りあへず、早速三瀬の城を出で、道々軍士を催し、廣瀧・一番瀬・腹巻を先手として、三瀬・松瀬・杠藤原・名尾・梅野を旗本にて、同九日の晩景、城原勢福寺城に入る。其夜、城主江上武種、勝利と評定しけるは、以前隆信當城を攻めし時も、分内狭きに依りて、大勢を防ぎ難く味方利を失ひしなり。所詮今度に於ては、半途に出向ひ廣みにて戦ふべしと、軍を二つに分けたり。先づ一手は、勝利の山内勢に城原の軍兵相加はりて其勢三千餘騎、西の方牟田の前に出向ふ。又一手は城原衆江上石見守貞種・執行攝津入道宗圓・同越前守種兼・同中務少輔兼家・枝吉長門守種量・同周防守種次・直塚右京助種重・同治部少輔純英・波根右京助景乘・同名佐渡守景次・服部常陸介・同名伊豆守・同伊賀守・其外島・青柳・西久良木・石橋・光安を初め都合貳千餘騎、東の方神崎口を差固む。斯くて同十日の朝、小田政光・本告頼景兩勢を合せて、牟田の前の繩手に押詰む。時に山内の神代勢相懸あひがかりに懸

合戦

城原攻少貳冬尙自害の事

り、唯一筋の細道の左右は澤田なりしに、関の聲を揚げて弓、鐵炮を射違へたり。其時、勝利の兼ねて用意ありし三間柄の大槍を、數百本眞前に立て、無二無三に叩いて打ち散らす。暫く戦うと見えたりしが、小田方の先手本告左馬允頼景、一戦に打負けて政光の旗本へ崩れ懸る。政光、味方の難儀を見て、急ぎ隆信の本陣姉河へ軍使を馳せ、此口の軍烈しく候。さりながら政光に於ては一足も引き候まじ。但し自餘の味方の敗れざる前に、急ぎ御旗を進められよといひ遣す。其使、既に數箇度に及びしかども、隆信心底に深き思慮あつて、更に軍を出されず、政光大に立腹し、蓬きたな隆信の所存かな。よし、政光討死すべしと、向ふ敵に馳合せ、東へ追詰め西へ攻め付け、死狂に切つて廻る。此政光は無雙の打物の達者にて、其合戦の行装、偏に縛多王が鬼を狩りしも斯くあらむ。斯かりし程に、懼れて近づく者もなく、江上、神代の兩勢、政光一人に切立てられ、陣中疎まはらになりけり。されども敵押取籠め、打物にては叶ふまじきぞ。唯、遠矢に射て落せと、四方より矢を放す事、降る雨の如くなり。中にも波根が射る矢、政光に中りて馬より逆に落つ。是を見て服

隆信の
陣小田政
光戦死

部常陸介、走り懸りて首を取る。政光の家人原河内守、主の敵あまさじと、服部を突臥せ其頸をぞ取りける。蓮池の輩、政光の討死を見て、小田右馬大夫利光を初め、犬塚彌七郎種久・山田河内守・同善九郎・同福童丸・江口兵庫助・同善左衛門・栗林近江守或書に伊勢守・内田右馬大夫或書に右近と・同三左衛門・末次與七郎・同玄可舜徳齋以下宗徒の者六十餘人、敵中へ駆入り、討死し、殘兵は皆敗軍す。城方江上勢にも執行攝津入道宗圓、子息越前守が見えざるを尋ねて、馬を敵陣へ乗込め討死す。其外西和泉守・同忠三郎・同新太郎父子三人も討死しけり。斯くて神崎口へ向うたる犬塚の一族も討負けて、伯耆守鑑貞は討死し、彈正少弼鎮或書には深手を負ひて己が館へ引退く。扱此事、隆信の本陣へ聞えしかば、其時隆信、さらば軍士を進めよと、姉河を打立つ。則ち姉河が家人堺石見守・堀江藏人以下を先手とし、福池長門守信重・三浦下野守純就・納富左馬助信景以下大軍を率ゐて、其勢山を裂き、堂々と太鼓を早め押寄せけり。此時、江上も神代も早速軍士を引揚げ、武種は田手の日吉城へ引籠り、勝利は横大路を西へ河窪へ廻り山内に引歸る。時しも今宵、小雨交りに雪降りて、

隆信勢福
寺を圍む

山路いと闇かりければ、勝利河窪に著きし時、當所白鬢大明神の神主白水讚岐守に申付け、續松を出させ、其光にて三瀬の城へぞ歸り入りける。斯くて隆信は、勢福寺城へ押寄せられ、龍造寺右衛門大夫家就・同名備後守鎮家・同伊賀守家直・納富左馬助信景・福地長門守信重・三浦下野守純就・小河玄蕃允信貞以下、彼此四千餘騎を以て、大手・搦手・二手に分れ遠攻にこそせられけれ。されば今度の合戦に、隆信、小田・犬塚を援はれざる事、仔細ある事なり。彼の輩は元來少貳家骨肉の者なれば、當時龍造寺に従ふと雖も、行末の事覺束なく、必ず怨にもなるべしと思はれし故、此度先手をさせられ、態と捨殺すてころしにせられしとぞ聞えし。不義の至と人々さみし申しけり。斯くて勢福寺の城中には、少貳屋形を守護して、河津紀伊守・牧左京亮・光益新三郎・宗左馬助・窪・今泉并に江上の一族・同家人等、身命を抛つて持口を防ぎしかば、佐嘉勢敢て近づき得ず、二三日は徒に城を圍みて居たり。

一、同月十五日、隆信、勢福寺城を圍みながら、軍兵を差分けて小田政光の居城蓮池を攻めさせらる。是は此度、牟田の前の合戦に、政光を援はれず捨殺にせられし

隆信の政
光を援け
ざりし理
由

隆信政光
の居城蓮
池を攻む

事、彼の子供・家人等、聞きて大に恨み思ふべし。さあらば竟に隆信が仇ともなるべき間、所詮彼の城を攻め干し、政光が從者悉く塵にせむと思案ありての事なり。斯くて蓮池の城中には、政光討死して未だ七日過ぎず、其經營に取亂し、其上龍造寺より當城を攻むべしとは、思ひ寄るべき事ならねば、鯨波を聞いて上下大に周章て東西に立迷ふ。其中に老臣深町入道理忠、城戸を持つて相戦ふ。時に佐嘉勢の中より、水町左京亮・宮崎伊勢守・北島河内守以下、進んで相戦ひ各々分捕す。其隙に寶琳坊の住持眞如坊澄能の才覺を以て、政光の子彈正少弼鎮光・中務大輔朝光・左近大夫増光・其外老若男女、城中を出し筑後國三瀨郡へぞ落し遣しける。斯くて深町入道は、城内の輩を落さむ爲め、散々に戦ひ終に討死しけり。此入道討たれしかば城は則ち落去す。扱今度討たれし城兵共の死證を、隆信の實檢に入れける中に、深町入道が首あり。隆信、是を見られ、さてく、此入道は討つまじき者なるを、我れ先年、敵の爲め城を圍まれ既に腹を切るべきに極まりしを、此の理忠入道が情にて其圍を免れ、今には運を開き甚だ武威を振ひぬ。然るに此度、我等詞

政光の老
臣深町理
忠戦死

を添へざる故討たれぬるこそ本意なればと、大に悔まれけり。斯かる處に、年の頃八九歳の童を生捕り來れり。侍の子と見たりしかば、皆打寄りて、親の名を問ひしに、深町理忠と答へぬ。其旨、隆信へ披露しければ、大悦あつて彼の年少を助けられ、後に百町の食祿を給はり、御家人となして深町理と號し、天正十二年三月、隆信、島原にて落命ありし時、ともに忠死を遂げけり。其子孫今にあり。

一、今度蓮池落去の時、政光の父實は祖父駿河入道覺派は、聊の事あつて蓮池の居城にあらず、軍散じて後、歸城して政光父子の成行なりゆき、一々委しく尋ね聞き、大に悔み腹を立てしかども力及ばず、家人は皆落ち失せて主従二人になりぬ。覺派、今にはすべき様なく、口惜しき事かな。よし／＼今は腹を切るべしとて、城より西に當りて、藏屋敷のありしに入りて、心靜に自害しけり。一人附添ひし家人、甲斐々々しく主の死骸を取隠し、其家に火を懸け、はのほ煌の中にて腹搔切り、ともに冥火となりけるとを聞えし。

一、斯くて龍造寺隆信は、彌城原勢福寺城を圍みて、日を累ね早十二月朔日になり

龍造寺神代江上和平

隆信勢福寺城を陷る

少貳冬尙自害

ぬ。斯かる處に同月三日、河上實相院の座主增純法印ちつこうの愀あつにて、千葉少貳龍造寺江上神代和平調ひ、此後異心あるまじき由、一紙の起請文に、龍造寺山城守藤原隆信神代大和守武邊勝利江上左馬大輔大藏武種と三人の名を載せ、神名に血を灑いで、河上社の寶殿にぞ籠められける。斯かりし程に、小城佐嘉・神崎無事の化に歸して、既に賣炭の冬も暮れしかば、隆信、勢福寺城の圍を解き、急ぎ佐嘉の城へぞ歸陣ありける。

一、既に佐嘉・小城・神崎和興あつて、隆信、佐嘉へ歸陣ありしかば、少貳方の輩、一旦安堵の思ひをなし、屋形冬尙も心安く思はれけるに、翌くれば永祿二年己未正月上旬、隆信、俄に軍を起し又々城原に押寄せ、勢福寺城を去冬の如く取圍み、東西南北より攻めらる。舊冬十二月三日の和談は、其不意を撃たむ爲の偽なりけり。元より城中思懸なく油断してありしかば、防戦叶ひ難く、江上武種、則ち降人となりて城を出で、筑後國へ赴きしかば、冬尙は羽拔の鳥の如く成果てられ、すべき様なくして、同月十一日終に生害せられけり。生年三十三なり。法名安心本

城原攻少貳冬尙自害の事

海と號す。昔右大將朝頼公の時、彼の冬尙の先祖武藤小次郎資頼、鎮西へ下向し太宰少貳に任じて以來、今の少貳冬尙に至つて既に十三代、星霜三百七十餘年にして、當家衰滅しけるこそ歎はしけれ。斯くて隆信は、年來の家の敵少貳屋形を亡し江上をも追落して、大に悦び佐嘉へ歸陣ありけり。

或はいふ、今度江上、早く城を去りし事は、隆信、計略を以て内通ありし故、冬尙を捨てむ爲めなりと。

或はいふ、冬尙も、今度江上と同じく城を忍び出で、有馬仙岩父子を頼み、藤津の方に赴かれし處、七浦にてふと煩出し、死去ありしとも。

千葉介胤頼討死 附 妙見太刀由來の事

今度城原にて生害ありし太宰少貳冬尙は、前少貳資元の嫡男にて、男女の兄弟多かりけり。一人は改興御曹司と申して、頃日は譜代の家人馬場横岳宗出雲朝日筑紫に守護せられ、東肥前に居住あり。一人は小城郡司千葉丹波守喜胤の家督を續ぎ、

千葉介胤頼
胤連と
不和の原
因

胤頼胤連
合戦

胤頼戦死

其息女に相嫁して千葉介胤頼と號し、此時、晴氣の城にあり。又一人は河副の邊に忍んでありけり。末一人は女子なり。然るに晴氣の千葉介胤頼、同名の胤連と不和にして、近年合戦する事度々に及べり。其故は胤頼は元來少貳の子なり。胤連は龍造寺の婿なり。少貳と龍造寺は怨敵なり。依りて胤頼は兼ねて少貳に力を合せ、胤連は龍造寺に一味しけり。斯くて今年正月十一日、隆信、大勢を以て城原の城を取詰められ、少貳屋形冬尙必ず落去たるべき由、小城へ聞ゆ。千葉介胤連、時を得たりと悦び、同十一日急ぎ人數を催し、牛尾の城を出で同名胤頼の晴氣の城へ取懸る。時に胤頼、城を出で東の方の山路に於て胤連と相戦ふ。されども胤頼、折節無勢なりしかば合戦終に打負けて、家人十二人、又者四人討死し、其身もそこにて討たれにけり。軍退散の後、三間寺の竹隱和尚、是を憐み其首を牛尾より乞請け、死骸と同じく則ち三間寺に葬り、七日の中陰六日よりは寺家の取成し、合戦場に卒都婆を立て施餓鬼をなし、同じく書寫經一部、十六日に之を修し懸に弔はれけり。年廿八なり。法名、禪の三間寺に於ては、天受本龍大禪定門。法華の松尾山にては

千葉介胤頼討死附妙見太刀由來の事

千葉家の重寶

日頼と號す。然るに彼の胤頼に男子一人あり。父胤頼討死の後上佐嘉河窪へ赴き、以前の好を以て神代家を頼み、後に千葉屋形胤誠とぞいひける。此胤誠に、先祖累代相傳の重寶三つあり。一には妙見菩薩の尊像。二には妙見の太刀。三には家の系圖なり。此重寶共を、後には皆代神家へ譲り與へられ、其上平氏并に二月星の幕紋、先祖の諱字常といふ一字を授けられけり。

同由來

一、彼の三つの寶に由緒あり。千葉家の曩祖、昔關東下總國に住せし時、或る所の小笹の上に稚童子、忽然と現はれ居たり。一其傍に妙見菩薩の佛像と太刀一振之あり。此兒の装、更に尋常ならず不思議の事なりしかば、頓て帝都へ奏聞ありしに、則ち國の守護職、是を養育して子にすべき由勅定あり。其時の國守下總權介平忠常、此兒を養ひ成人にして、千葉介常將とぞ申しける。父もなく母もなく、月星を以て兩親とし、家屋の外に生れたる故、月に星を慕の紋とし、小笹の上に現はれし故、千の葉といふ心にて千葉と號し、替紋には根笹を用ふ。扱妙見菩薩を下總の國へ勸請し、其社に彼の太刀を籠め置きけり。然るに太刀の徳、天に通

妙見太刀

じけるにや。ある時、雷此太刀に望を懸け鳴下りて、是を掴み虚空に昇らむと光り渡りしを、忽ち妙見の神體現はれ給ひ、即ち奪返し給ふとなり。其時、雷の抓きたる形あり。是より此太刀を雷太刀とも、又妙見太刀ともいひ傳へたり。然るに文明の頃、千葉介教胤、此太刀を帶し大村を攻めて歸陣せしに、藤津濱の祇園の御謫にて、新介教胤、杵島の大町の入江篠島の沖八丈がにて船を覆し、海底に沈みしを、三年を歴て同氏胤朝の時、妙見菩薩の靈夢を蒙り、彼の海中を捜させて見るに、則ち探り當て、取上げたり。斯かる稀代の名劔なりし故、年経て後、此太刀、肥前太守に召されしとぞ聞えし。

北肥戦誌 卷之十四 終

千葉介胤頼討死附妙見太刀由來の來

北肥戦誌 卷之十五

筑前國侍島軍の事

永祿二年己未、筑前國五箇山の領主筑紫右馬頭惟門、此二三箇年、大友に攻められ山中へ引籠りしが、今年の春、居城武藏へ立歸り、大友に對し又々逆意をなしけり。此事、豊後へ聞ゆ。是を誅伐の爲め、眞光寺佐藤刑部丞を檢使として差遣し。筑後・肥前の輩へ早速惟門を退治すべき由、大友義鎮下知せられけり。然る間、筑後上下の諸將、肥前の横岳右馬頭資誠・犬塚山城守尙家・同名良部大輔尙重等、彼の兩人の檢使とともに、四月二日惟門が武藏の城へ取懸る。されども合戦に及ばず矢軍計りにて、寄手の諸軍引退きしに、惟門の家人附送り、侍島に於て散々相戦ふ。時に大友の軍士打負けて、府内よりの檢使佐藤刑部丞立所に討たれぬ。是を見て、肥前の

侍島合戦

大友勢敗北

犬塚尙家、筑後の星野鑑泰・問注所鑑晴・麥生兄弟返合せ、皆討死しけり。其外蒲池武藏守鑑盛・田尻伯耆守親種踏留まりて、大に挑戦し、中にも田尻が手には敵の首五十三級討取りしかども、敗軍の習、其場を踏まず。味方にも討たる者、田尻尾張守種任・同名美作入道・同次郎三郎種益并に家人七人。又者十三人、彼此戦死廿三人。疵を蒙る者田尻玄榮入道以下五人なり。斯かりし間、諸家の親類被官も討死する事數を知らず、竟に筑後衆敗軍しけり。時に草野眞清が、大友方にて去々年より宮尾の城に在番しけるも、恠へずして落去りけり、總て豊後勢敗軍なり。草野眞清、其後又宮尾の城に差籠りしを、筑紫惟門、夜討を以て打崩し。惟門の子廣門の二九一丸とて、未だ年少の時、眞清一所にありしをも抱取り、又五箇山へ引入りぬ。

秋月筑紫龍造寺大友へ和を乞ふ事

同年秋月左兵衛尉種實、後に長門守と號す。是も去々年大友に攻められ、父文種生害の後は、

筑前國侍島軍の事 秋月筑紫龍造寺大友へ和を乞ふ事

中國へ落行き成長して、今年は十二歳になりしが、今度筑紫と申合せ、中國より舊地秋月へ歸り入り、古所山の本城に楯籠り、大友に向つて父の仇を報いむと、深く逆意を挟みけり。是に依りて豊州より彼の討手として、田北大和守鑑生、其外の宿老并に南郡衆。肥後衆皆々出陣し、如早晚先づ日田表へ著陣せしめ、夫より左右良山へ陣替あり。筑後衆も出勢し、其後鳥留に陣を移し、則ち休松へ差寄せ陣を取り、秋月が古所山の城を攻めむとす。されども此城無雙の要害なりしかば、容易攻め登る事叶はずして、諸手の大友勢、數日徒に城を見上げ在陣しけり。斯くて各、評定し、南郡衆と肥後勢は、其儘休松に控へ陣を取り、府内の宿老と筑後勢は庄山へ陣を移し、様々行を廻しけれども、彌古所山の城堅固なり。斯かりし程に次第に秋にもなり、諸勢皆山中の長陣に勞れ、其上庄山は高山にて秋霧深く、馬物具悉く損失し、士卒大に困窮しければ、田尻伯耆守、一書を以て右の次第を申し碎き、先づ先づ山隈原へ陣を直され然るべくもや候はむかと、豊後の一將田北大和守へ申送りぬ。鑑生も是に同意し、休松に於て南郡衆の陣へも談合あり。何れも一致な

大友勢秋
月が古所
山の城を
攻む

大友勢山
隈に退却

りしかば、頓て諸勢、山隈へ陣替す。時に筑紫が家人共、田代まで討つて出で、豊後勢に向つて少々取合ありしかども、さしたる行に及ばず、皆五箇山へ引入りけり。斯くて大友勢、先づ古所山を闇き、肥前の龍造寺か或は少貳を攻め崩し、或は小田江上を追出して、一雅意を動く間、是を攻め干すべしと談合して、八月廿八日、既に畠山まで陣を寄す。此時蓮池の小田鎮光、城原の江上武種は、浪人にて筑後にありしが、大友勢の佐嘉を攻むると聞いて大に悦び、龍鱗に付き鳳翼を攀ちて、此度宿望を達せむと思ひ、各、筑後を打立つて肥前の舊領に入りけり。彼の小田鎮光の兄弟は、去冬隆信に攻められ、蓮池の城を落ちて、先づ私領筑後の三瀧に到り、夫より頃日は坂東寺にありけり。其従者六百餘人となり。斯くて龍造寺の城中には、大友勢を防がむと様々評議ありしかども、所詮一旦和を乞ふべきに衆議決定し、九月十五日、隆信の名代として龍造寺左衛門佐鑑兼を、今度豊後衆の陣したる畠山へ差出し、和議を求められしかば、隆信の訴に任せ無事に調ひ、大友勢は夫より陣を返し、筑前若宮庄河底といふ所に陣を移す。斯かりし間、小田鎮光は舊領五千餘町を

龍造寺和
を大友に
乞ふ

安堵して、蓮池の城に歸り、入江上武種も本領二千五百町を返し與へられ、城原勢福寺の城へ立歸りけり。

一、斯くて大友の軍士の内、豊後の輩は筑前國河底に在陣して、彌、古所の城を差詰め、筑後の輩は河邊下野荒瀬村に到りて、夫より三桑木へ陣を寄す。然るに古所の城、長々敵に圍まれ籠城叶ひ難かりしかば、城主秋月左兵衛尉種實、詫言深重を以て和を乞ひけり。此事、田尻伯耆守取次にて、豊後の一將田北大和守鑑生承引あり。則ち其一禮の爲め、種實より同名越前守を、豊後衆の陣河底へ差出し、田尻が取合を以て、今度種實、籠城宥免の禮を述べけり。扱田尻は、古所の城へ登り、種實を同道にて江河の山中へ下り、種實下城す。然る間、秋月表先づ平均して、豊後・筑後の大友勢、皆々開陣しけり。其中にも田北鑑生は、三桑木の田尻陣所へ一宿あつて歸陣なり。

筑紫惟門
和を大友
に乞ふ

一、筑紫右馬頭惟門も、秋月が大友へ降參の由を聞いて、力を落しけるにや。五箇山隱住の所より大友に到て、深重懇望を以て降參すべき由申しける間、是も田尻

親種調達にて宥免ありけり。爰に於て九州一旦靜謐す。

河上合戦神代勝利没落の事

永祿四年辛酉九月上旬、龍造寺隆信、使を山内へ遣し、神代勝利へ申されけるは、隆信、御邊に對し鬱憤片時も止む事なし。所詮有無の一戦を遂げて、兩家の安否を極むべし。然れば今月十三日、山と里との境なれば、河上へ出合はれよ。勝負を決し申すべしといひ送られけり。勝利、仔細に及ばすと返答あり。其後、又勝利よりも、河浪駿河守を龍造寺へ差遣し、彌、當月十三日、河上に出合ひ勝劣の程を試み候べしといひ遣されけり。斯くて其日になりしかば、勝利、熊川の城にて勢を揃へ、都合七千餘騎河上に出張し、手合を定めて口々を差固む。先づ勝利は三瀬内藏助武家・同名長門守安家・古河佐渡守・同新四郎・嘉村讚岐守父子・畑瀬越前守父子、其外恒松・島田・喜浦・栗並以下二千餘騎を引分けて、淀姫大明神の西の總門を本陣とす。扱大手宮原口をば、嫡子刑部大輔長良を大將にて、神代備後守蕃元・同豊前守・同兵

龍造寺隆
信使を代
りて神代
勝利に戦
を挑む

神代應諸
に出陣上

衛尉・福島周防守勝高・同伊賀守利高・中島上總介鑑連・千布因幡守家利、其外江原・梅野・國分・小副川・一番瀬を初めとし、三千餘騎を以て差固む。又大明神の前南大門へは、次男兵部大輔種良を大將にて、松瀬又三郎宗奔・同能登守利宗・杠紀伊守種滿其外合瀬名尾・芹田以下一千三百を以て相備ふ。扱河より東都渡岐口をば、三男清次郎周利に、八戸宗陽を副へ、西河伊豫守・古湯・杉山・鹿路・大野の者共、其外千葉胤誠の家人彼此合せて一千五百餘騎にて固めたり。頃は永祿四年九月十三日、隆信も其信も其勢八千餘騎を以て、また鷄鳴に龍造寺の城を打出でられ、軍を三つに分けて河上へ押寄せらる。先づ東都渡岐口へは、舍弟左馬頭信周・從弟左衛門佐鑑兼・小河大炊助信友以下二千餘騎にて向ひ、又河より西南大門口へは、納富但馬守信景前名は左馬助。を大將にて二千五百餘騎、河に副ひ松原に據つて押寄せ、隆信は三千五百餘騎にて、西山田より大手宮原口へ押詰めらる。旗本の先陣は廣橋一祐軒信了。二陣は福地長門守信重。三陣陣脫は旗本にて、後陣は龍造寺兵庫頭長信なり。又馬廻の侍に馬渡刑部少輔・倉町太郎五郎・石井刑部大輔・同源次郎とて、無雙の荒

隆信河上に出陣

河上合戦

者四人あり。隆信の馬の前後に相供す。斯くて十三日の辰の一點、先づ大手宮原口より軍始まつて、敵味方弓鐵炮を打違へ、神代の陣よりは神代兵衛尉・江原石見守一番に槍を合す。龍造寺の先陣廣橋一祐軒、士卒を勵し、一足も退くな。懸れくと下知をなす。されども神代が山内勢、無二無三に競ひ戦うて、龍造寺の者共利を失ひ、南の方へ雪崩立ち、先陣の廣橋入道既に討たれむとぞ見えたりける。隆信兼ねての軍制に、先陣の敗は二陣の不覺、先陣の勝は二陣の手柄と定め置かる。然るに先陣の一祐軒打負けたりと遙に見られ、二陣の者共を大に怒りて、自ら采配を揚げ馬を榎木口へ乗廻され、馬廻の者共を急ぎ先陣に入替へ、二陣を頼むな。進め進めと頻に下知ありしかば、四人の荒者を先として、旗本の輩我れ劣らじと相進み、二陣の福地長門守も、五百餘騎にて入替る。時に神代の陣より武藤左近將監と名乗りて、福地に突いて懸る。長門守是を見て、能き敵なりと思ひしかば、人交もせず突合ひしに、武藤、如何したりけむ。福地が槍を請け廻し、胸板を突かれて仰に倒る。福地が與力小林播磨守走り懸りて其首をぞ取りける。此外大庭石見守は、

神代中務丞を射伏せ、納富越中守・北島河内守以下進んで分捕し、空閑三河守光家相戦うて軍功あり。斯くて南大門口松原にも、同じく軍始まりて、神代兵部大輔と納富但馬守火を散らし相闘ふ。然る半ばに、勝利の東の手都渡岐の陣に、野心の者出來て大將清次郎を刺殺しける程に、此口の軍、神代勢亂れ立つて悉く敗軍し、八戸宗陽疵を蒙り山内へ引退く。斯かりしかば、龍造寺左馬頭・同名左衛門佐・小河大炊助以下の輩、爰をば打捨て河を駈涉し、納富が攻口南大門へ押寄せ、神代兵部大輔の陣へ横合に切懸る、時に神代勢、東南の敵を防ぎ兼ね、四度路になりて見えけるを、兵部大輔、目を怒らかし士卒を下知し、一足も引くな、駈入りて皆討死せよ。爰をも破られなば、大手の軍難儀なるべし。進めしと頻に采配を振つて、自身敵に相當る事數回なり。是を見て其家人松瀬能登守・馬場四郎左衛門を初め、佐嘉勢に駈入りて悉く討死す。大將兵部大輔も、餘りに進んで打戦ひ、御手洗橋の邊にて、敵に組まれて討たれにけり。斯かりし程に、南大門の軍も、山内衆打負けて皆散々になりしかば、龍造寺の軍兵、爰をも打捨て、勝利の本陣大明神の總門へ攻め近づき、後

を取切らんとす。勝利、今は怵へ兼ね八反原の方へ引退く。斯様に口々敗れしかども、大手宮原口の軍は、未だ果てずして隆信の旗本と、長良の軍兵あつら東風西風相戦ふ。爰に竹藪を隔て、戦ふ所あり。佐嘉勢の中より馬渡刑部少輔信喜、是を見て堀の岸を傳ひ寄り、藪越に敵の突出す槍を六七本奪取りけり。斯くて龍造寺の士卒、水町左京亮信秀以下、大に進み戦つて、長良終に打負け山内へ引退く。佐嘉勢、是を大將よと見て、遁さじと追駈けたり。長良、屹と見て長身の槍ながみに、血の付きたるを振廻し、慕ふ敵を突退く。されども佐嘉勢彌、附慕ひ、遁れ難く見えたりしかば、長良、既に高島榎木の下にて腹を切らむとせられけり。是を見て長良を落さむ爲め、福島周防守・同伊賀守・同彈正忠・同新三郎・神代兵衛尉・梅野源太左衛門・中島上總介以下、近づく敵に馳せ向ひし、我れ先にと討死し、江原石見守は生捕となりけり。其隙に神代備後守走り寄つて、長良の自害を押止め、能く御忍び候へと、藪の茂みへ藏し置き、己は敵に渡り合ひ、福地長門守が手の者三人切伏せ、猶長門守へ切懸りしを、福地が家人懸り隔り、備後守をば討取りけり。爰に神代勢に、西原左衛門

とて隠なき精兵あり。長良を落さむと防矢散々に射、矢種皆射盡しければ、籠をか
 なぐり捨て、太刀を抜いて渡り合ひ、痛手多く蒙りしかば、進退叶はずして、とある
 所に打臥したり。斯くて勝利は、慕ふ敵を追拂ひ、八反原まで落ちられしに、佐嘉
 勢追駈け來りて、落人あるぞ。討留よと聲々に觸れ呼ばはりしかば、近邊の野伏盜
 賊、蜂の如くに起り集りけるを、勝利、是を追拂ひて、仔細なく熊川の城に入りけり。
 長良も又其夜、忍びて熊川へ來られけり。斯くて隆信は、今度河上の合戦に打勝た
 れ、鐵布の無念を晴しけるよと大に悦び、則ち勝鬨を揚げられ、下於保村にて生捕
 共を誅戮あり。佐嘉へ歸陣せられけり。

神代父子
熊川城に
退却
隆信凱旋

或はいふ、此軍に、勝利も討たれしとて、そでなき首三つありしとなり。

或はいふ、勝利の次男兵部大輔種良、此度生捕となり、下於保村にて斬られける
 とも。

或はいふ、今度生捕の中、江原石見守、下於保村にて斬られし時、敷草よりつと立
 つて、太刀取を蹴倒し、喉笛を喰切りけると。

神代大村
純忠に頼
る

扱隆信、佐嘉へ歸陣あつてより、神代領悉く沒收せられ、山内所々に以前の如く代
 官を居ゑられ、空閑參河守光家を以て、山内の押の爲め朽井村へ移されけり。然る
 に神代勝利は長良と談合あり、先づ山内を退き、重ねて本意を達すべしと妻室を具
 し、上松浦の草野へ落行き、夫より所縁ありしかば、父子打連れ大村の内波佐美へ
 赴き、彼所の地頭大村式部大輔純忠を頼まれけり。純忠仔細なく肯ひ、勝利父子の
 妻子をも波佐美へ迎へ、家人朝長伊勢守を附けて、是を守り深くいたは勞り申されけり。
 又塚崎の後藤伯耆守貴明の許よりも、時々事問ひ申されしとぞ聞えし。

勝利歸城の事

斯くて神代勝利は、妻子と共に暫く波佐美に浪人にて月日を送られけるに、家人中
 村壹岐守 其頃山内に残りて居たりしが、如何にもして勝利を歸城させたく思ひ
 て、其計略の爲め嫡子外記が今年十六になりけるを、唯、一人召具し、山内を徘徊す。
 然るにある夜悴外記、佐嘉より居る置かれたる摩那子山の代官田中兵庫助が宅に

中村壹岐守父子龍造寺の代官を殺し其家を焼く

忍び入り、無念に兵庫を切殺し、扱家に火を懸け焼立てしかば、近邊の土民共驚きて、是は如何にと馳せ集る。中村父子は、闇き所に立隠れ、風と出でては丁と切り、立現はれては礮と切り、爰にて聲を立て彼所にては手を叩き、様々働きける間、其邊の者共、彌々立騒ぎて、佐嘉よりの代官共、聞傳へく騒動する事大方ならず。此騒の紛れに、中村父子、山内所々を駆け廻り、朋友共を相語らひ、佐嘉よりの代官悉く追出しけり。扱此事を大村に於て、勝利父子へ注進しければ、勝利・長良大に悦び、さらば歸入るべしとて、同年十二月中旬、波佐美を立ち、先づ小城山へ懸りて夫より三瀬へ歸城ありけり。斯くて勝利父子、百日の中に歸參ありしかば、山内の者共男女僧俗、悦ぶ事限なし。されば隆信、佐嘉にて是を聞かれ、様々心を碎かれしかども力なし。其翌年、隆信工夫を廻らし、何とぞ叛忠の者を求め、勝利を討たすべしと、其頃山内へ西河伊豫守とて、辯舌明かに力量人に勝れたる者のありけるを、色々賺し語らはれける程に、伊豫守肯ひて、山内へ歸り勝利を討つべき行、密に三瀬又兵衛に内談す。又兵衛は、兼ねて彼の西河とは斷金の因なりけり。されど

神代勝利歸城

も三瀬、此事に於ては同心せず、父長門守へ斯くと告げけり。長門守膽を潰し、早速勝利へ告げしかば、勝利打諾き、伊豫守が重陽の禮に出でける所を、三瀬又兵衛・中野新十郎に胸して討果されけり。其後は隆信も勝利を討つべき計略、中々思止まられけり。

一、今年犬塚民部大輔尙重も、本領蒲田へ歸り入りけり。近年尙重、隆信の爲め居城を去りて他國にあり。

一、隆信頃日、小田鎮光・江上武種・犬塚尙重と和平あり。鎮光は塔に取られ、武種へは次男を養子に約束あり。尙重は元より妹婿なり。

一、今年小城の祇園の神矢、北向に立ち、其矢向に蛇多く死しけるこそ不思議なれ。

少貳元盛出家附今泉播磨守忠心の事

爰に永祿四年の頃、前太宰少貳冬尙の舍弟に、御曹司元盛といふ人あり。父資元、去ぬる天文の初、肥前の多久にて生害ありし時は、此人未だ稚くて、妹君と共に少

少貳元盛出家附今泉播磨守忠心の事

今泉朝覺
の忠心

貳の舊領佐嘉郡河副の江上村福満寺に、聊か所縁ありて忍び居られしを、譜代の家臣今泉播磨守朝覺、亡君資元の遺言に依りて兎角撫育し、今年元盛、既に廿七歳とぞ聞えし。抑、此朝覺、未だ若かりし時、少貳家衰亡の事を歎き、如何にもして朝廷に達し、當家を再興すべしと思立ち、出家に様を變へて、則ち播磨坊朝覺と名を窄し、先づ六十六箇國を廻つて、諸家へも心を合せ、其上にて上洛を遂げ、竹苑柳房を初め、公家方へ縁を求め、中にも柳原大納言資定卿の許へ、常に近づき奉りけり。然るに播磨坊在京の時、頃は太永元年に、東山祇園社に參詣し、南無歸命頂禮牛頭天王、仰願はくは和光の憐を垂れ、朝覺が心中の所願を成就なさしめ給へと伏拜み、頓て新に工匠の功をなして、宮殿を修造し、其社の邊に杉と松とを多く植置きけり。然る間神官等、朝覺坊が體を不審思ひしかば、一々奏し申しけり。當今後奈良院、是を叡聞まし、先づ朝覺坊を法橋上人に補任せられ、其上にて勅問ありけるは、抑、上人、邊鄙の身として兼ねて在京し、祇園造營の事、如何様仔細あるべしと勅定ありしかば、朝覺上人、傳奏に屬て申しけるは、愚僧は元來太宰少貳譜代の家人、今泉播磨守朝覺と申す者にて候。我が身に取ては何の所願も候はず。

去ながら主にて候少貳は、數代九代の貫主に候ひつれども、近年は鎮西の輩に威を奪はれ、前少貳政資父子兄弟、過ぎし明應年中、所々にて討たれ、其後家衰微して政資の末子資元、一人僅に残り居候へども、當時は浪々の體にて、肥前國藤津と申す田舎の山中に罷在るげに候。さばかりの名家の民間に下る事、其家人として某、是を深く患ふるが故、今度上洛の次に、牛頭天王の擁護を頼み申す處なり。希はくは此趣叡聞に達せられ、廢れたる少貳家を御立て給はり候へと、泣くく、勅答申しけり。其旨、悉く奏聞あり。重ねての勅定には、朝覺上人が奏し奉る處、公卿詮議の上、追つて論言あるべき由、仰下されしかば、朝覺力及ばずして、其節は先づ罷下りけり。然るに朝覺、傳法の爲め、重ねて天文七年に上洛しける時、此事又々訴へ申し、に勅誼ありけるは、寔に朝覺が度々奏し奉る處、哀に思召すなり。茲に因りて今度少貳家再興の事を、鎮西の武士共へ、論旨を以て仰下さるゝなりと。則ち彼の論旨を、傳奏の方より朝覺へぞ渡されける。上人大きに悦び、件の勅書を帶し、

天文九年に筑紫へ下向し、大内介義隆・澁河右兵衛佐尹繁を初め、鎮西の諸將へ是を披露しけれども、各、更に勅命に随ひ奉らず。朝覺、力及ばずして年月を送りけるが、又今年永祿四年に上洛し、傳奏に據りて少貳家再興の事を、以前の如く猶々訴へ申しけり。時に綸言ありけるは、朝覺上人重々訴へ申すに依りて、太宰少貳家再立の事を、九州の武家共へ兼ねて勅定ありと雖も、彼の少貳と申すは、將軍家に對し代々弓を引き、世を亂したる者なりとて、皆々勅命に随ひ奉らず。強ひて又是を御立あらば、旁、勅裁を恨むる者出來て、國家の亂となるべし。故に天氣及ばれざる處なり。所詮此上はせめて少貳が末葉を其儘にて、安穩に差置くべきの旨、肥前の龍造寺が許へ綸旨を以て仰下さるなり。當時は少貳の餘類、肥前にある由叡聞に達すと、傳奏を以て勅諭ありけり。斯かりし程に朝覺上人、數度の奏訴徒にて元盛曹司の居られたる肥前河副庄へ下著しけり。斯くて龍造寺へも、右の勅命ありしかば、隆信則ち領掌せられ、普天の下にありて、天氣に背くは勿體なし。彼の元盛に於ては、私領に隠れ住むとも、其儘に宥免すべしと、自身頓て河副の福満寺へ

龍造寺隆
信元盛に
對面す

元盛朝覺
の勸に依
りて出家
す

赴かれ、元盛御曹司へ對面あり。懇に言葉を添へられ、彌、彼の寺にぞ差置かれける。斯くて朝覺上人、其後、元盛曹司へ申しけるは、某多年心を碎き、公を世に立て進せむと思ひ、京よ田舎よと奔走致し候へ共、時至らざれば力なし。所詮今の如く有るか無きかの御有様にて、賤家の塵に穢れさせ給はむより、今は中々釋門に入らせ給ひて、無上菩提を求められ候へと、涙と共に申しければ、元盛も袖を濡し、兎も角もよきに計らふべしと、主従頓て高野山に登り、元盛は眞福院にて髪を剃り、明くる永祿五年壬戌に、密乗の法水を請けて灌頂職位を得、大納言式部卿法印に任じ、下國ありて後、朝譽と名を改め、則ち福満寺に住せられけり。然るに朝譽法印に、幼少より附纏ひたる家人三人あり。其中一人は今泉、并に窪平原なり。法印、彼の三人の従者を召して申されけるは、我は往日は一度少貳の名跡を續ぎ、汝等を股肱として、生前の恩を報すべしと思ひしかども、終に其素懷を遂げずして今桑門に入り、既に忍辱の法衣を纏ふ。誠に前業の感ずる處、悔ゆべきにあらず。されば君臣は三世の宿縁あつて、主となり従と契るところを聞け。然るに汝等、今まで頼なき我等

元盛相傳
三人の重寶を
分與す

に附添ひて撫育せし忠心の程、思へば海よりも深く、案ずれば山よりも高し。然れども今は早附添ひありても詮なき事ぞかし。三人ともに急ぎ縁を求め、如何なる主をも頼むべし。名残も今は是までなりと、家に傳ふる腰刀と、名筆の八代集を今泉に與へられ、又少貳家の文書と錦の旗一流・太刀一振とを、窪平原に給はりけり。三人の者共、辭するに詞なく、泪を哽びて泣くく退出しけり。斯くて今泉朝覺は、天正八年庚辰正月廿日、年八十歳にして往生を遂げ、元盛法印は同十四年丙戌四月廿四日、年五十二歳にて福満寺に遷化ありけり。

有馬勢出張丹坂軍の事

永祿五年壬戌、元盛法印の兄に政興御曹司と申して、東肥前三根・養父の邊に徊まよひ居られけり。然るに豊後の屋形大友左衛門督義鎮は、元來少貳と親しかりしかば、如何にもして彼の政興を取立て、廢れたる家をも興さむと思はれし故、先づ筑後國へ招き居る、扱上松浦の波多下野守鎮と、高來の有馬越前入道仙岩父子の方へ、少

有馬仙岩
少貳家を
再興せむ
とて出陣

貳家再興の事を相談ありしに、兩將ともに仔細なく同意して、波多下野守は、則ち松浦黨を初め、田代因幡守・馬渡甲斐守に觸廻し其用意す。有馬仙岩は、同名修理大夫義直に人數を添へて、藤津へ差渡し、大村丹後守純忠と談合して、大村の士卒を催し、多久へ遣して多久上野守宗利を味方に引付け、彼の軍兵を一つに合せて、一度に佐嘉へ取懸け、龍造寺を攻潰し、少貳家を立てむとぞ企てける。斯かりし程に西肥前の輩、悉く有馬に興まよして、先づ彼杵には西郷石見守純堯・矢上又三郎幸治以下、下松浦には松浦丹後守親・山代豊前六郎清・伊萬里兵部大輔直以下、杵島には平井權大夫經治を初め、白石・永田・吉田・宇禮志野・原・上瀧・高來には安徳・安富・神代・島原・多比良・千々岩以下皆打出でて、既に先陣は永祿五年三月十七日、杵島の横邊田まで攻め來る。此事、龍造寺に聞え、隆信急ぎ老臣等を召集め、軍の評定あつて同名の一族、其外鍋島三郎兵衛尉信房・同左衛門大夫信昌を初め、小河・納富・福地以下の輩を横邊田口へ差向けらる。此勢、早速佐嘉を立ち小城郡に到りて高田村に陣取る。千葉介胤連も、龍造寺に加勢として、譜代の家人を相催し、丹坂表へ出張す。

此外蘆刈の鴨打陸奥守胤忠・徳島土佐入道道可・同名治部大輔長房・同左馬助信盛を初め、今河の持永治部丞盛秀以下、空閑・粟飯原・桃崎・橋本も、皆龍造寺に加勢の爲め、丹坂口へ打出でたり。斯くて有馬の者共、急にも攻め來らず、横邊田に陣を取り、六月も既に半ばになりけり。爰に其頃馬渡兵部少輔俊光といふ者あり。有馬方へ所縁ある者なりしが、今度隆信に對し何様忠を盡さむと思ひ、一族の野田右近允と密談して、有馬へ使を差遣す。有馬の輩、馬渡が方便とは夢にも知らずして、彼等が使に任せ、さらば先づ大將分一人砥河邊まで差遣し、龍造寺が領内を亂妨すべしと、則ち島原彌七郎に人數を添へ、船より砥河へ差向けけり。此兵船、既に柳津留の入江に漕ぎ入る。時に馬渡兵部少輔、兼ねて近隣の輩共へ言談し、牛尾山に相圖の火の火を揚げしかば、東よりは鴨打・徳島數百人にて馳せ集りて、西よりは野田・乙成出合せて、有馬船を中に取籠め、雨の降る如く散々に射る。島原を初め有馬衆すは折れつるよと動轉し、漕戻さむとすれども相叶はず、或は船底に隠れ、或は干潟に飛込み、手向ふ者一人もなし。佐嘉方の地下人共、是を見て手を叩き聲を揚げて、

馬渡俊光
隆信に味
方して有
馬勢と戦
ふ

猪鳴叫び竹槍等にて突いて廻るに、有馬勢百餘人、目の前に討たれたり。されども大將島原彌七郎は、兎角して敵を拂ひ、牛津江・大戸ヶ里まで兵船を進め、鴨打が家人と相戦ひしが、爰にて又有馬勢四十餘人討たれ、島原は遁れて退きけり。此時、鴨打が手の者も五十餘人討死しけり。斯くて此由、佐嘉へ注進す。隆信感悦せられ、馬渡へは新恩の地百町給はり、能登守信光と改名せられ、鴨打へは小城の右原八十町加恩あり。徳島以下の者共へも、各、恩賞給はりけり。

一、爰に佐留志の前田志摩守・同子息伊豫守も、頃〔日脱〕有馬と手切し、有馬より佐留志へ居る置きたる代官高場新右衛門を切つて、其死證を其頃隆信、加瀬の麥新開の館に來り居られし間、則ち其所へ持參し、隆信の實檢に入れけり。隆信大悦あり、佐留志へ新田六十町并に砥川の内五町分を前田に給はりぬ。

一、此時上松浦の鶴田因幡守・同名越前守・田代因幡守も、龍造寺に一味し、旗頭の波多下野守が大友方なりしと手切して、佐嘉へ相從ふ。中にも田代は上松浦田代の居館を立退き、佐嘉領小城郡の内納所村に來り住す。此田代、波多と手切して、

田代の舊地を引拂ひし時、波多家來の者共附慕ひて、手痛き合戦あり。嫡子左京亮・同名主殿助・同彌三郎・同源五左衛門・同新左衛門・同藤次兵衛以下討死し、二男越後守疵を蒙る。

一、此時、杵島郡横邊田の郷士土井・井元・田中等も、前田伊豫守家定が調達を以て、皆龍造寺へ相隨ふ。斯くて有馬の者共、馬渡に方便たじかられ大に腹を立て、同七月二日、鳥原彌介を大將にて、安富但馬守貞直が家人・安徳上野介直治が家人、其外高來・杵島の軍士相集りて、須古の平井經治の手の者と一つになり、大勢を催して横邊田を東へ打通り、砥河村へ攻め來り、已に大橋を越えむとす。時に龍造寺方にてありつる前田志摩守は、佐留志より押來り、相浦河内守は別府より駆付け、砥河の地土泉市之介・森田越前守・江口慶林以下は、各居宅を打出で、急ぎ大橋口に支へて敵を防ぐ。俄の事なりしかば、筈ねくぶくなどを張り竝べ、要害の體に取構へ、矢を射懸けて防戦しけり。此時、前田志摩守は餘りに進み戦ひ、鴈津に於て主從十八人討死す。斯かりし間、有馬勢、此口をば破り得ず、北を指し

隆信味方の敗報を陣

て攻め躋り、兩子岳の北なる由利岳に陣を取る。斯くて多久に陣したる大村の軍兵も、頓て由利岳に來り、有馬の者共と一つになり、近日小城に攻め入らむとす。茲に因つて先づ千葉胤連の家人等、石原の六田繩手へ出でて相戦ふと雖も、元より小勢なりしかば打負けて引退く。此事、急ぎ龍造寺へ注進ありしに依りて、隆信自身出馬すべしとて、先づ舍弟左馬頭信周・從弟左衛門佐鑑兼・鍋島三郎兵衛信房・納富但馬守信景・同名治部大輔信純に人數を添へ、先立て丹坂口へ差遣し、其身も續いて打出でらる。鍋島左衛門大夫信昌・小河大炊助信友・百武志摩守兼通以下、隆信に相具しけり。斯くて有馬の軍兵、七月廿五日、既に由利岳を立つて、小城へ討ち入らむと丹坂へ攻め來る。斯かりし間、近邊の郷司等、先づ駆付けて其口々を差固む。此時馳せ集る人數には、今河の持永治部丞盛秀・同名長門守・同清兵衛・栗原甚介・大曲彦三郎・岡の大塚左京亮盛家・板屋九郎太郎・平井の栗飯原宮内少輔・同新七郎・鳥巢大藏允・西郷の空閑刑部左衛門・江頭主計允・津野の橋本兵部少輔・同名左近允・同右近允、其外當郡の者共相集まりて、加須村の

稻荷の北にて勢を揃へ、江頭筑後守を先勢とし、丹坂口を守りて、山より東西郷に陣を取る。又丹坂の北なる姫御前塚をば、峯村の峯内藏允吉家・同弟民部少輔・同名甚左衛門・同次郎兵衛主従八十三人にて差固め、西の谷を越えて右原境に陣を取る。此者共は皆千葉家の舊臣なり。斯くて有馬の軍兵、此兩口へ攻め來り、一手は先づ姫御前塚を越えむとす。時に峯が一族、是を通さじと散々防ぎ戦ひしが、頭人の峯内藏允、七箇所疵を蒙りて引退く。残る者共、是を見て此口を攻め破られては叶はじと、中にも峯甚左衛門は無雙の精兵にて、石の狭間より差〔詰カ〕取引詰射ける矢に、有馬勢廿三人射伏せられ、是に疲れて進み得ず、口木の方へ引返す。扱丹坂口にも合戦始まり、敵味方入り亂れて追ひつ返しつ相戦ひ、初の程は有馬衆切勝つて、既に西郷まで攻め入りしに、龍造寺の軍士小城衆と一つになり、烈しく戦ひしかば、有馬勢忽ち打負けて、悉く崩れて引退く。小城・佐嘉の輩、勝に乗り丹坂峠を越えて、右原へ追詰めたり。爰に於て有馬勢、案内を知らずして柳瀬川に行懸り、我れ先を諍ひて川水に飛込みく溺れ死す。時に小城

丹坂合戦

有馬勢敗軍

隆信多久城を陥る

の郡士の中に持永治部丞・軍忠を抽んで分捕しけり。此時、有馬の者共に討死の輩。先づ安徳與太郎直徳・同名彌左衛門・同日向守・同兵部左衛門・同八郎次郎・同太郎左衛門・大窪金右衛門・長野土佐守・同四郎左衛門・同三郎左衛門・大塚次郎兵衛・菅太郎兵衛・河口忠兵衛・小瀬八郎左衛門・池副孫三郎。又者に忠七・三郎右衛門・孫四郎。以上三人與太郎内。合せて十八人は、安徳上野介直治出勢の内なり。并に安富但馬守出勢の内、數十人其交名を知らず。此外、有馬の士卒凡そ残らず討たれにけり。味方に、牛尾別當琳信の手の者に、叶源次郎討死し、千葉の家人等討死・手負多かりけり。斯くて隆信は、則ち別府へ打通り、多久上野守宗利が下多久の城を攻めらる。時に城主上野守は、今度丹坂へ出陣したる留主なりし故、城中頗る無勢にて、防戦叶ひ難かりしかば、城即時に落去しけり。此時、寄手佐嘉勢に成富式部少輔討死しけり。扱隆信は當城を容易く攻め取りて、急ぎ長尾口を差塞がる。是は大村・多久の者共の、此度丹坂に敗軍して、逃歸るを通すまじとの事なり。斯かりし程に、彼の兩所の士卒等、引足ひきあしを塞がれ、すべき様なく、皆散々にな

有馬勢出張丹坂軍の事

りて、爰かしの山林に北迷ふ。北野上 其中に案内者に出でたりし長尾村の倉富米満・波佐間村の田中掃部助は、踏留まりて討たれにけり。斯くて隆信は、多久の城に入りて人馬の息を休めらる。又有馬の残兵共は、横邊田へ引退き、夫より久津匂島に取籠り、須古の平井經治と塚崎の後藤貴明の方へ、加勢の兵を乞ひけり。

北肥戦誌 卷之十五終

北肥戦誌 卷之十六

隆信有馬の残黨と軍の事

龍造寺隆信は、永祿五年七月廿五日、小城郡丹坂の軍に打勝たれ、多久の城をも追落して、則ち彼の城へ入りて陣を居ゑられけり。此時、有馬に與くみせし輩、懇望を以て降參する者〔其脱カ〕數を知らず。其中に多久上野介宗利計りは、丹坂を敗軍し、直に須古へ赴き、平井經治をぞ頼みける。されば此宗利が先祖を尋ぬるに、多久太郎宗直とて、右大將頼朝公の御時、鎌倉に仕へてあり。ある時、右大將家御遊ついでの次に御戲ありて、此宗直と朝比奈三郎義秀との相撲を御好あるけるに、宗直二番勝ちたり。時に右大將家、殆んど御入興あり。其褒美として六十六箇國の中に、多久と稱する所は下さるべき由、御旨を蒙り肥前の多久をも知行し、始めて下向して、子孫代々

多久宗利
の先祖

梶峯城に居住しけり。元は攝津國の内、多久に住しける故、多久と號し、平氏なり。六十餘州に多久といふ所、三箇所ありしと云々。彼の宗直大兵なり。其齒今にあ。肉より上の長さ一寸程あり。斯くて隆信は多久の城に在陣あり。鍋島左衛門大夫信昌は、堤尾岳に取登りて備を固うし、有馬の殘黨を鎮めて陣を取らる。

一、明くれば七月廿六日、隆信、多久の陣より塚崎の後藤伯耆守貴明の許へ使を立て申遣されけるは、隆信、昨日丹坂に於て有馬の軍兵を、一戰の中に切崩し、唯今多久に在陣申すなり。然れば追付當陣を横邊田へ移して、有馬の殘黨殘らず討ち果すべし。此時御邊我等と無事をなし給はむや。若し又有馬へ加勢あらば、先づ隆信、其表へ發向し、御邊と一戰を遂げて勝負を運に任すべしと言送られ、其返答をも相待たれず、即時に多久を打立たれ、杵島へ陣更あり。ちんがへ百堂原に到りて備を立て、朝日の旗を押立てらる。時に貴明、兎角の返答せざりけり。然る處に隆信の後口の方より有馬、大村の殘黨共、鬨の聲を揚げて不意に切懸る。然るに隆信は、元來機變萬化の大將にて、些ちつとも騒がれず、先備を忽ち後に繰替へて、有馬勢と相戰

隆信有馬の殘黨と合戰

有馬勢敗北

ふ。佐嘉勢の中よりは、木下伊豫守、副島右近允以下、死を争ひて打戦ひ、有馬勢には須古兼白石、村田、本田、川崎并に高來衆、安富、安徳の家人等、十死一生になりて戰ふ。有馬勢は素より昨日敗軍の殘黨にてはかくしからず、亦打負けて敗走し、或は元の如く久津匂島へ引退き、或は醫王寺山へ取登りけり。斯くて隆信は、不意の敵を討ち散らして、北方といふ所へ陣を移さる。此時、後藤貴明より猪熊半助を使者とし、今度の軍案利の祝儀を述べられけり。勝カ斯くて隆信、北方の陣を拂つて横邊田へ退き、福母山に陣せらる。

隆信敗軍の事

斯くて隆信は、福母村の北なる小山に本陣を居ゑられ、諸勢は南の江に副ひて陣を取り、扱須古の高岳城主平井權大夫經治を攻めらるべしと、同七月廿八日の晨、彼の城の北の大手、福母の南大橋口へ押詰めらる。先陣は納富但馬守信景にて、案内者は前田伊豫守家貞、井元上野介、彼此合せて二千餘騎なり。彼の平井經治といふ

隆信平井
經治と戦
ひて破ら
る

は、當代無雙の勇將にて、佐嘉勢の寄すると聞いて、さらば半途に出合ひ、一々討ち散らすべしと評定し、一族の川津左馬助經忠・平井刑部大輔を初め、本田豊前守純秀・同新左衛門純親・白石左近大夫純通・湯河川崎・志自岐・永池村田以下の者共、大橋口へ出向ひ、互に弓鐵炮を放ち懸け、火を出して防戦す。斯くて兩陣、太刀打になつて討ちつ討れつ戦ひしが、龍造寺の者共、散々に利を失ひ足々(引足カ)になつて引退く。平井が兵勝に乗り大勢に附慕ふ。時に龍造寺の一將鍋島左衛門大夫信昌、槍を以て敵を突き、退く味方を助けて戦はれしかば、畔に躓き逆我倒る。敵是を見て、能き武者とや思ひけむ。左右より駆寄りて信昌を討たむとす。鍋島既に危き處を、小河大炊助・百武志摩守・副島右近允駆付け付けて、彼の敵を切拂ひ信昌を援ひけり。斯くて龍造寺の士卒、尙利あらずして引退くに、平井が軍兵、急に追駆け矢を射懸く。是に於て龍造寺の者共、中々難儀に及びしに、鴨打左馬大夫・副島式部少輔・野邊田左衛門尉以上三人、中の手より返して慕ふ敵を追散らす。此時、龍造寺の後拂は、龍造寺左衛門佐鑑兼納富但馬守なり。又鍋島左衛門大夫も、手勢を以て之に加

はり、大勢の敵を追拂はる。斯かりし間、是よりは敵もさのみは慕はずして、心安くなりしかば、前田と井元に下知ありて、俄に小通村に屋敷を取構へ人數を入れ置き、則ち前田井元に是を守らせらる。扱總勢は引退きけり。然るに又近邊の野伏共、大勢取集りて、落人あるを討取りて、物具剝げと相呼ばはり、小田に陣を取り、佐嘉勢の歸るを待懸けけり。其由、龍造寺の陣に風聞しければ、士卒猶豫して此筋を通り得ず、或は今日は日暮れぬ。明日通らむといふもあり。或は別道に懸りて引かむといふもあり。時に鍋島左衛門大夫進んで申されけるは、何條其野伏め物數ならず、信昌一人にて、唯今駆散らし通らむものと申されしかば、隆信尤も同意あり。鍋島、眞前に打つて小田の村中を一文字に駆け通らる。其勢ひに機を吞まれ、野伏共悉く上なる山へ引登りけり。斯かりし程に、龍造寺の諸勢、恙なく佐嘉へ歸陣す。

鍋島信昌
の勇武

一、隆信、今度須古の軍に打負けられし事、隣國へ隱なし。大友より筑後に差置き
兩人の守護代森越前入道・宗智・成大寺豪榮より、早速東肥前の旗下共へ觸送りし

狀に曰く、

急度令啓候。隆信須古表防戰打負敗北之由、其聞候。筑後上下衆其外諸口可被差寄之由稠敷申觸候。兩人事先以大善寺邊迄、明日晦日出張候。御三人即時被掛出、一行不可有御油斷候。替義候半者、猶重而可承候。恐々謹言。

七月廿九日

森越前入道

宗 智判

成 大寺

豪 榮判

横岳殿

宗 殿

筑紫殿

或はいふ、今度隆信、須古敗軍の時、先陣を横邊田へ退かれしかば、鬱憤に堪へずして、後藤を差語らひ、押返し平井と合戦あるべしと評定ありし處に、佐嘉より注進追々にて、大友旗下の輩、隆信の留守を謀る由申來りし故、さらば先づ歸城

あるべしと、多久の明城には舍弟兵庫頭長信を殘置き、大村・松浦を押へて、隆信は佐嘉へ馬を入れられしとも。或はいふ、此軍、永祿六年の事なりとも、非なり。

三根郡中野城攻の事

永祿六年癸亥四月一日、電雷夥しく手拳程の三角の雹降り、人馬多く打殺さる。時に一天闇の如し。同二日、九重の塔炎上す。同年六月廿二日、龍造寺隆信、少貳政興以下の敵退治の爲め、東肥前へ出馬せらる。舍弟左馬頭信周を初め、納富但馬守・福地長門守・石井一黨其外相從ひ、先づ馬場肥前守鑑周が在所三根郡中野城へ取懸けたり。鑑周の家人手田川波・藥王寺、城戸を持つて大に相戦ひ、佐嘉〔勢脱カ〕に死亡する者數を知らず。寄手の中より石井一門時〔文字カ〕に進んで合戦し、同名源次郎一番に討死し、福地が與方中溝善兵衛も討たれたり。其外福地長門守・石井安藝守・同苗壹岐守・同肥後守・同但馬守・同三河守・同越前守・同刑部少輔・同左京亮・同五郎左衛門・同惣

隆信肥前
に出陣し
中野城を
攻む

中野城主
馬場鑑周
隆信に降

左衛門以上十一人進み戦ひ、各、疵を蒙り、相浦河内守・北島河内守・水町左京亮・秀島主計允も軍功を抽んで分捕しけり。斯くて合戦半なりけるに、福地長門守、城中に入り鑑周に對面し、和平の談合致しければ、肥前守是に應諾して、則ち福地を頼み軍門に降り、弟の源次郎周鎮を人質に差出す。斯かりし程に、福地、早速源次郎を召具し、甲を脱がせて、隆信へ取合せ、雙方矢を留め合戦を止めけり。既に鑑周、龍造寺へ降参しければ、當郡の少貳方宗兵部少輔尙夏・横岳下野守頼續・防所尾張守も忽ち降人となる。斯くて隆信、夫より横岳中務大輔鎮貞が西島の城に押寄せらる。鎮貞の家人板部古館・原島關屋・江頭以下口々を守り、佐嘉勢の先駆と相戦ふ。時に隆信、當城の體容易く落つまじとや思はれけむ。今度降人に出でたりし馬場肥前守横岳下野守を以て、鎮貞を押へ、六月下旬、先づ佐嘉へ歸陣せられけり。今度中野の城にて石井源次郎討死、其子なきに依りて、隆信、彼の一門の頭石井藏人忠清まで、納富治部大輔信純を以て、哀愁の感狀を給はりぬ。

鹽見城落去の事

有馬義直
鹽見城を
攻む

爰に其頃、肥前國杵島郡長島庄鹽見山城主を、澁江豊後守橋公師といふ。頃日塚崎の後藤伯耆守貴明と一味同心し、有馬に従はずして、居城鹽見に引籠りけり。然るに此時、有馬仙岩の猶子修理大夫義直、高來より渡海し藤津にありけるが、さらば鹽見を攻むべしと、永祿六年十月廿日、西右京亮を大將にて、藤津・杵島兩郡の輩を鹽見山へ差向く。此勢、既に廿日の未明、彼の城に取懸け、馬渡兵庫助以下の者兵、関の聲を揚げて攻口に押詰め相戦ふ。されども城主公師、士卒を下知し城戸を持つて破られず。然るに當城には、近年薩州の種子島へ渡りし鐵炮を多く籠置きけり。有馬方の者共、兼ねて是を知りしかば、如何にもして彼の鐵炮を除けむと談合し、其謀には、近き邊りの提子川といふ所に、鹽見大明神の神子居けるを相語らひ、金銀を與へて計略の旨をいひ合して、前廉より彼の城内に入置きけり。此神子、忽ち財寶に迷ひしかば、有馬衆の含めし如く、俄に物付の眞似をぞ仕たりける。扱手足

を空に踊り青稻のありしを嚙食ひて、狂ひくし申しけるは、我は是れ忝くも鹽見大明神なり。抑、當城、唯今敵に攻められし故、武具を以て是を防ぐ。甚だ愚なる事なり。我れ和光の塵に交つて、此山に跡を垂れ澁江氏を守護する事、既に數百餘歳に及びぬ。然るに刃を以て人を斬り、鐵炮を飛ばせて人を殺す事、當山の穢是に過ぎたるはなし。看よく左なくとも、神力を以て敵の惡黨を千里の外に蹴散らすべきぞ。急ぎ鐵炮等の兵具を城外へ運び出すべしと、汗水になりて口走りけり。公師を初め城中の者共、是を更に信用せず。されども公師の父下野守公親したか、強に正直なる男にて、祖神の託宣疑ふべきにあらずとて、鐵炮・槍・長刀悉く城外へ運び遣しけり。有馬衆是を聞きすまし、計り得たりと悦びて先を争ひ攻め戦ふ。城中の者共、大將公師を初め大明神の神託大に相違したり。こは如何すべきとつぶやきながら、城戸を固めて防戦す。斯くて三日三夜の合戦に、城兵多く討死す。中にも三岳兔源左衛門・白石道長・彼杵何某・波佐美何某討たれて、城主公師は七箇所の手を負ひしかば、城中怵へ難くして皆散々に落行く。公師は塚崎の方へ遁去り、第三郎

鹽見落城

公重は討死して、十月廿三日、城は則ち落去しけり。其後公師は肥後國山鹿へ赴き、赤星重行を憑んで暫し蟄居しけるとぞ聞えし。

澁江家由來の事

澁江家の祖先

抑、彼の鹽見城主澁江家の祖先を如何にと尋ぬるに、人王三十一代敏達天皇には五代の孫、井手左大臣橘諸兄公の末葉なり。此諸兄、才智の譽世に高く、聖武天皇の御宇、既に政道の輔佐たりしより後、其孫子從四位下兵部大輔島田丸、猶朝廷に仕へ奉る。然るに神護慶雲の頃、春日の社、常陸國鹿島より今の三笠山に移らせ給ふの時、此島田丸、匠工の奉行を勤めけるに、内匠頭何某、九十九の人形を作りて、匠道の祕密を以て加持しける程に、忽ち彼の人形に火便り風寄りて、童の形に化し、ある時は水底に入り、ある時は山上に倒れて神力を播し精力を勵し、召仕はれける間、思の外大營の功、早速成就なりけり。斯くて御社の造營、成就の後、彼の人形を川中に皆屠り捨てけるに、動く事尙前の如く、人馬六畜を侵して、甚だ世の禍となけ

り。今の河童是れなり。此事稱徳天皇、遙に窺聞まし、其時の奉行なれば、兵部大輔島田丸に、急ぎ彼の化人の禍を鎮め申すべき旨、詔を下されけり。斯くて兵部大輔、勅命を蒙り、則ち其趣を河中水邊に觸廻りしかば、其後は河伯の禍なかりけり。是よりして彼の河伯を兵主部と名づく。主は兵部といふ心なるべし。夫より兵主部を、橋氏の眷屬とは申すなり。然るに島田丸に六代の孫大納言好古が時、天慶四年辛丑、朱雀院より征西將軍の勅號を賜はりて、逆臣藤原純友を伐ちし忠賞に伊豫國を賜はり、子孫九代の間は彼國に住しぬ。其九代の嫡孫を橋次公葉といふ。鎌倉頼經將軍の近習にありて、薩摩守に受領す。此公葉が時、先祖累代の領知伊豫國宇和郡を常盤井關白殿へ禁裏より賜はりしかば、其代地として、公葉へは豊前國副田庄・肥後國久米郷・大隅國種子島・肥前國長島庄を給はりて、嘉禎三年丁酉、始て豫州より肥前に來り、長島庄に移りて鹽見山に城郭を構へて居住しけり。然るに公葉には六代の孫橋薩摩彌次郎公繼、其子公經・同彌五郎以下、建武曆應の合戰に、將軍方に屬して勳功を抽んで恩賞に預りぬ。今の豊後守公師は、公葉には十六代の後胤なり。

有馬家由來の事

抑、肥前國高來島志自岐原今の原の城。城主有馬越前入道隨意齋仙岩と申すは、大織冠鎌足公の苗裔伊豫權守純友の嫡流にて、有馬肥前守貴純には孫子左衛門尉尙鑑の子なり。童名は軍童丸、中頃修理大夫に任じ、公方義晴公の御諱字を給はりて晴純と號し、其後亦義の一字を申給はり、越前守義貞と改めたり。されば此仙岩、當時其威強勢の大將にて、先帝後奈良院の御時、去る天文十二年甲辰十一月に、京都へ吹舉し、勅使日野中納言晴光卿を居ながら申下し、私領濱の松丘祇園社へ出向ひ、宣命を拜し奉り、修理大夫に任じて、則ち勅使晴光卿を岩崎へ迎へ請け、種々の饗應善盡し美盡し、様々の引出物其數を知らず。上古の事は未だ聞かず、近代には田舎の武士の官途を進むる時に、居ながら勅使を申下し、宣命を拜する事、希代の珍事なりけり。抑、此仙岩の曩祖伊豫權守藤原純友が事を傳へ聞くに、昔天慶の初め、武藏權守平將門と心を合せ世の亂れし時、兩人契約しけるは、此度天下を奪ひ取りて、將門は王

有馬家の祖

孫なれば帝王になるべし。純友は大織冠の末なれば、關白になるべしと談じ、將門は關東にありて自ら平親王と稱し、東百官と名づけて、私に官職を立て百官を召仕ひ、下總國猿島郡石井郷に於て旗を揚げ、純友は任國豫州に下りて、ともに逆意を企て天下を暗闇くらみになさむとす。されども王事監なくして、將門は俵藤太秀郷が爲め、承平二年壬辰二月十三日、關東に於て梟首せられ、純友は六孫王源經基・大納言橘好古・民部少輔藤原伊傳・大藏朝臣春實・越智朝臣好方以下に攻められて、天慶四年辛丑五月三日誅伐せらる。然るに純友の子遠江守直澄、豫州を没落し、其子孫肥前國高來島に漂著して、永く有馬に居住しけり。斯かる朝敵の末なりし故、終に上洛なり難く、年久しく邊鄙の奴子となり果て居たりしに、さいつ頃よりや、有馬浦を知行して其在名を稱して稍、威を振ひ、近年は高來・彼杵・杵島・藤津四箇郡の内を押領し、高來の原・日江・藤津の松丘・鷺巢、此等の諸城を堅固に持ち、安富・安徳・島原・多比良・千々岩・神代・志自岐其外多久・松浦・平井・馬渡・伊福・西郷・永田・宇禮志野・白石・上瀧原以下の城持共を手に屬し、既に兵馬二萬餘騎の大名となりけり。亦往古、將門、純

藤原純友
亡ぶ

友と父子の契約をなして平氏を援けし故、有馬家中頃は平姓なり。今仙岩入道は、純友二十八代の孫とぞ聞えし。

大友義鎮入道となる附耶蘇宗門に傾く事

其頃豊後の屋形大友左衛門督義鎮、其國政甚だ暴惡にして、諸人疎み嘲る事大方ならず。其上頃日、頼に入道し、亦南蠻〔マ、〕南祥國の耶蘇宗門に傾き、佛神を蔑にし堂塔を破却す。されば其根元を尋ね聞くに、義鎮近年、専ら女色に溺れ、國中上下をいはず、若く麗しき女をいくらともなく、府内の城中に招き集め、ある時は庭上の花の下に踊を興行し、ある時は深閨の月の前に酒宴を事とし、日夜の不行義法に過ぎたり。簾中此事を大に嫉ねたまれ、ある修験者を賺し、金銀を與へ密に頼み、夫の義鎮を咒咀せられけり。是より義鎮、忽ち亂心となり、茫然としてある時、府内の城中を迷ひ出で、更に行方も知れざりけり。然る間、奉行中を初め豊府の侍大に驚き、こは何としたる事ぞと、諸方を尋ね探しけるに、臼杵の丹生島の邊にて尋合ひ、こはそも

何としたる御有様ぞと申しければ、さればとよ紅葉の影に誇らしてと答へられし程に、尋ねし者、是は一向亂心なりと思ひしかば、則ち丹生島の城に入れ申しけり。其後義鎮、本心に復り、簾中の咒咀を傳聞かれ、大に立腹あり。所詮世の中に佛神のあればこそ、咒咀といふ事もあれと、強に佛神を疎み思はれけり。其後義鎮、未だ年三十四にて、大徳寺の悦長老を請じ、剃髮して法名三非齋瑞峯宗麟と號し、則ち家督を嫡子左兵衛義統に譲り、其身は臼杵の別業に居られけり。斯かる處に、元は禪僧なりし如露法師、因果居士といふ二人者、南蠻西祥國の邪宗にて、臼杵の丹生島に來り、上下老若共に邪法を説き聞かするに、府内六奉行の中、田原近江守親賢入道紹忍、一向是に歸依して、主の宗麟をも勸むるに、宗麟素より佛神を疎む折節といひ、其上、賢には遠く愚には近き大將なりしかば、頓て彼の耶蘇宗に傾き、偏に泥鳥を貴み、彌、佛神を敬はず。是よりして國中の神社、佛閣を悉く打破り、佛像、神體一々に燒捨てられしぞ淺猿しき。斯かりし間、府内の大老奉行中、大に是を悔み、中にも戸次伯耆守鑑連、時々諫詞を加へしかども、宗麟更に許容あらず、近習、外様の輩、

義鎮入道
として宗麟
と號す

宗麟耶蘇
宗門に歸
依す

大友家の滅亡近きありと、眉を擡めぬはなかりけり。

一、永祿六年八月十三日、肥前國塚崎の城主後藤伯耆守貴明、須古の平井權大夫經治を征せむと軍兵を率して取懸る。既に貴明が先手中野一門樺島、蘆原に討ち入る。時に平井一味の輩白石左近大夫、馬渡兵庫助、林田左馬助以下出合ひて散々に相戦ふ。時に後藤が軍士利を失ひ、中野山城守重明、其子大和守、嫡孫三郎、同新七郎、同名右衛門佐忠明、舍弟僧二位蓮成、同弟東何某以上七人樺島に於て、一所に討たれ敗軍して引退く。其時又武雄兵部大輔討死しけり。平井方にも野田掃部允は、武雄右馬大夫が放つ矢に中りて死し、其外白石彌三郎、馬渡左馬允も討たれにけり。爰に又有馬の侍南肥後守、同筑後介兄弟は、雙方和與の談合に、頃日須古に來りて此陣中にありけるが、止む事を得ず平井方にて相戦ひ、兄は疵を蒙り弟は討死しけり。

一、同年十二月廿八日、高來の有馬左衛門佐義純、伊佐早の西郷石見守純堯を征伐の爲め、彼の表に來り梅津に於て相戦ふ。時に有馬勢に安徳上野介直治が手の

者安徳九郎右衛門・同新五郎・同與三右衛門・同三郎兵衛・同太郎次郎・石橋助次郎・中間の彌六討死す。

龍造寺隆信重ねて須古攻附和平の事

永祿七年甲子二月、龍造寺隆信、重ねて平井經治を攻めらるべしとて陣觸あり。六千餘の兵を相催し、須古高岳城へ取懸けらる。抑、此經治といふは、元來少貳の類にて、父山城守經是が時より當城へ移り、既に三十餘箇年、有馬の婿となりて龍造寺の通路を斷ち、後藤とも不和にして、敵を東西に受けたり。されども經治勇氣無雙の大將にて、敢て事ともせず。然るに今度龍造寺の又々寄すると聞いて、經治士卒に下知し、隆信の軍立恐るゝに足らざるぞ。半途に悉く討散らすべしと、川津・新川崎・叢具・白石・今村以下究竟の者共を勝つて、北の方大手の橋を越え、福母村の迦はつれに草伏を置きけり。龍造寺の軍兵、是を知らずのさゝと打つて通るに、件の伏兵、一同に唾と起り、隆信の先陣に切懸る。佐嘉勢、是に動轉し既に敗れむと見えける。

隆信平井
の須古城
を攻む

處に、二陣に續きたる鍋島三郎兵衛信房・同名左衛門大夫信昌・倉町新太郎信俊、味方を援つて先に進み、競ひ來る敵を切つては臥せ切つては伏せ、敵味方の目を驚かす。平井が軍兵、是に恐れ須古をさして引退く。佐嘉勢、勝に乗り逃ぐる敵を慕うて、高岳の城際まで押詰めたり。寄手の案内者は、徳島治部大輔・同左馬助・前田伊豫守・井元上野介にて、先陣は龍造寺右衛門大夫・同名備後守・納富但馬守・小川大炊助・廣橋一祐軒なり。爰に鍋島左衛門大夫は、己が一手を以て先陣より先に進み、城の大手北の繩手にて城兵を切立て、敵の馬廻かと思へたる一勢を城中に追籠むる。是を見て先陣の内より、成富甲斐守・同式部少輔・木下伊豫守・石井新右衛門、鍋島に續いて引く敵を追駆け大城戸まで押詰めたり。斯かりし程に、龍造寺の諸勢も一同に取懸け、高岳へ攻登らむとす。時に隆信、遙に當城の體を巡見あり。廣橋一祐入道に下知せられ、難を知りて退くは軍の常なりと、士卒を引上げ城を攻められず。先づ福母へ引退き、少時陣を取らる。爰に於て雙方和平の衆議ありしに、隆信も經治も互に納得せられ、佐嘉と須古和與に決定し、則ち經治の弟平井左衛門大夫直秀左近大夫とも